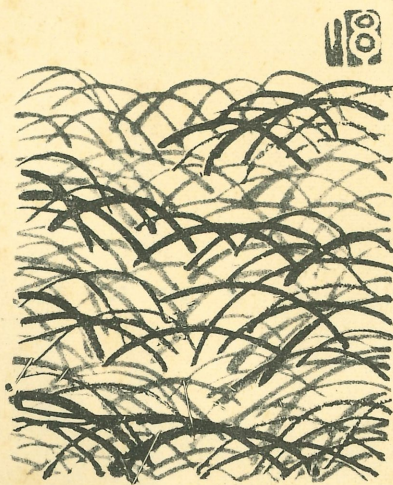
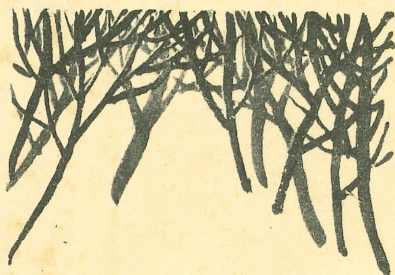
ミイラやかた
木乃伊館
柴田錬三郎

ミイラやかた
木乃伊館
柴田錬三郎
木乃伊館
柴田錬三郎
文藝春秋
0093－301950－7384
580円

木乃伊館

柴田錬三郎

文藝春秋

目次

木乃伊館

木乃伊(ミイラ)館(やかた)

装幀　御正伸

一

黄金伝説というものは、いつの世でも、古今東西を問わず、人間の好奇心を、そそるものである。スチーブンソンの「宝島」は、それがもし現実に存在するならば、アポロ11号よりも、はるかに、われわれの胸をおどらせる筈である。

物語と夢が、巧みに融合されたのが、黄金伝説である。

われわれは、少年時代から、黄金伝説によって、物語と夢を融合させるすべを、教えられた。

ただ、「宝島」や「モンテ・クリスト伯」の絵そらごとだけでなく、ごく手近な場所に、それがあることを、われわれは、大人たちから、教えられた。

現に、いまも、武田家滅亡に際して、莫大な甲州金が、どこかの山中に埋蔵されているとか、幕末に、小栗上野介が、江戸城金蔵から、ひそかに、はこび出した軍用金が、上州の地に隠匿されているとか――怪しげな見取図を片手に、長い歳月を、その発見に、ついやしている人がいる。

私の故郷――備前の海辺の村にも、黄金伝説があった。

鶴海（つるみ）という優美な名を持っている私の故郷は、瀬戸内海の深い入江の奥にある。いくつかの島にさえぎられて、沖あいがのぞめないほど、奥まった村で、三方を山でかこまれ、ひとにぎりほどの盆地に、二百戸の人家が、ちらばっていて、私が物心ついた頃から、全く変貌がない。

わが村の黄金伝説を、きかせてくれたのは、私の祖母の弟であった。

横山源十郎といい、源十郎に云わせると横山家は、源平合戦の時、源氏の親族であり乍ら、平家に荷担した横山大納言が、一族をひきつれて、この海辺へ遁れて来たのだそうであった。横山大納言という人物が、当時実在したかどうか、私は、べつに調べる興味もないが、横山源十郎の立派な風貌は、そういう先祖を持つにふさわしいものであったことを、みとめざるを得ない。

横山家は、柴田家のうしろに、本家然として、建っていた。

藁葺きの母屋のふるめかしいたたずまい、一切鉋を使用せず、手斧（ちょうな）のあとをとどめた大黒柱やつくりつけの戸棚などが、炉火でくすんだありさま、そして、横山源十郎の異様に秀でた鼻梁など、黄金伝説が語られるにふさわしい雰囲気を持っていた。

鶴海村の南に、どっしりとわだかまった山を、黒井山といい、そこが、黄金伝説の舞台であった。

黒井山は、その名のごとく、漆黒に近い山容を、人跡未踏のままに、村へのしかかるように、南の空をふさいで居り、西山や外山のやさしい、なだらかな、山肌の見えるすがたとは、全く質を異にしていた。

西山や外山には、梨畑がつくられたり、墓地や貯水池があり、四季それぞれ、子供に遊び場所を提供してくれていたが、黒井山だけは、厳然として、われわれ少年の入るのを、拒否していた。

黒井山には、人間の数倍もあるおそろしい怪物が棲息して居り、子供の悪戯を封じる材料にされていた。物心ついた頃、毎日眺める黒井山のすがたそのものが、私に、堪えがたい威圧感をおぼえさせていた。

勾配の険しさもあったろうし、密林の深さもあったろうが、私は、ついぞ一度も、その中へもぐった経験がない。また、黒井山にだけは、茸など生えない、模様であった。私たちは、もっぱら、外山と西山で、茸を採り、兎や狐を追いまわし、黒井山に踏み込もうなどという料簡は、ついぞ起さなかった。

しかし、黒井山の頂上へのぼる道は、非常な迂回をして、西山の麓から、尾根づたいに通じていたのである。

黒井山は、人家の屋根のようなかたちをしていて、村へのしかかる前面は、全く人の踏み込むのを拒否しているが、西山の麓から、勾配の険しさに喘ぎ乍ら、石塊だらけの坂道を登って行くと、急に、平坦な、山肌をひらいてくれた。小松がまばらにちらばり、勾配はなくなり、北にわが村、南に隣村を見下し、東に、湖水のような瀬戸内の海原を望み、胸を張って歌のひとつもうたいたくなる爽快な気分であった。

村から仰ぐ山容は、いかにもおそろしげであるにも拘らず、頂上に立つと、のどかな景色を展望させてくれる山であった。

この山頂から、隣村虫明（むしあげ）の方へ、すこし下ったところに、かなりな規模の古刹があった。四国、中国の古刹は、すべてが弘法大師が建立したことになっているが、この黒井山真言寺も、例外ではなかった。

皮肉にも、この古刹は、神仏混淆で、春秋二度の祭礼は、明神祭礼と全く同じであった。おかげで、われわれ少年の愉しみは、氏神祭礼のほかに、ここにもあったのである。

ところで――。

黄金伝説の舞台であるが、この真言寺の隣りに、だだ広い空地があったが――そこであった。

横山源十郎が、真剣な面持で、実姉の孫に語ってきかせたところに依れば、曾て（いつの時代か不明だが）その空地には、宏壮な館があり、館の主人は、この海辺二十里四方の支配者であったそうである。

つまり、海賊の首領であったらしい。

館は、徳川期に入っても、岡山藩主池田家の庇護の下に、その格式を維持しつづけ、漁業権を確保していたが、天保年間に、仔細あって、江戸から公儀役人が、やって来て、とりつぶしたのだ、という。

しかし、その時、館のあるじは、莫大な財宝を、黒井山中に埋蔵して、公儀に渡さなかった。

「いまでも、大判小判が、何百万両もたしかに、黒井山のどこかに、ねむっとるのじゃな。いや、ひょっとすると、あの館址のどこかに、かくされているのかも知れん。……わしも、若い頃は、ひとつ、館址を掘ってやろう、と計画をたてたものじゃったが、周囲から祟りがある、と止められて、ようせなんだが……、もしお前が、将来、金をつくったら、掘ってみい。ざっくざっくと、出て来るかも知れんぞ」

源十郎は、そう云って、私の好奇心をそそったものであった。

大人になるまでもなく、さいわい学校随一の餓鬼大将である力を利用して、夏休みのあいだに、館

址をぜんぶ掘りかえしてくれようか、と私は、野心を燃やしたことであった。
　私はしかし、源十郎の言葉を、そのまま鵜呑みに、信じることはできなかった。なぜならば、源十郎は、熱狂的な「立川文庫」のファンだったからである。
　やがて、私は、岡山市内にある県立中学に入り、文学にとり憑かれたために、わが村の黄金伝説など、脳裡からあとかたもなく払いのけてしまった。

二

　伝奇作家になった私は、しかし、故郷の黄金伝説を、材料にしようという気持は、夢にもなかった。
「黒井館」の黄金伝説は、祖母の弟である横山源十郎が、「立川文庫」の影響から、勝手に空想したもの、と思い、それは、少年時代の思い出としてのみ、とどめておくものと、思っていた。
　かずかずの荒唐無稽な伝奇小説を、書きちらし乍ら、私の脳裡には、ついぞ、「黒井館」の実在の有無を調べようとする意欲がわかなかった。
「黒井館」が、まぎれもなく実在したことを知ったのは、全く偶然のことからであった。五年ばかり前のことである。
　私は、B出版社が日本各地で催す文芸講演会の常連として、その年も、春秋とも旅行に出た。
秋の講演は、岡山市も入っていて、私は、駅前のホテルに泊った。
そこへ、倉敷に住むKという、初老の人がたずねて来た。
かなり大きな荷物をかかえて居り、

「是非、一度、先生に、ごらんになって頂きたいと思って居りました品でして——」
と、云って、包みを解いた。
あらわれたのは、冑であった。
それは、戦国時代に、わざと敵を威圧するためにつくった奇怪な形の冑であった。
冥官といって、鉢そのものが、凄い形相の人面になって居り、くわっとみひらいた双眼には、真紅の玉が瞳としてはめ込まれ、巨きな口は、牙をむき出し、半月をがっきとくわえていた。
　その珍しさもさることながら、私の眉宇をひそめさせたのは、冑が、てっぺんの八幡座から、真向、雨走まで、一直線に割れていることであった。
　なお、冑には、赤鬚の面頬もついて居り、これがまた、鼻梁、口まで、まっ二つに割れているのであった。
「これは、大変珍しい冑ですが、冑も面頬も、まっ二つに割れているのは、どうしたことでしょう？」
　私は、K氏に訊ねた。
「刀で、両断したのでございますね」
　K氏は、こたえた。
「刀で？……ふうん、刀で斬れるものですかねえ」
「先生の小説の中でも、剣豪が、兜を両断する場面が、出てまいりますよ」
「あれは小説の上での、出鱈目ですよ。明治初年に、榊原健吉が、明治天皇の御前で、兜を斬ったが、八幡座に、筋をつけたぐらいだった、と記録にあって、いかに、宮本武蔵の業前でも、兜を両断できるものじゃない」

「しかし、こうして、両断した証拠が、のこって居ります。面頰までも、見事に、まっ二つにして居ります」
「これが、刀で斬ったのなら、古今無双の達人ということになりますね。……なんという兵法者か、お宅に、記録がありますか？」
「いえ、それが、ないのでございます。ただ、この兜に添えて、これが、ありました」
さし出された古びた料紙には、ただ、
　かげろふ太刀にて、これを断つ。天保壬辰吉日。
それだけしか、記されてなかった。
何者が斬ったとも、記していないのであった。
「かげろふ太刀？」
私は、首をひねった。
名刀には、それぞれ、故事によって、なんとか太刀という名称がつけられている。
それなのか。かげろふは、陽炎なのか、蜉蝣なのか。
私が、首をひねっていると、K氏は、
「先生、かげろふ太刀という、剣法がございますか？」
と、問うて来た。
「ははあ、かげろふ、は太刀の名称ではなく、剣法か、と貴方は、お考えになったのですね」
「ただの剣法では、兜と面頰まで、両断できるものではありませんから、浦波とか、虎乱といったように、ある流儀の秘伝のひとつかと存じました」

「かげろふ太刀、ね。……そういう秘伝が、あったかな？」
私は、思い出せなかった。
私は、旅行していても、資料を持ちあるくし、「兵法叢書」といったたぐいの書物も加えている。
しかし、その時は、あいにく、その書物だけがなかった。
K氏は、私に、わざわざ見せに来たものの、満足する説明が得られないままに、去った。
その冥官冑は、K氏の祖父が、明治に入ってから、手に入れたということであった。
私にとっては、戦国時代の実戦のためにつくられた冑と面頰が、刀で両断されている、ということは、大いに参考になった。
帰京して、二年ほど経ってから、私は、書庫を整理しているうちに、古い日誌を手にした。
横山家から出た日誌であった。
横山源十郎は、戦争中に、逝ったが、戦後、子無しのために、後家になったお婆さんは、その古びた大きな家を、維持しかねて、たたむことになった。
横山家の土蔵には、何百年ものむかしからの品が（その殆どはガラクタであったが）山積していた。
お婆さんは、その中から、刀を三振ばかりと、代々の当主の日誌を、すでに作家生活に入っていた私に、
「なにかの参考までに——」
と、送ってくれたのである。
私は、書庫の板敷きに、胡坐をかいて、日誌をひらいて、読みはじめた。
横山家は、六箇村を治める大庄屋をつとめていたので、苗字帯刀を許され、娘を嫁がせるのに、岡

山藩家中の士分をえらんでいた。
どんな品ものを、嫁入り道具として持参させたか、城下に於ける士がどんな生活をしていたか、日誌の内容は、なかなか面白かった。
殊に、文政から天保あたりにかけての日誌には、藩士よりも、むしろ横山家の方が、威張っていて、持参金をいかに先方が有難がったか、こまかく述べられていて、私を微笑させた。
天保三年の頁をめくりはじめると、
「江戸にて、鼠小僧次郎吉なる大名屋敷を荒せし巨賊、捕えられて、処刑せられしとぞ」
とか、
「日本外史の著者頼山陽歿す、と報あり。文政中頃、当家へ訪れし風貌をしのびて、弔す」
とか、われわれの知っている名が現われて来て、興味があった。
やがて、十一月に入った某日の記述が、私を、はっとさせた。
「岡山城下より、奉行所定中役同心七人を帯同して、公儀お役人酒巻九十郎殿、来村、数日のご逗留。なお、一日おくれて、江戸青山にて町道場をひらく、下山新八郎殿、到着さる。下山新八郎殿は、かげろふ太刀の達人なりときく。かげろふ太刀とは、如何なる技なりや、田舎者には、知る由もなし。黒井館とりこわしに、かげろふ太刀が、何故に役立ち候か、おそろしきことの出来するやも知れず、と家人召使いども、身を縮めて、ひそひそ私語つかまつりたり」
この一頁の記述は、私の興味を、大いにそそった。
「黒井館」が、実在したことが、これで明白となった。そして、かげろふ太刀、というのが、剣法の秘奥のひとつであることも、わかった。

——よし、下山新八郎が、どういう兵法者であるか、調べてやろう。あの冥官冑を両断したのも、天保壬辰吉日とあったから、同じ年だ。下山新八郎のしわざに相違ないのだ。
私は、決心した。
しかし、かげろふ太刀という秘奥は、いかなる兵法書をひもといても、どの流儀の中にも見当らなかった。
また、天保度に於ける一流兵法者の列に、下山新八郎という名は、加えられていなかった。
下山新八郎は、無名の兵法者、それも、小さな町道場主にすぎないようであった。
私は、あきらめざるを得なかった。

三

今夏、私は、秋からはじまる新聞連載小説の舞台を、房総半島にすべく、東京から、車を走らせた。
鴨川町のホテルに一泊して、石堂寺やら三石寺やら、大多喜町の奥の鶴舞やら、勝浦城址やら、誕生寺やらを、見てまわった。
さいごに、小湊から、清澄山へ登って、清澄寺へ詣でた。
清澄寺境内にそびえる千年杉は、きもを奪う壮観であった。
十三人が手をつないでとり巻いて、ようやく計れる、という巨木の前に佇んで、私は、しばらくぼんやりと、仰いでいた。
私を案内した小湊の町役場の人は、私がよほど感嘆しているものと思ったらしく、

「むかしから、この千年杉に魅せられた人が多いようです。……むかし、気が狂って、この千年杉の前で、坐禅を組んだまま、絶食をつづけて、ついに死んでしまった江戸の剣客がいた、ときいています」
「それは、いつ頃ですか？」
「さあ、それは、よくわかりませんが……。山門を出て、左へ行くと売店がならんでいますが、店と店とのあいだに、墓があります。それを、ごらんになれば……」
私は、そうすることにした。
千年杉に魅せられて、その前で、結跏趺坐したまま、断食して、相果てた剣客、というのは、まさしく、私の伝奇小説の登場人物にふさわしい。
その墓は、土産物店にはさまれて、全く、路傍の石のように、供物もないまま、見すてられて、ひっそりと建っていた。
清澄寺の僧侶が、あわれんで、建てたものであろうか、なになに信士、という戒名も、刻まれてあった。側面をのぞいた私は、はっとなった。

　俗名下山新八郎
　天保甲午五年没

そう読めたのである。
私が、さがしもとめていたかげろふ太刀の使い手は、この清澄寺で、相果てていたのである。
しかし——。
相果てた地が判明しても、どういう兵法者であったか、調べることは、むつかしいように思われた。

小湊の町役場の人は、私が、腕組みして、考えているのを視て、
「もしかしたら、この剣客のことは、勝浦の住本さんが、ご存じかも知れません」
と、云った。
「住本さんというのは？」
「中学の英語の先生をして居られますが、お祖父さんの代までは、なんとか一刀流の剣客で、勝浦に道場をひらいて居られたということです。この剣客も、清澄寺へのぼる前には、きっと、住本さんの道場へ立寄ったに相違ありません」
「案内してもらえますか」
「承知しました」
私たちは、車で、勝浦市へ降りた。
住本家は、一瞥して旧家と判るただずまいをみせていた。
私たちが、訪れた時、家の前の西瓜畑で、熟れたのを取入れている人がいたが、色あせた麦藁帽子をあげて、こちらへ顔を向けると、私の案内者は、
「やあ、お暑うございます。住本さんにおひきあわせしたい方を、おつれしました」
と、云って、私の名を告げた。
剣客の子孫だけあって、住本氏は、私に対して、充分の好意を示してくれた。
私が、下山新八郎という剣客が、どういう素姓の人物か、その略歴だけでも、知ることができれば、と申し入れると、住本氏は、
「おはずかしいのですが、剣道場を持った家の子孫としては、まことに不肖の人間でして、全くそう

したことを調べて居りません。裏の文庫蔵には、木刀だとか、稽古胴だとか、免許状だとか、門弟一覧表だとか、兵法秘伝書みたいなものが、たくさんあるのですが、まだ一度も、整理したこともなく、ほったらかして居ります。……まことに恐れ入りますが、秋まで、お待ち頂けないでしょうか。文庫蔵を調べてみて、先生にお見せするものが、ありましたら、必ずお送りいたします」と、約束した。

私は、よろしく、と頭を下げて、住本家を辞した。

私は、失望してはいなかった。手がかりをつかんだ、という気持がつよかった。きわめて漠然とした予感であったが、私は、自分の予感がはずれない、という気持であった。

下山新八郎という兵法者か、しだいに、私に近づいて来た、といえるのだ。

まず、最初に、倉敷のＫ氏が、私に、冥官冑を見せた。それを、ま二つに両断したのは、かげろふ太刀という秘法によるものであった。その時は、何者がそれを使ったか、不明であった。

次に――。

横山家の土蔵にのこされていた代々の当主の日誌の中でかげろふ太刀を使う剣客が実在したことが、判明した。下山新八郎は、公儀役人に依頼されるほどであるから、ただの町道場主ではなかったに相違ない。稀世の使い手ではなかったか。一流兵法者によく見られる狷介不屈の性情の持主で、そのために、轗軻不遇ではなかったのか。天保度といえば、武士の堕落はひどいもので、真剣に文武の道に精進する者など、尠かった。道場主たちも、心得ていて、形式だけの稽古をつけて、金次第で、目録も免許状も与えていたのである。その時代に、下山新八郎だけは一人、実戦太刀を練って、いい加減にパチャパチャと竹刀で叩き合うような稽古をつけなかった。そのために、門前雀羅を張ってしまった。しかし、その伎倆は、識者の間には高く買われた。公儀役人の依頼を受けて、わざわざ、江戸か

ら備前へやって来たのも、その秀れた業前を買われたからに、ほかならなかった。ということは、黒井山上の館で、為さねばならなかったのは、そこいらの並の使い手では不可能事であった、といえる。それが、もしかすれば、冥官冑の両断という任務ではなかったか。

冥官冑が、かげろふ太刀で、両断されたのは、天保壬辰――三年である。そして、同じ年に、下山新八郎は、備前へやって来ている。倉敷のＫ家が、その兜を入手しているところをみると、冥官冑は、備前のどこかに在った、と考えられる。

黒井館に、冥官冑は、在ったのではなかろうか。

下山新八郎によって、これが両断されるや、用済みの傷ものとなって、どこかの家へ、呉れられてしまった。そして、それが転々として、倉敷のＫ家のものとなったのではあるまいか。

下山新八郎が、わざわざ、江戸からやって来て、公儀役人の面前で、冥官冑を両断した理由は、何であったか――私の興味は、そこに集中する。

さて――。

その後、下山新八郎という人物に関して、なんの手がかりもないままに、三年が過ぎて、突然、渠は、私の目の前に、その墓をみせたのである。

清澄寺境内の千年杉の前で、気が狂って、断食して、一命をすてた、という行為も、伝奇作家に与える好材料であった。やはり、下山新八郎は、只者ではなかったのである。

その死は、天保五年であるから、私の故郷へやって来てから、二年後である。

下山新八郎が、気が狂って、壮烈な死をえらんだことは、かげろふ太刀で、冥官冑を両断したことと、なにか関聯があるのではなかろうか。

いや、たしかに、なにか関聯がある。
左様——。
下山新八郎は、ここまで、私に近づいて来たのである。
その浮かばれぬ霊魂が、それを為した土地を故郷とする伝奇作家をえらんで、世に公表をもとめているのだ、といったならば、あまりにも、因縁めいて、現代人には、一笑にふされる危険があるが、私自身としては、そういう気持にならざるを得なかった。
私には、下山新八郎という人物が、このままで、私の前から遠のき、かき消えるとは、とうてい思えなかった。
私の予感は、中った。
八月に入って、私は、毎年の習慣で、軽井沢へ、炎暑を避けた。
別荘をひらいてから、十日ばかり経って、東京から転送されて来た郵便物の中に、かなり部厚い包みが、まじっていた。
差出人は、千葉県勝浦市の住本正次氏であった。
ひらいてみると、二種類の古い帳面が出て来た。
住本正次氏が、文庫蔵からさがし出したものであった。
添えられた手紙によれば、そのひとつは、七代住本刀雲の覚書であり、もうひとつは、まぎれもなく、私がもとめる下山新八郎の手記なのであった。いや、住本正次氏が、読了したところでは、正しく、それは、下山新八郎の遺書というべきものであった。下山新八郎は、気が狂ってはいなかったのである。

清澄寺境内の千年杉の前で、結跏趺坐して、二週間の断食ののちに、生命を断ったのは、覚悟の自殺であった。
私は、まず、勝浦道場七代住本刀雲の覚書から、読みはじめた。

四

住本刀雲の先祖——初代長之助刀雲は、神子上典膳の最初の弟子であった。
天正十六年の晩秋、神子上典膳は、師の伊藤一刀斎の命令によって、下総国葛飾郡小金ヶ原で、兄弟子小野善鬼と、決闘して、勝利を得て、一刀斎から一刀流の伝書、甕割の剣、さらに仏捨刀の秘技を伝授されたのち、師とわかれて、上総夷隅郡万喜の城主万喜弾正少弼頼春に、仕えた。
万喜頼春は、上総の里見義康に属して十万石を領し、勇将のほまれが高かった。
当時——。
関東には、房総の里見氏に対して、小田原の北条氏が勢力を延べていた。
両軍は、下総の国府台を中心として、しばしば戦った。
頼春の父頼定の頃は、すでに、北条氏の方が、勢いまさっていた。
北条氏康は、つねに里見軍の先鋒をつとめる万喜頼定の武勇を、高く買って、二度三度、味方になることを慫慂した。
しかし、頼定は、そのたびに、武門の義として里見氏を裏切ることはできぬ、とことわった。
やがて、頼定は、北条氏からのさそいを受けた、ということで、里見義頼から、二心を疑われた。

やむなく、頼定は、里見氏と縁を断って、自立することになった。

里見氏では、義頼が逝き、義康の代になり、万喜氏では、頼定が老いて、嫡男頼春が家政をつかさどるようになった。もはや、その頃は、里見氏と万喜氏は、完全に疎遠状態になっていた。

神子上典膳が、万喜氏に随身したのは、その頃であった。

天正十七年夏、豊臣秀吉が、四国、九州を定めて、いよいよ、東国を取る気色をみせたので、小田原の北条氏康は、これに対抗すべく、関八州を平定せんとした。

万喜頼春は、その時、はじめて、北条氏に属するほぞをかためて、部将三品図書助と大曽根右馬助の両名に、三百騎ずつ与えて、北条勢に従わしめた。

庁南の武田信栄は、兵部少輔豊信と称して、代々上総の守護代として、東国にきこえた名家であったが、当時はすでに威勢ふるわず、里見氏の下にいた。

武田信栄は、万喜頼春が、兵を南方に分ったのを知ると、

「いまぞ、万喜城を奪取する好機」

と、決意して、老臣多賀六郎左衛門を呼んで、虚に乗ずる策を、さずけた。

その策は、夜陰を利して、兵を発して、ひた押しに、万喜城に迫ると同時に、一手を分けて、佐貫と鶴城を牽制する、というのであった。

多賀六郎左衛門は、命を奉じて、闇夜、枚（ばい）をふくみ、甲（こう）をつつんで、ひそかに、万喜城へ迫って、夷隅川をへだてて布陣した。

右岸には、万喜頼春の城塁があったが、見張りの兵も、このことに気がつかなかった。

夜明けて、この急報に接した頼春は、高殿にのぼって、敵陣をのぞむや、こころみに、矢玉を放た

しめた。

庁南の武田勢は、一斉に起って、夷隅川を押し渡って来た。

「ひきつけい。城壁まで、ひきつけい！」

頼春は、はやる兵を、おさえた。

頼春は、敵をひきつけるだけひきつけておいて、一挙に、白兵戦で、勝利を挙げる計略を持っていた。

それというのも、神子上典膳という稀代の兵法者を、家臣に加えていたからである。

典膳を抜刀隊長とし、その配下に、三十名の若武者を与えていた。この抜刀隊士の中に、初代住本刀雲――長之助がいたのである。

典膳は、万喜城に来てから、若武者たちの太刀さばきを視たが、住本長之助を、抜群の天稟あり、とみとめて、自分の脇に置いたのであった。

典膳は、わざと兜をいただかず、白鉢巻に軽装して、若武者三十人にも、それにならわせていた。

寄手の総大将多賀六郎左衛門は、主君の方略にもとづいて、一気に城を抜くべく、遮二無二の攻撃を、命じた。

武田勢は、城壁へ、いなごのごとく、とびついて、半弓で射られようが、槍で突かれようが、屈せずに、次々とよじのぼって来た。

その時、頼春が、

「出よ！」

と、下知した。

隊長神子上典膳よりも先に、とび出したのが、住本長之助であった。
若武者の白鉢巻は、みるみる血しぶきで、朱にそまった。典膳が進むところ、甕割の剣が、紅の旋風を呼んだ。
抜刀隊は、まっしぐらに、武田勢のまっただ中に、突入したのであった。二千の武田勢が、わずか三十名の若武者隊に、阿修羅となって、あばれられて、陣形をみだしてしまった。
そこへ、矢嶽の城主浅生主水正が、援兵をひきいて、馳せつけて来て、武田勢の背後を衝いた。浅生主水正がひきいたのは、半数は土民であったが、この方が、正兵よりも凶暴であった。
庁南の兵は、殆ど潰滅して、戦いは半日で終了した。
神子上典膳が、斬った敵数は、かぞえきれなかった。
住本長之助の武勲が、抜群であった。敵の大将多賀六郎左衛門を、討ちとったからである。
翌天正十八年正月には、里見義康の実弟で、世に「鬼大膳」と称された驍雄正木大膳時尭（ときたか）が、手勢を引具して、急襲して来たが、これを諜者の報告で知った頼春は、神子上典膳に、伏勢たることを命じた。
敵の道に伏せたのは、やはり、三十名の若武者であったが、突如の逆襲は、流石の鬼大膳を、へきえきさせて、後退を余儀なくさせた。
里見氏と万喜氏の戦いは、絶え間なくつづけられていたが、小田原城が陥落して、北条氏が滅びた。関東を得た徳川勢が、房総二国に殺到して来た。先手の大将は、本多忠勝であった。
北条氏に属した四十八城は、つぎつぎと潰えた。
万喜頼春も、この悲運からまぬがれることは、できなかった。

頼春は、兵を四散させて、近親の者少数だけつれて、小浜の浦から、海路を、参州に落ちた。
神子上典膳は、牢人して、ふたたび、武者修業の旅に出た。
住本長之助は、それに従わん、と乞うたが、典膳は、許さず、
「勝浦で、道場を持て」
と、命じた。
神子上典膳は、慶長に入ってから、徳川家に仕え、旗本となって、小野次郎右衛門忠明とあらためた。
そして、勝浦に道場をひらいた住本長之助の許へ、わざわざ、
「一刀流勝浦道場　小野次郎右衛門」
という大看板を、使者に持たせて寄越した。
爾来、勝浦道場は、一刀流の名家として、代々その剣名を、四方にひびかせて来たのであった。
ただの田舎道場ではなかった。したがって、兵法を修業して旅する剣客は、房総に入ると、必ず、勝浦道場に、立ち寄ったのであった。

五

天保五年の初秋の一日――。
七代住本刀雲は、道場に、一人の兵法者を迎えた。
その兵法者は、これまで現われた数多くの剣客とは、全く異っていた。

風貌は、べつだん奇異ではなかったが、一瞥しただけで、なんとも、名状しがたい悍ましさをおぼえさせる陰気な雰囲気をただよわせていた。
刀雲が、道場に出てみると、中央に端座していたが、そこだけが、薄闇でも落ちているように、昏いものに感じられた。
ひどく痩せていたが、顔面には、血の気というものが全くなかった。
膝に置いた蒼白い十指が、人間の手ではなく、何か別のもののように、見えた。
「下山新八郎と申す」
そう名のって、ゆっくりと頭を下げた。その下げかたにも、人間ばなれした気配があった。
「立合いをご所望か？」
刀雲は、訊ねた。
すると、下山新八郎は、
「真剣にて――」
と、云った。
「それは、なり申さぬ」
刀雲は、拒絶した。
「真剣にあらざる限り、それがしの業をみとめて頂くことが、できませぬ」
下山新八郎は、云った。
「これまで、そうされて来られたのか？」
「いや、今日はじめて、お手前様に、おねがい申すのです」

刀雲は、じっと、下山新八郎の眼眸を視かえしているうちに、ふっと、気がついた。
「貴公は、目がおわるいのではないか？」
「数尺さきは、かすんで居り申す」
「では、身共の顔は――？」
刀雲と新八郎の距離は、一間半ばかりはなれていた。
「ほとんど、見えませぬ。白いなかに、ぼうっと――」
「それが、どうして、真剣の立合いを所望されるのか？」
「目がかすんで居りますゆえ、真剣の方が、たたかいやすいと存じます」
「ずっと以前から、その目で来られたのか？」
「いや、二年前より――」
刀雲は、その返辞をきいて、
――二年前に、この人物には、なにか、よほど、心身をそこなう出来事があったのだな。
と、感じた。
新八郎は、云った。
「目はかすんで居りますが、撃ち止めは、あやまたぬ、と存じます」
撃ち止め、とは、たとえば、真っ向から、頭上へ振り下しても、頭髪すれすれで、ピタリと止めること、を意味している。
「よろしかろう」
刀雲は、真剣試合を承諾した。道場内では、暗すぎるであろう、と配慮して、場所を、明るい庭に

えらんだ。
下山新八郎は、門弟の一人にみちびかれて、甚だおぼつかぬ足どりで、庭へ降りて来た。
刀雲としては、ほとんどあき盲同様の兵法者と、真剣の立合いをやっても、得るところは何もない、と考え乍ら、対手には黙って、刃引きの剣を携げて、出た。
「では――」
「よしなに」
両者は、かなりの距離をえらんで、対峙すると、鞘をはらった。
刀雲は、青眼にとった。
新八郎の方は、当然の構えとして、八双をえらんだ。
目がかすんでいる以上、自分の方からは、撃ち込めぬ、とみせたようであった。
刀雲は、じっと、対手を見据えた。
新八郎の光のない視線は、こちらの帯のあたりへつけられていた。
これは、剣法でいう「帯の矩(かね)」で、盲目にひとしい者としては、そうあるべきことに思われた。
これに対して、刀雲は、一刀流の定法通り、青眼につけた切先を、鶺鴒(せきれい)の尾のごとく、小きざみに動かすと同時に、踵を地面から浮かして、軀を絶えず、動かした。
刀身を宙に固着させてしまうと、切先がおのずから居ついてしまって、起しかしらが鈍くなる、というのが、一刀流の教えであった。絶え間なく、切先を動かし、軀もまた動かしていれば、刀は居つかぬのみならず、敵の心気をまどわし、また、その起りがしらをも乱すことができる、という二重の利がある、という次第であった。

したがって、青眼といっても、やや下段の構えになる。
しかし――。
この真剣の立合いに於ては、この定法は、無駄のようであった。
帯の矩につけている新八郎の眸子は、視力がほとんどないのだ。
絶え間なく動いている切先の、その動きさえも、みとめられないのではあるまいか。
刀雲は、一瞬を境にして、切先の動きも、軀の動きも、止めてしまった。
ただ、じっと、新八郎を凝視しつづけた。
そのうちに――。
刀雲自身の視力が、うすれて来たように、この明るい陽光の中で、すこしずつ、溶けはじめた。その奇怪さに、刀雲は、いくどか、かっと、双眼を瞠(みひら)いた。
刀雲は、生きた人間ではなく、幽明相隔てた者を対手にしているような気がした。
戦慄が、背すじをはしった。
少年の頃から、斯道ひとすじに精進した者の胆力が、その戦慄を辛うじて抑えた。
そのまま、かなりの時間が経った。
刀雲は、ぱっと、跳び退った。
「立合い、これまで――」
自身の口から、そう告げた。
新八郎が、ゆっくりと刀身を下げるのを視て、刀雲の全身から、汗が流れた。
座敷で、対座した時、刀雲は、

「貴公は、身共に、斬られるべく、真剣を所望されたのではなかろうか？」
と、訊ねた。
「撃ち込まれることを、望んだまでです」
新八郎は、こたえた。
「しかし、貴公の方には、身共に撃ちかかる意志は、全くなかったように、見えましたぞ」
「……」
「さしつかえなければ、存念のほど、おきかせ頂きたい」
「正直に申すなら、立合いなかば、貴公の姿には、なにやら、妖気がこめて……、云うならば、悪霊にでも、とり憑かれたような……」
そこまで、云った時、新八郎が、さえぎった。
「それがしを、しばらく、ご当家に、泊めて頂けましょうか？」
「当方は、一向に、さしつかえござらぬが――」
「忝う存じます」
新八郎は、頭を下げてから、
「海を眺めて、すごしたいと存じます」
と、呟くように云った。
「目のほかに、内臓にも、どこか、そこねているところがおありか？」
「いや、べつに――。ただ、ごらんの通り、生気がありませぬ」

翌日から、新八郎は、浜辺へ出て、砂地に孤坐して、海を眺めはじめた。
なにも知らぬ漁師たちさえ、新八郎の姿に、無気味なものをおぼえたらしく、近づこうとしなかった。
何を考えているのか、微動だにせず、かすんだ眼眸を、海原へ送って、半日もの長い時間をすごしているさまは、たしかに、地下の者たちを、おそれさせた。
住本家では、離れが与えられたが、下婢は食膳をはこぶのも、いやがった。
数日過ぎてから、新八郎は、下婢に過分の心づけをした。懐中は、ゆたかのようであった。
道場には、多くの門弟が、早朝からつめかけて、勇ましく撃ち合っていたが、新八郎は、一切近づこうとしなかった。
刀雲が他出したのを見はからって、門弟一同が、鳩首して、新八郎を道場へ、ひき出そうとした。
浜辺で海を見ている新八郎のそばへ、三人ばかりが、近づいて来て、
「一手、ご教授ねがえますまいか」
と、もとめた。
新八郎は、黙って、かぶりを振った。
一人が、しつっこく、
「真剣の立合いならば、いかがです？」
と、問うた。
「お手前らの剣では……」
新八郎は、ひくくこたえた。語尾が、風に消えて、ききとれなかった。

三人は、とたんに、一斉に抜きつれて、切先を、新八郎へつきつけた。予定の行動であった。
新八郎は、しかし、なおしばらく、動かなかった。
「立たれい！」
一人が、叫んでから、ようやく、新八郎は、身を起した。
目は伏せたままで、
「お手前らに、それがしが、斬れるであろうか」
と、呟くように云った。
「斬るぞっ！」
一人が、呶号した。
若者たちは、いずれも富有な郷士の伜で、外房総に育った気象は荒かった。
この陰気な流浪の浪人者の態度に、激しい反感をわかせていた。
新八郎は、差料を抜いたが、峰をかえした。そのことも、三人の若者を、憤然とさせた。
いずれも定法通り、切先を浮き沈みさせつつ、新八郎を包囲して、左廻りに、砂地を移動した。
背後にまわった時、斬りつけたい衝動にかられつつも、一人も、それをしかねた。
正面にまわった者は、刀身を直立させて顔面を二つに割った新八郎を、睨みつけ乍らも、懸声をかけることさえ、できなかった。
それほど、その姿は、無気味であった。
じりじりと、円を描いて、新八郎のまわりを移動し乍ら、三人の若者は、ある堪えがたい、重い苦痛をおぼえていた。

幾周したであろうか。
道場から、急ぎ足で出て来た刀雲から、「莫迦者ども！」
と、一喝されて、三人は、ほっと、活きかえったような安堵をおぼえたことだった。
三人が、身を引くや、新八郎は、何を思ったか、よろめくような足どりで、渚へ向った。
そして、すこしずつ、海へ入って行き乍ら、目もとまらぬ迅さで、波へ斬りつけた。
胸までつかった時であった。
「あああっ！」
凄じい叫びを発しざま、白刃を、沖へ向って、抛った。
白刃は、陽光をはじいて、高く空中を躍り、波間へ落ちた。
新八郎が、住本道場を去ったのは、次の日の朝であった。
無腰になった新八郎は、刀雲に、鄭重に礼をのべて、辞去する旨を告げた。
「何処へ行かれる？」
新八郎は、俯向いて、こたえた。
「まだ、きめて居りませぬ」
刀雲が、腰がさびしかろうと云って、一振り贈ろうと云うと、新八郎は、
「もう、刀は無用となりました」
と、ことわった。
新八郎は、住本家を辞去したその足で、清澄山へ、登ったのであった。
清澄寺に入った時は、深夜であり、朝になって、納所（なっしょ）が、庭を掃きに出た時、すでに、新八郎は、

千年杉の前に坐っていた、という。
結跏趺坐した者に、声をかけるのは、はばかられるので、納所は、黙って、境内をきよめておいて、方丈へもどって、その旨を、住職に報告しておいた。
夕刻になって、住職は、出て来て、新八郎の姿を、眺めていたが、
「業念を払いたいのであろう」
と、云って、納所に、水だけをはこんであげるように、命じた。
新八郎は、木椀一杯の水さえも、二日間、飲もうとしなかった。
秋なかばとはいえ、山頂の夜は、底冷える。
身じろぎもせず坐りつづけることが、どんなに苦痛なものか、小僧の時から修行をつづけている納所には、充分察しられた。
――今朝は、もう、いなくなっているのではあるまいか。
そう思いつつ、起き出てみると、千年杉の前に、依然として、幽鬼寂然の姿が在った。
四日目の夜は、雨が降った。
納所は、夕食後、出て行って、その姿の上に、傘をさしかけてやろうとして、「無用です」とことわられた。
五日目の朝は、はれていたが、納所は、ずぶ濡れた新八郎を見出して、苛立たしささえおぼえた。
「もう、お止めなされ」
と、云いたかった。
刀雲が、清澄山へ登って来たのは、その日であった。

千年杉へ近づいた刀雲は、流石に、その陰惨きわまる羸瘦の姿に、眉宇をひそめて、しばらく、声が出なかった。
新八郎は、何者が前に立とうと、視線をあげようとはしなかった。背を直立させているのは、困難らしく、杉の幹へ、凭りかかっていた。
「下山殿、いつまで、その苦行を、つづける存念か？」
刀雲は、訊ねた。
「わかりませぬ」
新八郎は、かすれた声音で、こたえた。
「死を、のぞんで居られるのか？」
「……すてておいて、下され」
いかなる好意も、新八郎は、受ける気持はないようであった。
それでも、刀雲は、中止させるべく、言葉をつくした。新八郎は、返辞もしなくなった。
刀雲は、立ち去らざるを得なかった。
下山新八郎は、なお、それから、九日間を生きた。
その朝、納所は、
「薄粥を持参いたしましたなら、飲むのではございますまいか」
と、住職に相談して、それをつくって、はこんで行った。
近づいてみて、はっとなった。
新八郎は、根かたに横たわっていた。はじめてのことであった。

それは、まるで、ぼろきれのようであった。
納所は、のぞき込んで、
「もし――」
と、声をかけてみた。
返辞はなかったが、まだ死んではいなかった。
納所は、声をたてて、住職を呼んだ。
文字通り骨と皮だけになった新八郎のからだは、住職の命令で、方丈へはこばれた。
しかし、新八郎の口は、薄粥を飲まされようとしても、ついに、開かなかった。
午後になって、報せで、刀雲がやって来た時、新八郎は、息をひき取っていた。
新八郎の懐中には、油紙に包んだ手記――遺書が、あった。
刀雲は、一読して、ふかく合点した。
新八郎を葬って、墓を建ててやったのは、住本刀雲であった。

六

下山新八郎は、江戸青山の教学院に程近い久保町の、ごく目立たぬ構えの町道場で、生れて、育った。
母は、新八郎を産んでからすぐ、逝き、新八郎は、下僕の手で育てられた。そのせいか、七八歳頃までは、からだが弱かった。

おもてへ出ると、すぐ風邪をひくので、湯気をたやさぬ部屋に、終日置かれて、育った。新八郎は、障子の桟から、ぽたりぽたりと落ちる水滴を眺め乍ら、幾年もすごした。
「この道場も、わしで、最後か」
父新左衛門は、脆弱なわが子を見まもって、歎息した。
下山道場は、新左衛門で、五代つづいていた。
当時、青山という土地は、大名と旗本の屋敷ばかりであった。百人町から渋谷へ降る宮益町にかけて、両側に、びっしりと旗本の屋敷がならんでいた。
下山道場は、それらの屋敷の子弟を門下として、はやりすたりのない代を重ねていた。流儀は、無念流であった。
新左衛門は、新八郎が十歳の正月を迎えると、あらたまった態度で、先祖のことを教えた。
下山家の先祖は、尼子家の遺臣奈佐日本之助であった。
尼子家には、山中鹿之助をはじめ、「之助」を通称とする武者が、十数人いた。いずれも、武勇のほまれが高かった。奈佐日本之助も、その一人であった。
奈佐日本之助は、尼子氏が滅亡ののち、陸に頼るところがないため、海に出て、波上を家としていた。
足利氏の中葉以後、支那大陸の近海を侵して、明史に倭寇の名をとどめた劫掠船は、そのほとんどが、主家が滅んだ武辺の徒党であった。
奈佐日本之助が、この海賊に身を投じた時は、すでに、支那大陸沿岸の警備は、非常に厳重になって居り、一艘二艘では、近づけなくなっていた。また、中国に於ては、毛利氏の勢力が増強して、瀬

戸内の警戒がきびしくなっていて、容易に、内海に入ることができなくなっていた。
そこで、海賊船は、もっぱら、日本海を縄張りとして、朝鮮及び山陰道の近海に出没するようになっていた。根拠は、隠岐であった。
山中鹿之助が、故主の遺孤勝久を奉じて、ふたたび、山陰に、尼子家の旌旗をひるがえした時、まっさきに馳せ参じたのは、海賊団であった。
天正九年夏――。
羽柴秀吉が、播磨から但馬を攻略し、山陰の国境を侵して、鳥取攻めに向って来た。
鳥取の領主は、山名豊国であったが、この人物は、節操に乏しかった。はじめは、尼子氏に属していたが、永禄九年に、尼子氏が毛利氏に滅されると、すぐに、毛利に屈し、次いで、山中鹿之助が、幼主勝久を奉じて起って、雲伯地方を一時奪いかえすや、忽ち、これに味方すると表明した。しかしまた、鹿之助が敗走すると、ふたたび、毛利氏に就いてしまった。こうして、向背常なかったところへ、このたび、羽柴秀吉が、破竹の勢いで攻めて来ると、
「とうてい敵わぬ」
と、節を変じて、秀吉の足下に膝を折る肚をきめた。
あまりの無節操に、森下道与、中村春次らの老臣は、愛想をつかして、ついに、山名豊国を放逐して、毛利氏の援助を受けて、籠城を覚悟したのであった。
鳥取城から援助をもとめられた毛利輝元は、出雲富田城に在って、山陰地方を統轄している叔父の吉川元春に、その旨をつたえた。
吉川元春は、同族の吉川式部少輔経家に、手勢を率いて、鳥取城へおもむくように命じた。

吉川経家は、智勇を兼ねて仁心に富む、と後の伝記にも記されている徳望のある武将であった。
経家が、手勢八百を率いて、鳥取城に入ってみると、籠っているのは、男女合せて四千余人、そのうちの半数が非戦闘員であった。のみならず、糧食は、あとわずか一月を支えるに過ぎなかった。
秀吉の大軍を迎えて、籠城するには、まず、糧食を確保しなければならなかった。
経家は、奈佐日本之助のことを思い出した。
日本之助は、山中鹿之助が敗走すると、ふたたび、陸をすてて、海賊となっていた。
経家は、日本之助を招いて、糧食輸送を依頼した。
日本之助にとって、毛利氏は主家を滅した怨敵であったが、無節操な主君を放逐して、羽柴秀吉の大軍を迎え撃とうとしている山名の老臣たちの奮起に対して、
「よし！　義によって、援けよう」
と、勇み立った。
鳥取城は、現在の鳥取市の東北に位置している。海抜八百尺、久松山の要害に拠って、峯にも、麓にも、砦を築いていた。城下の近くを流れる千代川の支流袋川の岸を切りとって、断崖とし、橋を落して大手にそなえた。本城から西北につらなる小山脈のはずれにある孤峯丸山には、あらたに砦を築いた。
吉川経家は、この砦を、奈佐日本之助にゆだねた。
城の南大手は、平地にのぞんで、東から北に山脈を帯び、城は、そのなかの最も高い峯にそびえていた。谷は深く、坂は険しかった。
山城時代の、典型的な天然の要害に拠った城であった。

そのために、かえって、援軍が入るのと、糧食の補給という点で、困難であった。海路をたよるほかに、すべはなかった。

秀吉の大軍は、すでに、二手に分れて、進んで来て居り、国境を突破すると片はしから、支城を降していたのである。

秀吉の最も得意とする手は、兵糧攻めであった。

鳥取城の地形を眺めた秀吉は、ただちに、延長二里にわたって、攻囲線をつくり、柵を設け、櫓を建て、夜は篝火を焚きつづけて、城から一兵も出さず、また城外から入ることもできぬように計った。

南大手の平地に、兵の過半数を布陣させ、袋川には河口をふさぐ守備隊を置き、さらに、千代川の河口賀露の港には、浅野長吉（のちの長政）をして兵船百艘でふさがせてしまった秀吉は、籠城方が、飢えて降伏するのを、悠々と待った。

奈佐日本之助は、海からひきつれて来た泳ぎ達者の部下を、数名ずつ、袋川あるいは千代川の河口から脱出させよう、とこころみたが、ことごとく、守備隊に殺されてしまった。

八月末、出雲から五隻の輸送船が、糧食を満載して、三百の兵が乗った兵船十隻に護衛させて、賀露の河口に到着したが、忽ち、浅野勢に発見されて、輸送船は焼きはらわれ、護衛兵は全滅した。

しかもなお、鳥取城は、飢えつつも、屈しなかった。

籠城百余日に及んで、城内の糧食は全く尽き、果実、葉茎、草根、木皮、喰べられるものはすべて口にし、鼠も虫けらまでも捕りあさった。

丸山にたてこもる奈佐日本之助とその部下五百人は、本城のように非戦闘員を加えていないので、飢えてはいたが、いささかも、士気を衰えさせてはいなかった。糧食は、夜陰に乗じて、敵陣に忍び

入って、かっぱらって来ていた。そのたびに、すこしずつ、兵数が減じていたが、それ以外の食いつなぐすべはなかった。

敵陣からは、二度ばかり、降伏をすすめる使者がやって来たが、日本之助は、本城へ取り次がずに、これを斬ってしまった。

本城に於ては、飢え死ぬ者が出ると、その屍肉をくらう餓鬼地獄を現出させた。

この光景を目撃して、大将の吉川式部少輔経家が、ついに、決意した。

おのが一命に代えて、城中の者を助けたい、という講和条件を持った使者が、秀吉の本陣に、至った。

秀吉は、これに対して、吉川経家には、落城後は本国へ帰るようにすすめ、主君を追放した森下道与、中村春次ら老臣、ならびに、海賊をなりわいとしている奈佐日本之助らに、切腹せしめる、という条件を出した。

経家は、自分一人生還することは、武辺の意地と仁義にそむく、と主張して、

「それがし一人が、自決することによって、全員を許されたい」

と、乞うた。

しかし、秀吉は、許さなかった。

鳥取城が、開かれたのは、十月二十三日であった。五千に近かった籠城者は、半数に減り、そのまた半数は、すでに起って歩くことさえ叶わなくなっていた。

丸山の砦に、敵の部将を迎えた奈佐日本之助は、笑い乍ら、

「はなばなしい決戦をせぬままに、腹を切ることは、まことに無念に存ずる。せめては、最期を語り

草にして頂くために、立腹をつかまつる」
と、云い、櫓の上へのぼって、全裸となるや、太刀で腹をかっさばいて、血汐を空中に撒いた。

七

下山新左衛門は、わが先祖がいかに豪勇無双の武辺者であったか——特に、籠城百余日の間、その苦痛に堪えぬいたさまを、語気をつよめて、十歳の一人息子に、きかせた。
その時、新八郎は、俯向いて、黙って、耳をかたむけているばかりで、目に見えた反応を、すこしも示さなかった。
語り了えた時、新左衛門は、その無反応に、失望をおぼえたくらいであった。
新左衛門は、わが子に、人間に最も必要なのは、苦痛に堪え忍ぶということだと、教えたかったのである。少々のからだの弱さなど、気力で克服することができる。十歳にもなれば、この教えが合点できるだろう、と思った。
新左衛門には、新八郎が合点したのか、しないのか、判らなかった。
しかし、その頃から、すこしずつ、新八郎は、健康になった。それにつれて、新左衛門は、武芸を教えはじめたが、べつに、天稟を見出すこともなかった。
ただ、新左衛門が、わが子を見なおしたのは、かなりの忍耐心を持っているということだった。
新左衛門は、新八郎が十七歳の春に、心臓の発作であっけなく逝った。
どうやら、新左衛門は、わが子が六代を継ぐことが可能な兵法者になれるかどうか、看て取れぬま

まに、この世を去ったようであった。
新八郎にとって、さいわいしたのは、門弟たちが、師を喪っても、相互稽古をつづけて、道場を維持してやろう、と好意を示してくれたことだった。
もとより、十七歳の新八郎に、教授の力はなかった。新八郎は、夜明けとか、日が暮れてから、独りで剣を振る時間を持った。自身でも、上達したのかどうか、不明であった。
二十歳を迎えた正月、新八郎は、はじめて、父の高弟の一人と、素面素籠手で、木太刀を把って、立ち合った。
新八郎は、二合と撃ち合わず、対手の木太刀を、はねとばした。
六代道場主となる資格を、門弟たちに、みとめさせたわけである。
尤も、独習によって得た技は、無念流の定法からはずれたものであり、道場稽古には烈しすぎて不向きであった。
木太刀しか手に把らぬ新八郎は、門弟たちから、敬遠された。門弟の数が、すこしずつ減ったのは、そのためであった。
新八郎自身、しいて稽古をつけようとはしなかったが、他の道場で修業した者が、その腕前を試そうという下心で、立ち合いをもとめると、黙って、木太刀を把った。
その構えには、鬼気があった。たいていの者が、その鬼気をあびて、身をかたくしてしまった。
道場には、三四人が撃ち合っている日が多くなった。
亡父が、多少のたくわえをのこしてくれたので、内職をするにはいたらなかったが、くらしぶりは、すこしずつ貧しくなって来た。

新八郎の剣名が、多少世間にひびいたのは、天保元年秋に、公儀が、身持不行跡の旗本御家人を戒飭した時であった。

道場の近くに住む御家人の一人が、公儀の措置に反抗して、酔った勢いで、役人を斬って、自家にたて籠った。

新八郎は、無腰で、入って行き、斬りつけさせておいて、これを素手で捕えてみせた。

道場主となって十年間に、新八郎の平凡な日常に起った出来事といえば、それだけであった。

育ててくれた下僕が、自身の老齢もあって、しきりに、妻帯をすすめたが、新八郎には、その気が起きなかった。

天保二年になり、春が逝き、風がさわやかになった某日――。

新八郎は、一人の訪者を、迎えた。

この客の出現によって、おのが人生が、一転して、想像しがたい暗い運命に陥ることになろうとは、夢にも気がつかなかった。

訪客は、亡父の門弟の一人で、中川御番衆をつとめる佐野総七という男であった。

中川御番衆、というのは、東国西国から大川に入って来る各種の船を取締る、いわば海の関所の役人であった。

佐野総七は、三代前までは、ごく身分のひくい伊賀者であった。祖父が何かの功をたてて、中川御番衆に抜擢されたのであった。

中川御番衆は、密貿易のいわゆる抜荷、鉄砲の持込み、そして、江戸を脱出しようとする武家の妻女や娘を取締るという表面上の任務を持っていたが、実際には、その他の法度制限破りがいろいろあ

ったので、かなりの袖の下がつかわれて、役人としての役得が一番であった。

佐野総七は、むしろ袖の下が使いにくい、お役目大事の律義な四十男であった。

「妙なご相談に上りました」

佐野総七は、そう云っておいて、まず仏間に入って、亡師に線香をあげてから、新八郎の前に、坐った。

「ひょっとしたことから、今年はじめに、人を二人、世話をするはめになりました。一人は男で、一人は女ですが、この一組、どうやら、駆落ち者でしてな。……いや、駆落ち者ということは、はじめから、そういう様子をみせて居ったので、察して居りましたが、最近になって、只の駆落ち者ではない、と考えざるを得なくなりました」

佐野総七は、語りはじめた。

正月も、二十日過ぎた頃、中川番所は、忙しくなった。

諸国からの船が、どっと入って来るからであった。

遠く、長崎からやって来た南蛮の品物を積んだ船もいた。こうした船は、特に、御番衆は、念入りに、調べた。

その日の当番は、佐野総七であった。

オランダ商館の持船は、廻船問屋のそれとは、比較にならぬ大きさであった。特別に、幕府から、制限枠をはずされていた。幕府が、大砲などの火器を購入する場合、石制限内の船では、間に合わぬためであった。

しかし、大砲を積み込んではこんで来ることなど、絶えてなく、年に二度か三度、オランダから輸

入する品物など、タカが知れていたので、長崎から江戸へやって来る商館船は、いつも、がらがらであった。

そのために、足弱な老人子供、病人などを、便乗させる許可をもらっていた。九州・四国・中国地方から、江戸へ出て来なければならぬ藩士の家族などは、この商館船を、利用した。

佐野総七は、到着した商館船に、のぼって、まず、さきに、商館から勘定奉行所に届いた江戸送り南蛮品の品目一覧の書類と、船内に積んだ荷が、一致しているかどうか、いちいち、てらしあわせる仕事をすませた。

白砂糖などは、まっすぐに、江戸城大奥へはこばれるので、それがまちがいなく白砂糖であるかどうか、調べなければならぬので、かなり手間どった。

そのあいだに、便乗の客は、甲板に出て、取調べを、待っているのであった。

佐野総七は、三十数人の乗客を、一人一人尋問して、さいごに、男女一組の客の前に立った。

男は、まだ十七八歳の若者で、一瞥して、疾患者、と判った。女は、男より四五歳年長であった。

備前浪人・黒井左門と名のる若者の風貌は、かなり異様であった。眉目の造作は整っていたが、片目の瞳には星があったし、唇がべにを塗ったように異常に赤かった。皮膚は透けるように白く、肌理がこまやかで、辰巳芸妓にも、これほどの肌の持主はないように思われた。瘦せおとろえて、のど仏が皮膚を破るほど突出していた。

女の方は、若者とは反対に、浅黒い健康な肌を持って居り、双眸にも強い光を湛えていた。

役人に前に立たれて、若者をかばうようにして、油断のないかたい表情を示した。

「出府して来た理由は——？」

佐野総七は、訊ねた。

「生来、双手が萎えて居りますので、名医にかかりたく……」

黒井左門は、こたえて、両の手をさし出し、しっかと物を摑むことが出来ぬ、と告げた。

「掛人となる家は？」

「それが……ありませぬ」

「それならば、江戸に入ることは、許せぬが——」

将軍家お膝元としては、疫病持ちが、江戸へ入って来ることを、警戒していたので、病人に対しては取調べをきびしくし、世話をする家がなければならぬという臨時の法度を設けていた。文政末年から、諸国に大雨洪水があって、疫病がはやっていたのである。

「お願いでございます。家を借りてくらす金子は所持して居りますゆえ——」

女が、必死に乞うた。

総七は、疫病持ちではなく、生れつきの疾患者であることが、明瞭なので、保証人の便宜をはかってやってもよい、と考え乍ら、

「その荷は、お主らのものか？」

と、二人の背後の大きな薦荷を、指さした。

木箱であったが、長持ぐらいの大きさがあった。

「左様です」

「なにが、入っている？」

「世帯道具一式が、入って居ります」

「調べさせてもらおう」
総七は、下役に、蓋を開けるように命じた。
すると、女が、すっと近づいて、微かにわななく手で、総七の手に、紙包みをにぎらせようとした。
金であった。
こうした袖の下は、絶対に受けとらぬ総七であった。
叱咤しようとして、ふっと、止めた。
紙包みの大きさが、気になったのである。
ひらいてみて、総七は、それが慶長大判であるのを、みとめた。
慶長大判など、もはや、天保の時世に、一枚もなくなってしまっているもの、と考えられていた。金座にさえも、見当らぬ筈であった。
慶長大判を、袖の下に使用するこの男女を、総七は、怪しんだ。
「その蓋を開くのを待て。番所へはこべ」
総七は、下役に申しつけておいて、黒井左門と女に、自分について来るように、命じた。
番所には、吟味所が設けてあった。小伝馬町の拷問蔵と同じ規模で、五坪の薄暗い陰気な建物であった。二坪が座敷になり、三坪が白洲であった。
総七は、黒井左門と女を、座敷に坐らせた時、かなり興奮していた。慶長大判を所持するからには、ただの浪人者ではない、と睨んだ。その木箱には、世間の目にふれさせてはならぬ品物が、入っているに相違ない。
総七は、三代前まで伊賀者であっただけに、自家の慣習によって、忍びの術も修練している男であ

った。いざとなれば、危険な場所へも踏み込んで、ひと働きできる、という気組みを持っていた。
この男女を取調べると、意外な罪科をあばくことができるような予感がした。この男女は、手先で、背後には、公儀にたてつくほどの大物が、かくれているかも知れぬ。
このような疑惑が起れば、ただちに、町奉行所へ報告すべきなのであるが、総七は、まず自分の手柄にしてみたい意欲をわかせたのである。
そのために、下役も入れずに、一人で、取調べることにした。
「お主らは、慶長大判を所持いたして居る。慶長大判の所持は、禁じられていることを、存ぜぬ筈はない」
総七は、鋭く、黒井左門を、見据えた。
「いえ、その儀は、不明にして……」
若者は、こたえた。
「知らなかったと申すのか？」
「一向に——」
「空とぼけることは、許さぬ！」
総七が、叱咤すると、黒井左門は、当惑した表情で、女を視た。
女は、怖ず怖ずと、
「さし出しますれば、ただいま通用の小判とおとりかえ下さいましょうか？」
と、訊ねた。
「事情によっては、寛大の措置をとらぬでもない」

総七が、語気をやわらげると、女は、懐中をさぐって、胴巻きから、慶長大判を、二十枚ばかり、とり出した。

「この大判は、どのようにして、手に入れたものか？」

「わたくしの家に、むかしより、たくわえてあったものでござる」

黒井左門は、こたえた。

「まことか？　虚偽の供述は、許さぬ」

「まことでござる」

「お主の父親が、路銀として、渡したのか？」

「……」

黒井左門は、顔を伏せた。

「どういたした？」

「……父は、存命つかまつりませぬ」

「では、勝手に持ち出した、というのか？」

「わたくしが、当主でありますれば……」

「その荷の内容は？」

総七は、たたみかけて、尋問した。

黒井左門は、かくしても、どうせは、蓋を開けられる、と覚悟したらしく、顔をあげて、総七の鋭い視線を、受けとめると、

「亡父を安置つかまつる」と、こたえた。

「なに？」

総七は、眉宇をひそめた。一瞬、その言葉の意味が、納得できなかった。

「亡父というと、お主の父親……？　その父親を、この箱の中に――？」

「はい」

「屍骸をこれに容れて、はこんで来た、というのか？」

「はい」

「屍骸なら、途中で、腐ったであろうが――」

「父は、十五年前に、他界つかまつりました」

「なに？……骸骨を、はこんで来た、というのか。いったい、なにが目的で、はこんで来たのだ！」

「……」

黒井左門は、こたえなかった。

総七は、「開けるぞ」とことわって、脇差を抜くと、薦をしばった縄を切った。

左門と女は、黙って、総七の為すことを、眺めていた。

蓋をひらいた総七は、白い布で掩われた物体を、その中に見出した。細引で、ぐるぐるにしばってあった。

総七は、細引と白布を、切った。

白布をめくった――とたん、息をのまされた。現われたのは、まさしく、黒くしなびているが、人間の手であった。骸骨ではなく、それは、木乃伊になっていたのである。

八

佐野総七が、黒井左門とその召使いのすげを、わが家へともなって来たのは、その告白をきいて、同情したからではなかった。

むしろ、その反対であった。黒井左門は、総七から、いかに吟味の声を高くされても、何が目的で、亡父の木乃伊を、わざわざ、備前の片田舎から江戸まではこんで来たか、白状しようとしなかったのである。ただ、自分が出府して来たのは、萎えた双手を、名医にかかって、なおす目的であることは、神明に、誓って相違ない、と云った。

総七は、この奇妙な出府者を、奉行所へ突き出す代りに、しばらく、自分が世話してやろう、と考えたのであった。

さいわい、佐野家は、青山の旗本屋敷の区域内でも、いちばんはずれの、原宿村の田畑をひかえた場所に、あった。先祖が伊賀者であったということが、侮蔑を買って、隣家との交際もなかった。

家の裏手に、四年前まで中風で寝ていた父の隠居所が、建ててあったので、黒井左門とすげを、そこに居候させることにした。

はずれの屋敷であり、交際がなかったので、この二人を、かくまうようにすまわせても、べつに近隣から気づかれなかった。

総七は、ゆっくりと日時をかけて、黒井左門の素姓と木乃伊帯同の出府目的を、さぐりあてることにしたのであった。

左門の方は、総七の心を看たか看ないか判らぬが、おとなしく、好意とみせた申し出を、受けて、青山へ、すげとともに、ついて来た。

「世間に、目立っては相成らぬ」

総七の忠告を守った二人のくらしぶりは、まことに、ひっそりとしたものであった。

総七の方は、非番で屋敷にいる日は、必ず、夜になると、一度は、隠居所へ忍び寄って、左門とすげの会話を、ぬすみぎきした。

忍びの術の修練は、役立った。

しかし、左門とすげの会話は、ひとつも、総七の胸をはっとおどらせる内容ではなかった。きわめて、ありふれた言葉を、交しているばかりであった。

総七が、忍び寄って、知った秘密らしい二人の行為といえば、亡父の木乃伊を、木箱からとり出して、床の間に安置し、それに毎日、供物をささげることだけであった。

絶えて人の訪れることない住居であったので、二人は、安心して、木乃伊を、床の間に安置したのであったろう。

しかし、夜陰にひそんで、戸外からうかがう総七は、まともに、木乃伊を視ることは、叶わなかった。

昼間は、木乃伊には、すっぽりと白布が、かぶせられてあり、庭から訪れた総七は、それを眺めても、わざと、そ知らぬふりをした。

やがて、総七は、一人の蘭医に、左門を診てもらい、治療を依頼することにした。

長崎で数年勉学して、帰府して来た、まだ三十を出たばかりの蘭医は、診たてが正確で、評判であ

った。
左門を診た蘭医は、その疾患が生来のものであるときくと、腕組みして、首をひねった。
しばらく考えていてから、
「失礼だが、家系に、身体に障碍のある人が、居られたか？」
と、訊ねた。
左門は、俯向いて、すぐには、こたえなかった。
「居られたようだな？」
「はい。……父は、盲目でありました。母は、狂って相果てました」
左門は、云いがたいことを口にしなければならぬ苦痛を、表情にも、語気にも示した。
蘭医は、頷いてから、これまで、その萎え手をなおそうと、どんなこころみをしたか、訊ねた。
左門は、あらゆる努力を惜しまなかったことを、語った。
蘭医は、火鉢から火箸を抜いて、左門に握らせた。
左門は、握ることは握った。しかし、握力は、ほとんどなく、辛うじてとり落すことからまぬがれたばかりであった。しかし、それも、わずかの時間で、とり落すまいと必死になったために、しだいに、双手は、顫えはじめた。顫えが、しだいに、ひどくなったので、蘭医は、受けとった。
「百のうち一に希望をつないで、気永に、かようてみられるか」
蘭医は、云った。
蘭医自身、この患者の治療に、興味を持ったようであった。
左門は、すげにつき添われて、五日に一度ずつ、駕籠で、治療にかよいはじめた。

二月が過ぎ、三月が終った。
萎えた双手には、なんのげんもあらわれなかった。
いや、治療にかよっているために、かえって、わるい出来事が起った。
留守中に、賊が隠居所に忍び入って、二十枚の慶長大判を盗み去ったことである。
すげは、そのことを、総七に報告に来て、
「この上は、備前へ帰るよりしかたがありませぬ」
と、云ったのである。
総七は、そこまで、新八郎に語ってから、
「せっかく、今日まで世話したのが、これでは、無駄になります。あの若者が、かたく口をつぐんでいる秘密を、なんとかして、知りたいと存じますが、なにか、いいてだてがあれば、お教え頂きたいもので――」
と、たのんだ。
新八郎は、べつに、大した興味もわかなかった。
亡父の木乃伊と慶長大判を持って、江戸へ、治療にやって来た。ただ、それだけの話のように思われた。
他人事に関して、好奇心は稀薄であった。
ただ、
――木乃伊とは、どういうものかな？
それを一度見たい、と思った。

「たとえば、新八郎殿が、剣の一撃の凄じい気合をあびせれば、萎えた双手がなおる、などということはありませんかな」
総七は、云った。
「さあ、兵法の業で、人の病気をなおした話は、まだきかぬが……」
「こころみに、やってみて下さるわけには、参りませんか？」
「無駄とわかっていることを、やってみても、はじまりますまい。それよりも、それがしに、木乃伊というものを、見せて頂けますまいか」
「お安い御用です。明日にも、お出かけ下されば……」
総七は、気軽に承諾した。

九

偶然であった。
新八郎が、佐野家を訪れたその日、隠居所に於ては、異様な光景が起っていたのである。
総七は、新八郎を迎えると、すぐ、立って、隠居所へ案内したが、木戸を通ると、いつものくせで、忍び足になった。
亡父が樹木が好きだったので、そこの小さな庭の植込みは、かなり深かった。
総七は、植込みを抜け出ようとして、足を停めると、緊張した表情で、三四歩あとを来た新八郎を、ふりかえった。

「左門が、なにかを、いたそうとして居ります」
「……」
新八郎は、総七のわきに出て、隠居所の座敷へ、視線を向けた。
総七にきいた通り、左門の容貌は、尋常ではなかった。疾患者の暗い色ばかりではなく、業苦が凝集したような陰惨なにおいがただようているようであった。
左門は、白刃を手にしていた。
正しくいえば、白刃を、萎えた双手に、すげに、白い布で、柄にしばりつけさせていた。
「刀を使うつもりじゃな」
総七は、好奇の目を光らせ乍ら、呟いた。
左門が、はじめて見せた怪しい振舞いであった。
左門は、すげを叱って、もっときつく、と命じているようであった。
火箸すら、あまり長くは持っていられぬ手に、白刃を握らせるのであったから、布でよほどかたくしばりつけなければならなかった。
すげは、けんめいの力をこめて、幾重にも巻きつけ、ひきしぼり、ようやく、むすびあげた。
左門は、起つと、床の間へ進んだ。そこに、亡父の木乃伊が、安置してある。
総七と新八郎のひそむ場所からは、床の間は、見えなかったので、位置を移動しなければならなかった。
「あれが、木乃伊でござる」
総七に指さされた新八郎の目には、柿葺の土廂が深いために、座敷が薄暗く、床の間のそれが、大

きな黒い仏像のように見えたばかりであった。
左門は、木乃伊に向って、白刃を構えた。
「お！　おのが親を、斬る所存か？」
総七が、思わず、首を縮めた。
見まもる新八郎の心も、にわかに、動いた。
その萎え手に白刃をしばりつけて、木乃伊となった父親を、斬ろうとする行為は、ただの狂気沙汰とは思われなかった。その理由を、すげも承知しているからこそ、うしろに控えて、じっと待っているのであろう。
新八郎の目は、左門の構えが、きわめて不安定な、隙だらけなものであるのを、看てとった。
しかし、全身にこめた心気は、道場での立合い稽古で示す門弟たちのそれとは、比較にならぬ必死なものであることが、ひしひしと感じられた。
萎え手のために、兵法修業はできなかったに相違ない。白刃を手にしたのも、いまがはじめてかも知れない。しかし、構えた姿には、剣の奥旨を知っている者のみが首肯する鋭気が、陽炎のように、燃えている。
剣の業に無縁の者には、ついに、知り得ぬ、ふしぎなものが、「気」である。
心とは、別のものである。心が、その「気」と一如となった時、想念が去って、思うがままに、五体を翻転させて、剣をふるうことができるのであった。
心気とは、心と気が融けあったのをいう。そして、気は、より鋭ければ、鋭いほどよい。
心は、事理の判断の器官であり、気は、刹那に反射する神経をいかにすばやく働かせるかを――そ

れをつかさどる。
心気が一如になることによって、全くの一瞬裡に、剣の業が発揮され、敵を倒し得る。
いま、左門が、陽炎のように燃えたたせている鋭気は、まさしくほんものであった。
もしその双手が、萎えていなければ、この若者は、卓抜した手練者になったに相違ない、と新八郎は感じた。
いかんせん、鋭気に、技がともなってはいなかった。
また、心も、その構えのごとく、不安定のようであった。ありありと、その心の不安定さが、新八郎の目につたわって来た。
左門が、木乃伊を睨みつけて、動かぬ長い時間が、経過した。
不意に――。
「やあっ！」
左門の口から、懸声が、ほとばしった。
しかし、それは、悲鳴に近い、惨めなものとして、新八郎の耳にひびいた。
――これでは、斬れぬ。
新八郎は、呟いた。
左門は、もう一度、懸声をかけて、白刃をふりかぶった。
木乃伊に斬りつける代りに、よろめいた。
心はみだれ、気がくじけたのである。
どさっと、畳へ崩れ込むと、うなだれてしまった。

背後で、すげは、泣いている様子であった。
総七は、新八郎に、無言で頷いてみせてから、木立を出て、座敷に近づいた。
縁さきに立って、これはどうしたことなのか、と問いかける総七に対して、左門は、暗い眼眸をかえしただけであった。
総七は、新八郎を、左門にひきあわせた。江戸ひろしといえども、この下山新八郎殿の右へ出る剣客は見当らず、子竜平山行蔵が一昨年逝って以来、実戦太刀を使えるのは、この御仁を措いて他にはいない、とかなり誇張した紹介のしかたをした。
左門は、新八郎をじっと視た。星のない右眼の方が、強く光った。なにか云おうと、口をひらいたが、思いかえしたらしく、顔を伏せた。
新八郎は、座敷に上ると、木乃伊に対して、正座した。
木乃伊は、黒羽二重の紋服をつけ、芋屑（おこそ）頭巾をかぶっていた。
皮膚は、木の皮のように黒ずんで、ひからびていたが、肉を落していないふくらみを持っていたし、高い鼻梁もそのままの形をとどめていた。ただ、唇はなくなり、白い歯がむき出されていた。
それよりも、無気味であったのは、窪んだ眼窩に、目がはめ込まれていることであった。
目は、みがき込まれた赤い玉であった。
新八郎は、その赤い双眼を凝視して、対座しているうちに、じわじわと迫って来る妖気をおぼえた。
物体と化したものから、妖気を受けることに、新八郎は、微かな腹立たしさをわかせた。
新八郎は、なおしばらく、その妖気に堪えていてから、左門をかえりみて、なぜ玉を目にしているのか、と訊ねた。

「盲目であった父の遺言にて――」
左門は、こたえた。
総七が、きり出す汐どきとみたらしく、
「いかがだな、左門殿。ここらあたりで、父御の木乃伊を、江戸まで持参した仔細を打明けてみなさらぬか？」
ともとめた。
「父御の遺体に向って、刃を向けた振舞いも、われわれ他人には、なんとも納得いたしかねる。よほど、胸の裡に、苦しい懊悩があるように察しられる。……打明けてもらえるなら、どのような力にでもなろう。いかがだ！」
総七は、ここぞ、とすすめた。
しかし、左門は、
「その儀は、おたずね下さるな」
と、かたく拒んだ。
「しかし、このまま、仔細も判らぬまま、お手前を、備前へ帰すわけには参らぬ。治療もつづけねばならぬことだし……」
「治療の儀は、あきらめました」
「まだ三月もつづけては居らぬではないか。あきらめるのは、はやすぎる」
「いいえ、この萎えた手が、刀を摑めるようになるのぞみはありませぬ。名医にかかれば、なおるかも知れぬ、と考えたのはわたくしのまちがいでありました」

「徒労と知っても、すくなくとも一年はつづけてみるがよろしかろう」
「この上、御当家に、ご迷惑をおかけするわけには参りませぬ」
「いや、当方は、一向にさしつかえはない。……それよりも、どうして、お手前は、他人の力をかりようとはせぬのかな！」
「……」
左門は、総七からそのことにふれられると、たちまち、口をつぐんだ。
総七が、なお、しつっこく、告白をもとめようとすると、左門は、わずらわしげに、首を振っておいて、新八郎を視た。
「おたずねつかまつる。この萎え腕では、父を斬ることは、叶いますまいか？」
新八郎は、すぐには、こたえなかった。
「ごらんなされたままを、おきかせ下され」
左門の表情には、必死な色があった。
「お手前は、ただ斬ろうとこころみただけではなかろうか」
新八郎は、云った。
「しかし、心は、斬ろうとする行為とともに、働いてはいなかったのではあるまいか」
「たしかに！」
左門は、みとめた。
「心が、働けば、斬れるかも知れぬ」
新八郎は、云いおいて、座を立った。

十

佐野総七が、川船奉行松本玄蕃に呼ばれたのは、それから十日ばかり過ぎてからであった。
その座には、勘定奉行所の吟味方改役がいた。川船奉行は、勘定奉行に属していたのである。
吟味方改役は、酒巻九十郎と名のった。
松本玄蕃は、なにげない口ぶりで、きり出した。
「一昨日、上州無宿の無職者で、満吉と申す者が、牛込のさる旗本の家へ、忍び込んだところを、逮捕された。……北町奉行所で、こやつの住む浅草阿部川町の裏店を捜索したところ、慶長大判が数枚出て参った。どこから盗んだ、と責めたところ、青山百人町の旗本の家から、盗んだ、と白状いたした。その旗本の家は、どのあたりか、と問うたところ、うしろが原宿村の田畑がひろがっている、南端の屋敷で、母屋ではなく、隠居所らしい住居から盗んだ、という。……それに、該当する家と申せば、さしずめ、お宅なので、一応、たずねてみることにしたのだ。……どうなのかな？」
訊ねられて、総七は、かくしておけぬ、と覚悟した。
隠居所から、黒井左門とすげがいなくなっていれば、亡父がかくし持っていたものであろう、ととぼけることができるが、二人は、そこにいるのであった。
勘定吟味方改役酒巻九十郎は、見るからに、頭の切れそうな男であった。
左門とすげを訊問すれば、すぐに、盗まれたことが、知れる。
総七は、二人をわが家に居候させたことを、つよく悔い乍ら、

「お届けつかまつらず、申しわけありませぬ。たしかに、隠居所より、慶長大判を盗まれた事実がございます」
と、こたえた。
「伊賀衆であった頃からのたくわえかな？」
総七は、わるびれず、黒井左門とその召使いすげを、番所で取調べてから、怪しむべき者どもと睨んだ時のことからのいきさつ一切を、述べた。
川船奉行は、なぜ勝手にかくまった、と叱るかわりに、酒巻九十郎に、この件はそちらにまかせよう、という目つきを送った。
ずっと沈黙を守っていた酒巻九十郎は、
「ともあれ、その両名に、会うことにいたそう」
と、総七に云った。
「ご案内つかまつる」
総七は、内心、
――小普請組へ入れられるだけでは、すむまい。甲府勝手か。山流しもやむを得ぬ。
と、やがて下されるであろう処罰を、思いやり乍ら、重い腰を上げた。
往還へ出た時、酒巻九十郎は、
「その若者は、まだほかに、慶長大判を所持している様子でござるか？」
と、訊ねた。

「いや、有金であったようです。……しかし、口ぶりでは、備前のおのが家には、まだ、それが、あるらしゅうござる」
「浪人、と申した由だが、慶長大判を、今日まで、たくわえているところをみると相当な旧家でござろう。どのような家か、きかれなんだか？」
「きき申したが……、山の中の古い家、とだけ、こたえてあとは、何も――、まことに、頑なに無言を守る若者でござって、もてあましているのが、実状でござる」
「駆落ち者、とみたと云われたが、父親が木乃伊になっているのであれば、当主であるゆえ、べつに、駆落ちをして参らぬでもよいわけでござるな」
「いや、備前の家には、八十になる祖父が健在すると申して居りました」
「ふむ、祖父が健在とな――」
酒巻九十郎は、前方へ冷たい眼眸を据えて、おうむがえしをした。
――この改役は、勘定奉行所随一と称されているに相違ない。
総七は、直感した。
佐野家の隠居所に、左門とすげは、いなかった。
座敷には、木乃伊が、白い布をかぶせられているばかりであった。
「今日は、治療に行く日ではないが……」
総七は、首をかしげた。
念のため、中間を、蘭医の許へはしらせた。
中間が戻って来るまでの小半刻を、酒巻九十郎は、無駄には、費さなかった。

隠居所内を丹念にさがしまわった。木乃伊から、掩いをはらって、その紋服の懐中まで、さぐってみた。
慶長大判は、一枚も発見できなかった。
中間が、息をはずませて戻り着くと、左門に今日は蘭医へ治療には来ていない旨を、報告した。
「拙者がやって来るのを予感して、逃亡したかな？」
酒巻九十郎が、薄ら笑い乍ら、云った。
「そんな筈はござらぬ。この木乃伊をのこして、立去るなどとは、考えられませんな」
「置きざりにした、と考えられまいか。こんな厄介なしろものは、貴殿の手だすけがなければ、はこべるものではない。……その若者は、亡父の遺骸と申したそうだが、実は、あかの他人の木乃伊かも知れぬ。当人が、そう云っただけのことで、父親である、という証拠はござらぬよ」
そう云われてみれば、その通りであった。総七は、急に、むしゃくしゃして来て、いきなり、木乃伊の肩をつかんで、
「こやつが！」
と、ぐらぐら、ゆさぶってみた。
木乃伊は、きわめて、軽かった。
酒巻九十郎は、冷たい目で、総七のすることを、眺めていた。

十一

その日、左門は、下山新八郎を訪問していた。
新八郎は、三人ばかり撃ち合っていた門弟たちを去なせておいて、道場の広い板敷きの上で、左門と会った。
「おききとどけたまわりたいお願いの儀があります」
左門は、云った。
「なんでござろうか？」
「わたくしと、立ち合って、頂けませぬか？」
「教えてくれ、といわれるのか？」
「いえ、そうではありませぬ。お教え頂かなくてもよいのです。……真剣で、立ち合って下さるならば、と存じます」
「どういう意味あいであろう？」
新八郎は、眉宇をひそめた。
教えてもらう目的ではなく、立ち合ってくれ、というのは、斬って欲しい、と所望していることなのか。自分が自殺できぬので、そういう死にかたをえらぶ、というのか。
それならば、ばかげた思いつきといわざるを得ない。
兵法者たるものが、兵法を知らぬ者と、真剣勝負をして、これを斬る道理がないのである。
「理由をおききなさらずに、立ち合って下さるわけには、参りませぬか？」
「自殺の一手段として、えらんだ、といわれるなら、おことわりするよりほかはない」
「いえ、決して、自殺したいのではありませぬ。わたくしは、貴方様に斬られるつもりはありませぬ。

また、決して、斬られはいたしませぬ」
「……？」
「貴方様が、たとえ、わたくしを斬ろうとなされても、斬ることは叶いますまい」
「鋭気だけで、ふせぐのは、不可能と思うが……」
「もとより、承知いたして居ります。しかし、わたくしは、鋭気のほかに、別のものを持って居ると確信して居ります。……このからだでは、一度も、兵法修業をしたことはなく、刀の構えかたすらも知りませぬ。貴方様も、ごらんなされたごとく、父の木乃伊を斬ろうとしたわたくしの構えは、惨めきわまるものでありました。生れてはじめて、刀を握ったのでありますゆえ、これは、いたしかたがありませぬ。……にも拘らず、わたくしは、一流兵法者である貴方様には、絶対に斬られはせぬ、という確信を持って居ります」
「……」
「兵法を習ったことのないわたくしのからだには、先祖から与えられた、まじり気のない血汐がかようて居ります。この血汐が、貴方様と真剣で立ち合った時、必ず、目ざめて、わきたつと存じます」
「……」
「木乃伊は、木か石と同じく、動かぬものにて、わたくしがいかに鋭気を発しても、これに応えてはくれませぬ。そのために、先祖が与えてくれた血汐は、目ざめず、わきたちませぬ。しかし、対手が、一流兵法者ならば――貴方様ならば、その剣気を受けて、わたくしの血汐は、必ずや、目ざめて、わきたつに相違ありませぬ」
「血汐が目ざめて、わき立つとは？」

「申し上げます。わたくしの先祖黒井大膳亮は、人間の本然性を、さらに純度をたかめることによって、剣の真髄を会得いたした由にございます。これを、大膳亮は、名づけて、かげろふ太刀と申しました。かげろふ太刀は、技にあらず、おのが血汐の中にあるもの。その血汐をわきたたせるならば、岩をも鉄をも、一太刀にて両断できる、と子孫へ口伝いたしました。そうして、わが子孫が、その血汐に、不純なる他人の血汐をまじえないかぎり、かげろふ太刀は、永遠に、末の末の裔までも、つたわるであろう、と遺言つかまつりました。……わたくしが、この萎え手をなおしたく、必死になりましたのは、おのが血汐の中にひそむかげろふ太刀を使いたいために、ほかならなかったことです。すなわち、萎え手をなおして、まず、はじめに、かげろふ太刀を使って、父の木乃伊を両断する。そのために、この江戸まで、あれを、はこんで参りました」
「なぜ、父上の木乃伊を、斬らねばならぬのであろう？」
「これが、家法でありますれば……」
「家法？」
「はい――」
左門は、うなずいてみせた。
「奇妙な家法もあるものだ」
新八郎は、納得できぬ面持であった。
亡父の遺体を木乃伊にしておいて、これを、子が斬る。これほど、神仏にそむいた行為はない、といえる。
人間として、なにかを踏みあやまっている、としか考えようはなかった。

また——。
その先祖が、兵法の奥旨をきわめて、意外の秘技を会得したといっても、それが、子孫にそのまま、つたわるものとは考えられなかった。
絵師の子が、父から教えられずとも、絵の才能を持っている、ということはあり得る話だが、この場合は、いささかちがうようである。まして、生来の不具であり、剣を使う上で、絶対に必要なその双手が萎えている身をもって、どうして、遠い祖先が編んだ秘太刀を使えるものであろうか。
左門自身、かげろふ太刀とは、どういうものかさえ、知らぬに相違ないのだ。
神がかりに似た左門の言葉を、新八郎は、まともに、受けとるわけにはいかなかった。母親が狂い死にした、ときいたが、狂気の家系なのかも知れぬ。そう思いつつ、新八郎は、左門の顔を、あらためて、瞶めた。
しかし、その表情にあらわれているかぎり、狂気の色は、うかがわれなかった。
左門は、云った。
「わたくしの申し上げたことを、お疑いになるのは、ご尤もに存じます」
「ご納得いただくためには、始祖黒井大膳亮のことから、申し上げなければならぬと存じます。何卒、おききたまわりたく存じます」
「うかがい申そう」
新八郎は、座敷の方へ、左門をいざなった。

十二

慶長五年九月十五日辰刻——。
徳川家康が率いる東軍と、石田三成が率いる西軍と、双方合せて十七万五千の軍勢は、関ヶ原を中心として、天下分け目の決戦を為した。
太田和泉守牛一は、この合戦のさまを、次のように記述している。
「内府公、赤坂を払暁に立たせられ、野神と関ヶ原の間に御旗本の御人数、備えられ、御馬廻りと魚鱗、鶴翼の御陣取りなり。その朝、朝霧淡く降りて、雨もそぼ降り、物の色目も見えわかず。ようやく、巳刻ばかりに、空も晴げに、見えわたる。
時に、沢井右衛門、祖父江法斎、森勘解由、物見にまかり出で、御敵も出合い寄合いがしらに、相戦う心ばせの高名あり。
御敵治部少輔（三成）、島津兵庫、小西摂津守、旗がしらを見申す。森子川を越え、不破の関屋より北野の原、小関村を出て、南に辰巳に向い、人数をそなえ、大谷刑部少輔、備前中納言（宇喜多秀家）、平塚因幡、戸田武蔵、戸田内記は、石原峠に居陣也。
ここを、ひきおろし、谷河を越え、関ヶ原北野へ、人数くり出す。西北の山手をうしろにして、同十五日、辰巳へ向って軽卒を出し、御先陣羽柴左衛門大夫（福島正則）、羽柴越中守（細川忠興）、黒田甲斐守、井伊兵部少輔、本多中務大輔、大野修理亮ら、葦毛馬の太く逞しきに、白き切割のさし

物にて道筋を、西向きに、どっと、うちかけられたり。御敵もかかりあい、押しつ、押されつ、思い思いの勝負あり。ひけば引きつけ、つき倒し、頭をかき切り、時に、甲智七右衛門と名のり、大野修理、この者の頭を取り、大将軍（家康）の御目にかけられ、御褒美なめならず。福島刑部少輔、同伯耆守、首を取り持ち、上覧にそなえ、いちいち御詞加えられ、かたじけなき御諚どもに候き。

左は道より南に藤堂佐渡守、京極侍従に西向きにかかりあい、引き退く者を追いかけ、手に手に頭を討ちたり。敵味方、押し分け、鉄砲をはなち、矢たけびの声、天をひびかし、地をうごかし、黒烟立ちて、日中もくらっみとなり、敵も味方も入り合い、錣を傾け、干戈をぬき持ち、押しつまくりつ攻め戦う。切先より火焔をふらし、日本国二つに分って、ここをせんどときびしく戦い、数度の働きこの節也」

やがて、小早川秀秋の寝返りによって、西軍の後陣が崩れるのをきっかけにして、彼我の旗色は、明白となった。

西軍の駿将大谷刑部少輔吉継が、討死した。次に、樊噲にひすべき平塚因幡も、阿修羅となってあばれた挙句、東軍へ首級を渡した。

島津義弘は、東軍のまっただ中を突破して、退却して行った。福島正則勢と激突した宇喜多秀家勢も、ついに潰滅敗走した。小西行長軍も、そして最後に、石田三成軍も、総崩れとなって、討死し、遁げ去った。

南宮山に布陣していた西軍総帥格の毛利輝元は、矢たけび鬨の声をきき乍らも、ついに戦わずして、

一万六千の兵を、退却させた。これは、わずか千五百の手勢を率いて死闘し、ただの八十余人生き残らせただけで、退却して行った島津義弘と全く対蹠的であった。

関ヶ原の決戦は、半日を以って、終了した。

戦後五日を経て、まず小西行長が捕えられ、次いで、それから三日後に、石田三成が捕えられた。安国寺恵瓊もその翌日、捕えられた。長束正家は自殺した。

行方不明になったのは、宇喜多秀家だけであった。

その家臣進藤正次が、秀家が自殺した旨を、その証拠として、佩びていた短刀をさし出して、報せたが、本多正純は信じなかった。ただ、家康が、

「よい」

と、頷いたので、正純は、探索しないことにした。

その頃、一人の人物が、小舟で、備前の深い入江の奥の浜辺へ、戻りついた。

顔面にも、頸にも、肩にも、腕にも、刀槍の傷を蒙っていた。家来三人をひきつれているだけであった。

手負い武者は、ひとにぎりほどの盆地に、二三十戸がちらばっている村落に入ると、北山の麓に、一戸だけ大きな構えをみせている家を訪れて、小休止した。

それは、横山源十郎という村長の家であった。

手負い武者は、南方の空をふさいだ、漆黒の密林につつまれている黒井山の山頂に、宏壮な館を据えている黒井大膳亮正昌であった。

毛利氏が中国を制圧する以前、黒井大膳亮は、ここから四里ばかり沖あいの鶴舞島を本拠とする海

賊であった。所有する七艘のうち、三艘までが、ポルトガルから購入した長さ二十間にも及ぶ大形船であった。本帆、弥帆、高帆を檣にかけて、上廻りを赤く丹土色に塗り、遣出し（舳先に突出した帆柱）の尖端に、真紅の髑髏を描いた旗をひるがえした船影は、瀬戸内海を航路とする商い船を、ふるえあがらせたものであった。

秀吉が、天下を征覇してから、大膳亮も、降服して、宇喜多家の麾下に入り、その水軍の将となった。

宇喜多家の麾下に入ったとはいえ、東は紀伊、西は豊前まで、瀬戸内海を縦横むじんにあばれまわった海賊魂は、ただの部将として謹慎せず、一年の大半を海で送り、時には、毛利の水軍の一艘と砲火を交えて、これを拿捕したりした。

このたびの決戦には、自ら乞うて、海の荒くれ男を百五十人もひきつれて、宇喜多勢に加わったのであった。

そして、おのれ自身のほか、たった三人の家来と、生還して来たのであった。

兵庫湊に碇泊させておいた七艘の船は、徳川幕府に奪われ、文字通りまる裸になって、その身ひとつを、故郷へ持ち帰った大膳亮であった。

横山源十郎が、ねぎらうと、大膳亮は、なお傲然と胸を張って、

「お主は、死んでは居られぬ。軍資金も充分ある。再挙じゃ」

と、うそぶいた。

小休止ののち、大膳亮は、黒井山上の館へ戻るべく、横山家を出た。大膳亮は、秀家の生存を、かたく信じていた。主君の宇喜多秀家には、どうしても生存していてもらわなければ、ならなかった。

なぜなら、大膳亮は、秀家から、十万両の慶長大判を、軍用金として、預っていたからである。

秀家は、石田三成に味方するべく、大阪城へおもむくにあたり、もし万が一、徳川家康に敗れた時のことを予想して、再挙の軍用金を、岡山城から、つかわしたのであった。ひそかにはこんだのが、岡山城下から七里余はなれた入江にそびえる黒井山の、黒井館であった。

秀家は大膳亮に対して、絶大な信頼を置いていたのである。

十万両の慶長大判を預った以上、大膳亮は、秀家に生きていてもらわなければならなかった。大膳亮は、西山の麓から、急勾配の石塊だらけの坂道を、喘ぎ喘ぎ、登り乍ら、いくども、そのことを、独語した。

家来が、あと押しをしようとすると、払いのけて、ついに、杖にたよって、頂上へ登り着いた。全身を負傷し乍ら、五十八歳の体軀は、流石に、海で鍛えあげられて、不死身であった。

館には、老人と婦女子と子供だけが、待っていた。ひきつれて行った百五十人が、大膳亮の家来全員であった。

あまりの悲惨な生還ぶりに、茫然として言葉もない一族郎党を前にして、大膳亮は、

「くじけまいぞ、くじけまいぞ。……ほれ、そなたが抱いている赤児が、そこで洟をたれているわっぱが、あと二十年も経てば、逞しゅう育って、船に乗るわさ」

と、云って、からからと笑ってみせたことだった。

三日間を臥牀しただけで、大膳亮は、四日目には、もう夜明けに起き出て、木太刀の素振り千回を、はじめていた。

剣の業に於ては、鬼神の生れかわり、と自ら高言するだけあって、凄じい習練を一日も怠ってはい

なかった。家来百四十七人を討死にさせ乍らも、おのれだけは生還できたのは、そのおかげであった。
老爺の一人から、
「このたびの戦場で、幾人お斬りなされた？」
と問われて、
「かぞえきれぬ」
とこたえたのも、誇張ではなかったろう。
大膳亮は、十年前、海賊船の舳先に立っている時、天の啓示のごとく、さとった業を、かげろふ太刀と名づけていた。

十三

宇喜多秀家が、行方知れずのまま、三年の歳月が流れた。大膳亮は、六十歳を越えていた。しかもなお、渠は、主君の生存を、毫も疑わず、再挙にそなえて、身体の鍛練を怠らなかった。
備前国は、池田家のものになっていた。さいわい、池田家は、黒井館に対して寛容の態度を示した。その知行こそ、召し上げたが、近辺の漁師が、その漁獲物を、黒井館に提供することは、黙認したし、大膳亮自身に対しては、なんの咎めも下さなかった。尤も、七艘の船と家来全員を喪ってしまった老海賊を、翼と嘴をもがれた鷲とみなしたからに相違ない。
池田家では、大膳亮が、秀家から莫大な軍用金を預ったことを、知らなかった。
ある冬の朝のことであった。

館の庭に、一人の男が、ひき据えられた。関ヶ原から生還した三人の家来のうちの一人であった。その膝の上には、五枚の慶長大判が置かれていた。軍用金の中から、盗んだのである。
それが露見して、処罰されることになったのである。
家来は、覚悟のほどができたとみえて、地面に正座して、目蓋を閉じていた。
大膳亮が、太刀を携げて、広縁に現われた。
「三郎次。当館で、盗みを働いたのは、その方が、はじめてだ。まして、盗んだのが、お預りの軍資金とあっては、天人ともに許さぬところじゃ。関ヶ原でひろった冥加の生命も、今日までと知れ」
「はい、おん自らのお仕置、忝く存じます」
「うむ。よく申した」
大膳亮は、ふりかえって、
「小夜――」
と呼んだ。
「小夜、ひろい丸をつれて参れ」
「はい」
まだ二十歳を出たばかりのういういしい女が、五歳あまりの幼児の手をひいて、出て来た。
幼児は、大膳亮の実子であった。五十歳すぎても、あと継ぎにめぐまれなかった大膳亮は、出来心で手をつけたこの小夜という娘を懐妊させ、男の子を産ませたのである。
もはや、子にはめぐまれないものとあきらめた頃に、得た子なので、ひろいものだ、といって、ひろい丸と名づけたのである。

「ひろい丸、怯えずに、目を大きくひらいて、父の剣を、ようく、見とどけい。かげろふ太刀を、使うてみせるぞ。そなたは、かげろふ太刀を、継がねば相成らぬのだ。……目をつむっては相成らぬぞ。しかと、見とどけるのじゃ」

大膳亮は、そう申しきかせておいて、庭へ降り立った。

罪人は、目蓋をひらいて、主人を仰いだ。

「三郎次、その大判を口にくわえい」

「はい」

罪人は、大判五枚をかさねて、口腔内に容れた。

「三郎次、まなこをひらいたままで居れぃよ。よいな」

罪人は、頷いた。

大膳亮は、べつに身構えもせずに、左手に太刀を携げたなりで、じっと、罪人を、見下していた。

罪人もまばたかず、広縁上の幼童もまばたかなかった。

一瞬――。

「えい！」

天も地もつらぬく懸声がほとばしった。

大膳亮は、構えも見せず、抜く手も見せなかった。

白い光芒が、宙に閃いたばかりであった。

大膳亮が、白刃をしずかに鞘に納めても、なおまだ、罪人は、同じ姿勢で、そこに坐っていた。目蓋もひらいたままであった。つと、大膳亮は、一歩寄って、罪人の口から、五枚の大判を、抜きとっ

た。

そして、それを、わが子ひろい丸の前へ、抛った。

大判は、五枚とも、見事にま二つになっていた。

その時、罪人が、どうと、うしろへ仆れた。首は二つに割れて、みるみる血汐があふれ出た。

大膳亮は、優しく問うた。

「ひろい丸、これが、かげろふ太刀じゃ。見とどけたか？」

ひろい丸は、こくりと頷いた。しかし、目撃したことは、あまりに強烈な衝撃であったとみえて、みひらいたままの目蓋が、ふさがらなくなり、母小夜は、あとで、小半刻も、目蓋を撫でて、ふさいでやらねばならなかった。

大膳亮の言辞挙動が、すこしずつ怪しくなったのは、その年からであった。

孤独でいる時は、絶えず、ぶつぶつと、独語するようになった。食膳に就いて、箸を把ったまま、何を想起したのか、四半刻も、ずっと宙へ眼眸を据えていることもあった。突然、望楼にのぼって、沖あいを往く船を指さし「中納言殿が、どこかの島から、ここへ、軍資金を取りに、参られるぞ！」と、終日そこから動かぬこともあった。

――狂われた。

周囲の者は、いたましく思って、一切さからわぬことにした。

大膳亮は、それから三年を生きて――六十四歳で逝ったが、死ぬ前年あたりは、ふしぎなことに正常の言辞挙動にかえった。

流石の不死身の体軀も、目に見えて、衰弱していった。

死神を迎えるその年の正月――。
大膳亮は、小夜とひろい丸を、前に据えた。
威儀を正して、きかせはじめたのは、まことに奇怪な遺言であった。
「小夜、はじめにことわっておくぞ。わしは、狂っては居らぬぞ。皆の者どもが、わしが乱心している、とささやきあっていたことを、わしは知って居る。わしは、みじんも狂っては居らぬ。まず、それを心得て、きけい。ひろい丸も、わしの言葉を、胸にたたんで、忘れまいぞ」
「はい」
母子は、息をつめて、大膳亮を瞶めた。
「小夜。そなたは、実は、わしの娘だ。……おどろいたか。まぎれもない事実だ。そなたの母は、わしの実妹であった。……きけい。わしは、海賊であった頃、他家の娘を、あるいは貰いうけ、あるいは拉致して、妻としたが、ついに、一人も、わしの子をもうけることは、叶わなかった。それで、わしは、こころみに、実妹を犯してみた。妹は、忽ち懐妊したではないか。わしは、悦んだ。しかし、妹が産んだのは、そなた――小夜であった。妹は、そなたを産んだあと、愧じて、自殺し居った。そなたは、家来の一人の娘として、育った。そなたが娘に生長するあいだ、わしは、幾人も女子を抱いた。しかし、それらの女子は、一人として、わしの子を――あと継ぎを産まなかった。わしは、ある日十六歳のそなたを犯した。なんという皮肉であろうか。そなたは、そなたの母と同じく、たちまち、懐妊いたした。……ひろい丸が生れた。天にそむいた所業という勿れ。わしは、わが黒井家が、他家の血をまじえぬさだめを与えられている、と思うた。いまも、信じて居る。
小夜、よいか、ひろい丸が十五歳になったら、そなたは、わが子と夫婦になれい。夫婦になって、

子を幾人でも産めい。ひろい丸は、それらの子の中から、えらんで妻として、また、子をつくるのじゃ。さすれば、黒井家の血は、永久に、他家の血をまじえずに、純潔を保つことができようぞ。
わしはかげろふ太刀を会得した。この秘法を、子孫につたえたい。しかし、稚いひろい丸に、手をとって教えることは、もはや、叶わぬ。わしの寿命は、尽きて居る。さいわいにして、わしが、手をとって教えずとも、他家の血のまじらぬひろい丸の血汐の中に、わが編んだかげろふ太刀は、うけ継がれて居るに相違ない。成年に達すれば、必ず、ひろい丸は、かげろふ太刀を、おのずから会得いたそう。わしは、かたく信じる。
そうだ。わしは、三十年前、シャムロへ行った時、死体を木乃伊にする術を、学んだ。この術は、わしとともにシャムロへ行った伍呂兵衛爺いも、知って居る。わしが亡くなったならば、伍呂兵衛爺いに、わしを木乃伊にさせい。わしからも、伍呂兵衛爺いに命じておく。
ひろい丸。お前は、二十歳になったならば、わしが遺品の三条宗近を抜いて、わしの木乃伊を、両断してみせい。お前が、わしの木乃伊に向って、宗近を構えた時、おのずから、かげろふ太刀を会得するに相違ない。かげろふ太刀を会得せぬ限り、わしの木乃伊は、決して、両断できぬぞ。お前は、かげろふ太刀を、子孫に伝えるためにも、わしの木乃伊を斬って、会得せねばならぬ。
もし、お前が、業つたなくして、わしの木乃伊が斬れなかった時はお前の子に、孫に、斬らせい。
きまったぞ、わが黒井館の家法が――。ひとつは、血統に、他家の血をまじえぬこと。いまひとつは、おのれの父親を木乃伊として、これを斬り、かげろふ太刀を、会得して、子孫につたえること。このふたつじゃ。かまえて、この家法を破っては相成らぬ。よいな、この家法を破った時、黒井家は、絶えるぞ」

どうしたことか、大膳亮は、宇喜多家預りの十万両の軍用金の処置については、遺言に加えなかった。
その年の初夏、大膳亮は、ねむるがごとく鬼籍に入った。

十四

左門が、始祖大膳亮のことを、語り了えてから、長い沈黙が、座敷を占めた。
新八郎は、腕組みして、庭へ視線を送っていた。
新八郎は、左門の話に、なかば疑惑を抱きつつ、聴き了えたのであった。それは、あまりにも、伝説のにおいがつよかった。
しかし、その疑惑を口に出すことは、はばかられた。
「つまり……」
新八郎は、長い沈黙を破った。
「慶長のむかしから、黒井家は、近親同士が婚姻を重ねて、現在のお手前に至った、といわれるのか？」
「そうであったろうと思います」
「お手前のご両親は？」
「従兄妹同士でありました」
「いま、ひとつ、うかがおう。黒井家の代々の——ご当主は、そのかげろふ太刀とやらを、必ず会得

されたのであろうか？」
「会得したと存じます。……ただ、父は、祖父よりさきにみまかりましたゆえ、父親の木乃伊を斬っては居りませぬ。盲目であったゆえもありましょう」
「………」
「黒井家は、わたくしを以って、絶えることになります。わたくしには、妻とすべき母も叔母も、姉妹も、従姉妹も居りませぬ。……この萎え腕がなおらぬ限り、かげろふ太刀の会得は叶わず、もはや、黒井家は、絶える時を迎えたか、と存じます」
「………」
「しかし乍ら、わたくしは、自分の血汐の中に、かげろふ太刀が在ることを、信じて居ります。このかげろふ太刀を、後世にのこすことだけが、わたくしの使命かと存じます」
「………」
「貴方様が、真剣の立ち合いをして下さるならば、わたくしの血汐が目ざめ、わき立って、かげろふ太刀を、貴方様に——貴方様の剣に、移すことができるのではあるまいか。わたくしは、そう考えました。……お願いつかまつります」
左門は、萎えた双手を畳に置くと、頭を下げた。
新八郎には、そんなことが、あり得ることとは、思えなかった。兵法など全く知らぬ者が、兵法者に、剣の秘奥を、伝授するというのである。常識では考えられぬ、ばかげた相談であった。
しかし、この時、新八郎の脳裡には、ふっと、十歳の時に、父からきかされた自分の先祖のことが思い泛んだ。

――わが先祖の奈佐日本之助は、海賊であった。……この若者の先祖も、海賊であった。
この偶然の一致が、新八郎の気持を変えた。
「立ち合い申そう」
新八郎は、承知した。
「お立ち合い下さるか！」
左門の白い貌に、喜悦の色があふれた。
新八郎と、左門は、道場へ移った。
左門は、携えて来た差料を示して、
「これは、始祖大膳亮が、かげろふ太刀で盗みを働いた家来を両断した三条宗近でござる」
と、云った。新八郎の方は、そのような名刀を、所持してはいなかった。
左門は、佐野家の隠居所でしたようにすげに命じて、宗近を握った萎え手を、白い布で、力一杯しばりつけさせた。
左門が、立った時、その刀身がいかにも重げであった。
「お願いつかまつる」
「では――」
新八郎は、差料を抜くと、左門と、六尺余の距離を置いて、青眼に構えた。
左門も、新八郎にならって、青眼に構えた。
それなり、両者は、動かなくなった。
宵闇が、道場へ、しのび入って来て、人も刀も包みはじめた。

佐野総七が、勘定奉行所の吟味方改役酒巻九十郎と同道して、下山道場をおとずれた時、すっかり夜になっていた。
――あるいは、もしかすれば？
総七は、カンを働かせて、やって来てみたのである。
二人は、道場の武者窓をのぞいてみた。
広い板敷きは、灯はなく、闇がこめていたが、二人の人間が、白刃を構えて、対峙している光景は、はっきりと見分けられた。
総七は、一人の双手が、ほの白く闇に浮いているのを、みとめて、
「お！」
と、声をたてた。
「あ、あれが、黒井左門でござる」
総七は、九十郎に教えておいて、
「これは、いったい……、新八郎殿は、なにを考えて、立ち合うて居るのか？」
と、訝った。
酒巻九十郎は、剣の心得があった。一瞥して、
――これは、ずっと長い時間を、向い合っているな。
と、直感した。
影になって、闇に溶けているために、両者の構えを見くらべるわけにはいかなかったが、暗い道場内は、あきらかに、無気味な妖気ともいえるものを、たちこめさせていた。

「どうされる？　止めに入りますか？」
総七が、問うたが、九十郎は、返辞をしなかった。
九十郎が、止める意志がないとみて、総七も、沈黙して、見まもりはじめた。
四半刻も、経ったであろうか。
不意に——。
一方の影が、ゆらりとゆれた。新八郎の方であった。
次の瞬間、もう一方の影が——左門が、ゆっくりと、前へ傾いた。
床板をひびかせて、左門が俯伏した時、九十郎も総七も、われにかえった。二人とも、全身に、ぐっしょりと、汗をかいていた。
総七と九十郎が、道場内へ踏み込んでみると、灯がともされていた。すげが、有明を持ちはこんで来たのである。
すげは、左門に近づいて、抱き起した。
新八郎は、同じところに、佇立していた。白刃もまだ、右手に携げたなりであった。九十郎が、踞(かが)みかかって、左門の顔をのぞき、手くびの脈をみた。
左門は、すでに、事切れていた。
「新八郎殿、これは、どうしたことか？」
総七が、問うたが、新八郎は、その声も耳に入らぬように、宙の一点へ、眼眸を置いていた。
その表情は、かなりの苦渋の色を示していた。
「新八郎殿！」

総七が、苛立って、声を荒げると、はじめて、新八郎は、われにかえったように、左門のなきがらへ、視線を落した。
「左門は、死に申したぞ」
総七が告げると、新八郎は、当然だというふうに頷いてから、
「たしかに……かげろふ太刀は、おれの身に、移ったようだ」
と、独語した。
「かげろふ太刀？」
総七は、問いかえした。
新八郎は、こたえずに、左門の死骸へ寄って、その手から、白布を解いて宗近を取ると、それを青眼にかまえた。
総七は、薄気味わるくなって、
「いったい、どうされたというのだ、新八郎殿？」
と、説明をもとめた。
「この若者が、それがしに、秘太刀を授けておいて、逝った、ということです」
「ばかな！　この若者は、武芸など知らぬ。刀をにぎることさえできなかったのだ」
「武芸は、知らなかったが、かげろふ太刀は、その血汐の中にひそめられていた」
新八郎は、宗近の刀身を、食い入るように瞶めて、こたえた。
「新八郎殿、この若者を殺してはならなかったのだ。慶長大判の詮議をしなければならなかったのだ」

総七は、すこしでも自分の罪を軽いものにするために、酒巻九十郎の心証をよくしたかった。
新八郎は、そんな言葉などすこしも耳に入らぬように、宗近の刀身を、凝視しつづけた。
酒巻九十郎が、すげに、
「そなたは、備前から、この黒井左門の供をして来た者だな？」
と問うた。
「はい」
「明日、拙者を案内して、備前の黒井家へ、帰ってもらおう」
九十郎は、命じた。
「はい。……でも、このご遺体と、木乃伊様を、葬らねばなりませぬ」
すげが云うと、
「それは、それがしが、引き受ける」
新八郎が、こたえた。
それから、新八郎は、宗近を鞘に納めておいて、酒巻九十郎に、申し入れた。
「慶長大判の詮議に参られるなら、それがしも、あとから参ることをお許し下され」
「心あたりがあるのかな？」
「それがしが会得したかげろふ太刀が、その詮議に、お役に立つかと存じます」
酒巻九十郎は、この道場主も、剣客にありがちな、いささか狂気じみた性情の持主であろうと思い乍ら、べつに、備前へ来させても邪魔にはなるまいと、
「よかろう」

と、許可した。

十五

下山新八郎が、江戸を発ったのは、酒巻九十郎の発足より、三日おくれた。
十三日間の旅程を終えて、備前国鶴海村へ到着した新八郎は、そのおくれを二日縮めていた。
大庄屋の横山源十郎の家に入ったのは、黄昏近くであったが、酒巻九十郎は、池田藩の役人とともに、黒井山へ登っていて、まだ帰って来ていなかった。
新八郎は、昏れなずむ空を、屋根形に截りとって、くろぐろと、村里へのしかかるようにそびえた黒井山へ、視線を放って、長いあいだ、動かずにいた。
十三代目源十郎を名のる当主が、
「なんとなく気味わるく思われませぬか？」
と、云いかけると、新八郎は、黙って、頷いた。
源十郎は、
――この兵法者も、どことなく、薄気味わるい。
と、胸裡で、呟いた。
寡黙で、陽気なところのない新八郎であったが、これまで、他人に不快な印象を与えたことは一度もなかった。
いつの間にか、他人をして、気味わるがらせる人間になっていることに、新八郎自身、まだ気づい

てはいなかった。
酒巻九十郎は、夜もかなり更けてから、大庄屋宅へ戻り着いた。
池田藩の役人ともども、かなり疲労の色をみせていた。
新八郎は、はなれた場所から、九十郎と役人たちとの会話をきいて、慶長大判の詮議が徒労に帰したことを、知った。
九十郎たちは、念入りに、黒井館の中を調べた様子であった。館には、左門の祖父が、老衰して、臥牀していたが、九十郎の訊問に対しては、かぶりを振ったばかりであった、という。
役人たちは、九十郎に、
「百姓どもを動員して、山中をさがさせたり、館内の地面を掘らせてみたりいたしては、如何でございましょう?」
と、しきりに進言した。一人が、
「拙者は、あの木乃伊をまつった祠の地が怪しいと存じます。祠を毀して、地面を掘ったならば、と考えまするが……」
と、自身の想像を誇るように、すすめた。
九十郎は、腕組みして、沈黙を守っていたが、ふと、思い出したように、新八郎に、声をかけた。
「貴公は、会得したかげろふ太刀とやらが、詮議に役に立つ、と云われていたな?」
「たぶん――」
新八郎は、うなずいてみせた。
「明朝、一緒に行って頂こう」

2

「承知いたしました」
「ところで、その――かげろふ太刀、というのは、どのような秘太刀であろうか?」
「それがしにも、まだ、判って居りませぬ」
「判って居らぬ?」
九十郎は、眉宇をひそめた。
「判って居らぬとは、どういうことであろう?」
「まだ使っては居りませぬゆえ――」
九十郎も役人たちも、この言葉に、あきれた表情にならざるを得なかった。
「使って居らぬのにどうして、会得したと、思いきめて居るのか?」
「黒井左門は、おのれの寿命を縮めて、それを、それがしに伝えて居ります。死とひきかえに、伝えのこした――そのことに、それがしは、信ずべき神妙の奇蹟をおぼえます」
「しかし、貴公自身、たしかに伝授された、と確信を抱いたとしても、それは、錯誤にすぎなかった場合だって、あり得るが……」
「たしかに、その場合がなくはない、と存じます。ここまでの道中、それがしの胸中には、しばしば、疑惑が起って居ります。……しかし、当地に至って、あの黒井山の山容を仰いだ時、それがしは、たしかに、左門からかげろふ太刀を伝えのこされたことを、確信つかまつりました」
「と申すと?」
「江戸に生れて育ったそれがしが、この僻邑を訪れたおぼえがあるべくもありませぬ。にも拘らず、あの黒井山を仰いだ時、それがしの心には、ふしぎななつかしい思いがわきました。自分が、あの山

の中で、生れて、育ったような……つまり、故郷に還って来て、自分を迎えてくれた山に対するなつかしさを、おぼえました」
「……」
「黒井左門のたましいが、それがしの身中に移ったことを、このことが、教えて居るのではありますまいか」
新八郎は、そう語ってから、視線を、星かげの空をふさいでいる黒い山容へ、移した。
酒巻九十郎は、勘定奉行所の改役だけあって、目に見えるものしか信じない合理主義者であったので、新八郎の言葉を、信じる気にはなれなかった。
にも拘らず、この兵法者を、黒井館へ連れて行くことに、非常な興味をおぼえずにはいられなかった。
陽が昇った頃あい、酒巻九十郎と下山新八郎は、黒井山中の古刹と隣りあわせた黒井館の前に立っていた。
古刹の占めた敷地はかなり宏大なものであったが、黒井館は、その古刹を圧するほど豪壮な構えであった。
苔むした石垣の前には、深い濠がめぐらされ、古刹が背負う山頂の池から落ちる水が引かれて、枯葉をはやい勢いで流していた。
石垣の上には、塗籠の築地がつくられ、狭間も設けられてあった。土橋のむこうの棟門は、鉄の延板を打った扉が閉められ、左右の壁には、武者窓と銃眼が開いている。

すべてのものが、古く、岩乗で、堂々としていた。
土橋を渡って、潜戸を押すと、内部はまさしく城郭のつくりであった。塀の内側は、倉をならべた多門塀であり、空地は枡形に曲げられ、檜皮葺きの戸をたてた木戸が、母屋の大玄関を、さえぎっていた。
新八郎は、九十郎と肩を竝べて、歩き乍ら、決して、物珍しそうに、視線をあたりへまわしたりなどしなかった。わが家へ帰って来たように、進んだ。
さらに、奇怪であったのは、木戸を通り抜けると、母屋へは向わずに、勝手を知ったものの足どりで、右方の庭を、横切ってゆこうとしたことであった。
「どこへ？」
九十郎が、訝って訊ねると、
「木乃伊をまつった祠へ参ります」
と、こたえた。
新八郎は、はじめて、この館に足を踏み入れたのである。その祠の在処が、わかる道理がなかった。にも拘らず、新八郎は、まちがいなく、その祠の在る方角へ向って、まっすぐに進もうとしているのであった。
九十郎は、昨夜の新八郎の言葉を、思い浮べた。
何か云いかけたが、口をつぐむと、新八郎の為すがままに、まかせてみることにした。
祠は、東寄りの、平坦な広い場所に、枝ぶりの見事な松を幾本か配して、建てられていた。
昨日、九十郎が調べたところでは、そのむかしは、ここに高い望楼があって、瀬戸内海を往来する

船影を、のこらず、見下すことができた由であった。始祖大膳亮が逝ってから、望楼が毀されて、木乃伊となった大膳亮を安置する祠が建てられたのである。
祠は、古びていたが、どっしりとしたつくりで、いちども建て直されたことはないというのに破損の箇所もなかった。
昨日、この前に立った時、九十郎は、出雲大社のたたずまいを、想い出したものであった。規模は、比肩していた。すでに、昨日、役人たちの手で、扉は開けられ、内部は、調査済みであった。
新八郎は、しずかな足どりで、階を登って、扉を引いた。
内部は、薄暗く、板敷きの部分は、広かった。
正面奥に、一段高い壇が設けられ、そこに、黒井大膳亮の木乃伊が、据えてあった。
木乃伊は、甲冑で身がためしていたので、木乃伊であることは、殆ど判らないくらいであった。
頭には、冥官という鉢そのものが奇怪な形相の人面になった冑をいただき、顔の半分を、赤鬚をはねあげた面頬で掩い、身体は山吹縅の大鎧をまとっていた。
大袖で肩を張り、籠手をつけ、佩楯、脛当で、脚を掩い、戦陣用の団扇を右手にし、三尺以上の太刀を佩び、背後には、金の切裂をつけた馬印と、真紅の髑髏を描いた旗を立てていた。
木乃伊であることは、面頬の上に、わずかにのぞいた顔面で判別できるのであった。その双眼が、もし、義眼であったならば、生けるがまま、という形容があてはまったであろう。その双眼には、赤い玉がはめ込まれていた。左門の父親の木乃伊が、そうであったのは、これにならったからに相違ない。
新八郎は、その前に進んで、ぴたりと佇立した。

それなり、いつまでも、動こうとしなかった。
――これが、大膳亮ならば、その子ひろい丸は、これを両断できず、したがって、かげろふ太刀を会得しなかったことになるが……？
二百年前の木乃伊武者と、新八郎は、なにか、無言の対話をこころみているかに、思われた。
やがて――。
新八郎は、腰に帯びて来た左門がのこした三条宗近を、ゆっくりと、鞘走らせるや、木乃伊武者に向って、青眼につけた。
見まもる九十郎は、固唾をのんだ。
さらに――。
身構えたなり、新八郎は、画中の人にでもなったように、微動もせずに、時刻を移した。
見まもる九十郎の方が、口腔内がかわいてしまって、息苦しくなった。どれくらいの固着状態が、つづいたであろう。
突如――、
「えぇいっ！」
祠ぜんたいがびりびりと震動するほどの凄じい懸声が、新八郎の口から噴きざま、白刃は、木乃伊武者めがけて、斬りつけられた。
九十郎は、視た。
木乃伊武者の冥官冑から、面頬、胸板、そして鎧の千旦板の半ばまで、まっ二つに両断されたのを――。

ほんの一瞬を置いて、面頬が左右へころがり落ち、斬られた木乃伊の顔面も、ぱくりと割れた。
とみるや、その斬り口から、きらと光るものが、あらわれ、それは、忽ち、黄金の滝となって、鏘然たる音響を、祠内にたてつつ、足もとへ、なだれ落ちた。

下山新八郎は、酒巻九十郎から、礼金さえも受けとらずに、黒井館を立去ると、そのまま、江戸へも還らず、踪跡をくらましたのであった。
房総へ姿を現わしたのが、天保五年であるから、二年間、どこでどのようなくらしをしていたのか、不明である。手記にも、それは述べられていない。
はっきりしているのは、その二年間に、新八郎の姿が、徐々に、人間ばなれした、幽鬼を想起させるものになっていったことである。

下郎君平

一

本邦最初の遣米使節が、自国の軍艦をもって、太平洋を渡ったのは、万延元年正月のことであった。
日本が開国し、その条約を結ぶにあたって、英、露、蘭、仏の四国は、むこうから使節を江戸へ送って来た。しかし、アメリカだけは、江戸ではなく、ワシントンに於て、と明文を定めたので、やむを得なかった。
正使は、外国奉行新見豊前守正興、村垣淡路守、そして目付として小栗豊後守（のちの上野介）が加わった。
この三使節は、米艦ポーハタンに便乗することになり、護衛艦として、軍艦奉行木村摂津守嘉毅の指揮する咸臨丸が、同行した。艦長は勝麟太郎であった。医学書生として、福沢諭吉も加わっていた。
咸臨丸は、軍艦といっても、わずか三百噸の帆前船であった。蒸気は、出港する時に焚くだけで、沖へ出れば、帆にたよって、風向きに方向をまかせる心細い船であった。

米艦ポーハタンにとっては、むしろ、厄介ものでしかなかった。
ところが――。
記録にはのこっていないが、三使節のうち小栗上野介は、咸臨丸が、米艦より一足さきに、品川沖から出て行くのを見送るや、
「自分は、あれで参ろう」
と、新見豊前守、村垣淡路守にことわって、馬をとばして、浦賀へ先まわりして、そこから、咸臨丸に乗ったのであった。
米艦に比べて、あまりに見すぼらしいわが国の軍艦に、小栗は、急に、
――死なば、咸臨丸とともに！
という気持になったらしい。
浦賀を出たのは、正月十九日で、その日は、日本晴れで、順風であった。
一日置いて、二十一日になると、急に、天候が一変した。
江戸城大手門ほどの巨浪が、船体めがけて、襲いかかって来た。
それから、およそ十日あまりは、雪や霰をまじえる荒天が、つづいた。
文字通り、船は木の葉のごとくもまれた。帆は裂け、はしけ綱はちぎれた。
水主は、荒海を乗りきることに馴れた者たちがえらばれていたが、流石に、往生して、倒れて起き上れない者が、半ばに達した。
太平洋のまん中まで、乗り出した経験者は、全くいなかったので、帆をいっぱいにあげていた。そのために、船体は大ゆれにゆれて、いくたびか、檣が折れようとした。

咸臨丸には、神奈川から便乗させたアメリカの船乗りが十一人いた。太平洋の海底測量のために、小さな帆船で、乗りきって来たのだが、薩摩の大島沖で難破して、日本幕府に保護をもとめた連中であった。
したがって、太平洋を渡る航海術に於ては、熟練していた。
キャプテンのブルックは、荒天下を満帆にして押し渡ろうとする無謀を、注意したものであった。
しかし、軍艦奉行木村摂津守は、異常なまでの強情な性格で、
「このたびの初航海は、断じて、自力でやってみせる。どのような危難に遭うても、米艦と米人のたすけはかりぬ」
と、高言していた。
キャプテン・ブルックの忠告など、全く耳をかさなかった。
ついに、凄じい暴風雨になり、どうしても、帆をおろさざるを得なくなったが、疲労困憊した水主は、一人も檣へのぼることができなかった。
便乗したキャプテン・ブルック以下十一人も、こんなおそろしい時化には遭ったことがない、と云ったくらいである。
檣が折れては、万事休すである。
「よし！ わしが、のぼって、帆をたたむぞ！」
艦長勝麟太郎が、自ら為そうと決意した。
その時、船内からのそのそと出て来た一人の男が、するすると、猿のような身軽さで、檣へのぼって行った。

「それがしの従えた無足でござる」
こたえたのは、吉岡良太夫という、公用方の軍艦取調べの青年であった。
微禄な御家人あがりであったが、頭脳の切れることは、勝麟太郎の耳にまで、とどいていた。
天を裂くような唸りをあげて吹きつける烈風にさからって、帆をたたむことは、時化の経験者であればあるほど、人間業では不可能に思われた。
その無足は、しかし、その超人の業を悠々とやってのけた。

二

木村摂津守は、このあっぱれな手柄者を、吉岡良太夫とともに、奉行室に呼んだ。
無足は、まだ二十歳あまりの、なんの特徴もない、至極土くさい顔つきの若者であった。
「これは、君平と申す、それがしと同郷の百姓でございます」
吉岡良太夫は、磐城国東白川郡中石井村の百姓の倅であった。十七歳で、青雲の志を抱いて、郷里を出奔し、流浪八年ののち、江戸へ出て、駿河台に住む鷹匠の家に寄食しているうちに、縁あって、江戸城裏御台所人の吉岡家へ婿養子に入ったのであった。代官江川太郎左衛門の配下になったのが、立身のいとぐちになり、いまは幕府海軍には、なくてならぬ人物であった。
良太夫は、このたび、アメリカへ初渡航するにあたって、特に乞うて、この君平という無足を、ともなったのである。
まかない方の下働きをさせている、という。

「その方、国許では、木樵でもいたして居ったか？」
摂津守は、訊ねた。
君平は、平伏していた顔を擡げて、
「べつに、なにもいたして居りませぬ」
と、ひどい東北訛りで、こたえた。
摂津守は、君平のつやつやとした血色のいい顔を、不審げに眺めた。この十日あまりの時化で、摂津守も、勝麟太郎も、小栗上野介も、みなひどい船酔いして、顔面蒼白になっていた。
どうやら、この無足だけが、けろりとして、一向に、こたえていない様子であった。
「この大時化に、檣にのぼって、帆をたたむのは、常人にはできぬわざではないか。……その方、なにやら、兵法の心得があるように思われるが――」
「いえ、なにも、兵法など、修業したことは、ございませぬ」
「生来の身軽、と申すか」
「はあ……、まあ、少々ばかり……」
君平は、そうこたえて、平伏した。
小栗上野介は、摂津守のかたわらで、じっと、君平を見据えていたが、
「吉岡――。この下郎、わしに、くれぬか？」
と、云った。
「さしあげます」
良太夫は、即座に受諾した。

君平は、ひょいと、顔を擡げて、はじめて、小栗上野介を、視た。
そして、なぜか、にことした。
咸臨丸は、浦賀から桑港まで、三十七日間の日数を費した。その航海中、きれいに晴れわたった日は、わずか数日しかなかった、という。福沢諭吉は、「牢屋に入れられて、毎日毎夜、大地震に遭っているようなものであった」と記している。
ようやく、嵐は、おさまった。
しかし、別の不安が襲って来た。水が乏しくなったのである。
「布哇へ立寄って、給水を受けるか、それとも、桑港へ直航すべきか？」
いずれをとるか、運用方、蒸気方、公用方の意見がなかばずつに割れた。
艦長勝麟太郎は、あまりの船酔いで、臥牀してしまっていたし、摂津守も、迷った。
吉岡良太夫が、運用方、蒸気方の意見をとりまとめ、水を節約すれば、あえて布哇へ立寄らずとも、直航可能のようだ、と摂津守に、進言した。
布哇に立寄って、ひまどっているあいだに、使節をのせた米艦の方が、さきに桑港に到着してしまっては、護衛艦としての面目を失うことになる。
「よし！　直航いたそう」
摂津守は、決断を下した。
きびしい節水の布告が、出された。
ところが――。

二三日すると、水主が、さわぎ出した。便乗させたアメリカの水夫どもが、飲水で、勝手にからだを拭いたりして、粗末に使うので、注意したところ、その船頭が、三四人によってたかられて、なぐり倒されたためであった。
いずれも気の荒い海の男たちであった。ただでは、おさまらない形勢になって来た。
吉岡は、やむなく、通辞の中浜万次郎をともなって、キャプテン・ブルックを、その室におとずれて、
「不都合な部下を、取締って頂きたい」
と、申し入れた。
すると、ブルックは、大袈裟な身ぶりで、
「艦長命令に違反する者は、船の掟として、どんな処罰でも加えてよろしい。便乗者であっても、許すことはありません。どうか、遠慮なく、射殺して下さい」
と、こたえた。
そのきびしい言葉に、吉岡も感服して、
「たかが水のことゆえ、それほどの処罰にも及び申さぬが、一応の叱責をおねがいつかまつる」
と云った。
「ノウ、船の掟というものは、きわめてきびしいものです。陸の上では、ごくつまらない違反でも、船では、許されない。そうしなければ、航海というものはできぬのです。艦長命令は、軍司令官の厳命と同じです。……かまいませんから、発見次第、銃殺して下さい」
どうやら、キャプテン・ブルックは、そう云えば、日本の水主たちが、気をしずめるに相違ない、

と計算したに相違なかった。
はたして、騒いでいた水主たちも、吉岡から、つたえられると、納得した。

三

月がかわって、程なくであった。
夜半に、突如として、船内で、騒擾が起った。
アメリカの水夫が、まかない倉に忍び込んで、なにやら盗んでいるところを、日本の水主が、発見したのである。
叫びをきいて、馳せつけた数人が、その盗人を、とりおさえようとすると、あっという間に、はねとばされてしまった。
その水夫は、六尺二三寸もある巨漢であった。
「野郎、許せねえ！　ぶち殺してくれるぞ！」
日本側の水主は、殺気だつと、手に手に得物を、ひっ摑んで、アメリカの水夫を追った。
船上に遁れたアメリカの水夫は舳先の突端まで、後退して、両手をさしあげると、しきりに、大声で喚き散らした。
自分は何も持っていない、と弁明しているようであった。
殺到したものの、水主たちは、対手が素手なので、いささか拍子抜けがした。
だが、何か盗もうとして、まかない倉に忍び込んだだけかも知れなかった。あるいは、まちがって、

そこに入ったのかも知れないとも考えられた。
水主たちが逡巡するのを見てとった水夫は、ここぞと、せわしい大袈裟な身ぶりで、自分が無実であることを、しきりに説明した。
その折——。
君平が、甲板に姿をあらわして、しずかな足どりで、近づいて来ると、匕首をつかんでいる水主に、
「ちょっと、それを、貸して下され」
とたのんだ。
「どうするんじゃな」
「あのメリケンを、ちょっと、おどかしてやります」
「殺すと、ただではすまねえぜ」
「殺しは、しません」
君平は、水主から、匕首を受けると、二三歩、舳先へと近づいた。
追いつめられた水夫は、忽ち、凄じい形相になって、匕首を指さして、なにやら呶号した。
君平は、薄ら笑うと、ちょっと、両肩を下げるようにした。
次の瞬間——。
匕首は、君平の右手をはなれて、水夫めがけて、一直線に、とんだ。
「あっ！」
水主たちは、叫びをあげた。
匕首は、あやまたず、水夫の腹のまん中を貫いた。

ところが、水夫は、倒れもせずに、その場に、依然として突っ立っていた。
見まもる水主たちは、わけがわからなかった。
君平は、ゆっくりと、水夫に近づいた。
水夫の腹から、血汐ならぬ水が、噴いて出たのは、その時であった。君平が、匕首を腹から抜きとったからである。
水夫は、水を盗んで、大型の水筒に入れて、腹にかくしていたのである。

その出来事をきいてから、小栗上野介は、吉岡良太夫を呼び、
「君平は、かくして居るが、兵法に長けているの」
と、云った。
「当人は、全く習うたおぼえがない、と申して居ります。水呑み百姓の伜であることは、てまえが、いちばんよく知って居ります」
「しかし、匕首を投じて、腹にかくし持った水筒を貫くのは、なかなかの業前ではない」
「御意——」
「ひそかに、兵法を修業したとしか、考えられぬ」
吉岡も、たしかにその通りだ、と思ったが、君平が、口を割らぬ以上、たしかめようがなかった。
君平の気象を、吉岡は、よく知っていたのである。

四

咸臨丸は、二月二十六日、桑港に到着し、二十一発の祝砲を贈られた。
アメリカ合衆国では、日本使節歓迎のために、五万弗を用意していた。
軍艦奉行木村摂津守の「米利堅紀行」や、新見豊前守の「航海日記」など読むと、いかに盛んな歓迎を受けたか、よくわかる。
咸臨丸は、三使節をワシントンに送ったのち、三月十九日、桑港を抜錨した。
吉岡良太夫の従者であった君平は、小栗上野介の供をして、ワシントンにおもむいた。
三使節は、ワシントンに於て、いたれりつくせりの厚遇を受け、大統領ブカナンに会って、ぶじに条約を結んだ。
小栗上野介は、このきわめて短期日のワシントン滞在期間中に、異常な貪婪さで、合衆国の政治と経済の機構を学んだ。
帰国後、小判の為替相場を、一躍三倍にひきあげたのも、上野介がワシントンで学んだことの実践であった。
小者君平の身にも、その滞在期間に、小さな異変が起った。
ある日、君平は、一人で、裏通りをひろって、宿舎へ帰ろうとしていた。上野介が、あるシナ人の家へ招かれたので、それを送って行った帰途であった。
突然——。

君平は、数人の若者に包囲された。現代でいう愚連隊であったろう。小刀を一本帯びた東洋の矮小な黄色人間は、かれらがからかうには、おあつらえ向きだったに相違ない。
ワヤワヤガヤガヤと喋りたて乍ら、君平の髷をつまみあげたり、小袖をひっぱったり、はては、小刀を、抜き取ろうとした。
君平は、おとなしく、されるがままになっていたが、一人から、小刀を抜き取られようとした時、はじめて、その手を、かるく、はらった。
とたんに、若者は、その手の痛さに、悲鳴をあげた。
すると、他の若者たちが、忽ち、殺気立って、呶号をあびせかけて来た。
君平は、鄭重に、いくども、叩頭して、どうか通してくれるように、とたのんだが、解放してくれそうもなかった。
矢庭に、一人から、腰を蹴られた。
よろめくところを、正面から、頤へ、一発がんと、くわされた。
唇が切れて、みるみる鮮血が、したたった。
君平は、それを手の甲で、ぬぐってから、
「埒もないまねをしなさる」
と、呟いた。
アメリカの若者たちは、血汐のにおいをかいで、野性をよびさまされたように、口ぎたなく毒づきつつ、それぞれ、君平を蹴ったり、擲ったりしかかった。

ここに於て、君平の堪忍袋の緒も切れた。
君平の使ったのは、手刀であった。
その手刀は、目にもとまらぬ迅さで、充分に威力を発揮した。
君平の跳躍が止んだ時、五人の若者が、路上にのびていた。
数十人の見物人が、佇んでいたが、ただ唖然となって、見まもるばかりであった。
この出来事は、その晩のうちに、上野介の耳に入った。
宿舎に戻った上野介は、君平を呼んで、
「お前の振舞いを咎めはせぬ。しかし、国の使節の従者として、この責任を、とってもらわねばならぬぞ」
「はい」
「対手がたを、地に匐わせてくれよう、とほぞをかためた時、お前の覚悟は、できていたものと思われる」
「はい、できて居りました」
「では――、日本の武士として、はずかしからぬ最期をみせてくれ」
上野介としては、君平に、そう命ずるよりほかはなかった。
君平は、両手をつかえて、
「ひとつだけ、おねがいがございます」
「なにかな？」
「手前が切腹する場所を、手前自身にきめさせて頂きとう存じます」

「よもや、大統領の白堊館の門前で、とのぞむのではあるまいな？」
「いえ、そのようなおそれ多い場所ではございませぬ。手前が倒しました者どもの面前で、作法をつとめたく存じますれば、争いを起しましたあの場所を、えらびたく存じます」
上野介は、許した。

五

上野介は、万が一、不祥事が起って、自分が責任を負わねばならぬ時があるかも知れぬ、と思って、切腹用の白い衣服を用意していた。
その衣服を、上野介は、君平に与えた。
切腹は、わが日本の武辺が演ずる、世界に類例のない自害方法である。
その作法、典則は、きわめてきびしいものであった。
古来、武人は、死を、散る桜花のごとくでなければならぬ、と考えていた。これは、武人の頭脳が、単純素朴であった、と片づけることはできぬ。武人は、幼時から、死生の事に就いては、平常の心得として、教え込まれ、
「白刃ノ前ニ交ルニ、死ヲ視ルコト、生ノ如シ」
という荘子の言葉や、
「三軍スデニ陣成リ、士ハ死ヲ視ルコト帰スルガゴトシ」
という韓非子の言葉を、おのが血とし、肉としたのである。

したがって、切腹するとしても、すでにその前に、死に対しては、ある程度の解決をつけていた、といえる。
そして切腹を、武士道の吟味の中での精華とした。したがって、その場所をえらぶことに、きびしかった。
その場所は、武人が、最期の務めをはたそうとする、文字通り真剣の道場であったからである。
ふるくは、切腹の儀式は、寺院に於て行われた。
寛永三年、公儀に反抗した廉によって、旗本の一人が、切腹を仰せつけられたが、駒込吉祥寺本堂で、見事にかっさばいた。これが事例のはじめとなった。
徳川も中期に入ってからは、切腹の儀式は、通常、夜間がえらばれた。そして、その場所は、罪人としてお預けになった大名の邸宅、また庭園と、さだめられた。
身分のある者は、室内で、下級の者は、庭で——というのが、定例となった。
ところが——。
元禄十四年三月十四日、浅野内匠頭長矩は、愛宕下田村建顕の邸内で、切腹したが、場所は、庭の一隅がえらばれた。
このことは、識者の眉宇をひそませた。
切腹場は、誰が考案したのか不明であるが、いかにも、凄絶な儀式にふさわしいしつらえぶりであった。
広さは、六間四方、北側に修行門、南側に涅槃門を、設ける。白縁の畳を、丁字形に据え、その上を、幅四尺の白布で掩う。

畳の前面に、八尺幅六尺の門を設ける。その形は、山門のごとく、青竹でつくって、白布をまきつける。
場内のまわりは、幅四尺の白無地の幔幕をめぐらし、四隅に、「倶会一処」などと記した長さ六尺の弔旗が、立てられる。
夜間ゆえ、畳の両側には、一対の燈火が、高さ四尺の丸竹を台にして、点じられる。
切腹者は、修行門から入って、白布で掩われた畳の上に正座する。介錯人は、涅槃門から入って、横の畳へ着座する。
畳のうしろには、白帳の屏風半双が置かれ、その蔭に、用意された棺、首桶、手桶などが、目につかぬように、置かれてあった。
場外には、高張提灯が、高くかかげられ、邸内は、一刻前から、鳴りをしずめて、物音ひとつたてぬ。
さて——。
切腹の作法には、ふたつあった。真一文字と十文字であった。
真一文字にかき切るには、左手で、左脇腹をおさえて、つよく腹の皮をひっぱっておいて、切先を五分ばかりの深さに突き立てて、ぎりぎりと右へ引きまわす。しかし、勇気にまかせて、ふかくかき切って、腸まで出すのは、無念腹といって、心得ある武士は、かたく戒めとした。
十文字の切腹は、文字通り、腹を十文字にかき切ることである。
しかし、切腹には、必ず、介錯人がいたので、真一文字に切った上に、さらに、胸の下鳩尾に、逆手持ちの白刃を突き刺して、臍まで切り下げるなどということは、する必要はなくなっていた。

介錯人のいない場合は、まれには、十文字に切って、相果てる武士も出たが、幕末のこの頃では、もうそんな凄絶な死に様をする者はいなくなっていた。
君平は、上野介から切腹を命じられた時、心中で、
——十文字腹で、相果てることにいたそう。
と、覚悟をきめたのであった。
介錯人がいないのであった。自分の力で、自分の生命を絶たねばならなかった。
のみならず、異邦の首都のどまん中で、やってのける作法であった。凄絶であればあるほど、武士道の吟味に叶うといえた。

六

その日、君平は、純白の死衣をまとって、若者たちを匐わせた通りにおもむくと、路面に白布を敷いて、正座した。
たちまち、見物人が蝟集した。
君平は、上野介から与えられた、脇差を前に置いて、まず、十方仏土のある西方に向って、合掌した。
それがおわってから、しずかに、蝟集した見物人の顔を、見まわした。
手刀で倒した若者の一人を、見出すと、君平は、じっと、視線を当てた。
若者は、奇妙な表情になって、肩をすくめた。

君平としては、言葉が通じるものなら、
「お主らのために、切腹いたすことは、まことに無念のきわみに存ずる」
と、云いたいところであった。
二人ばかり、歩み寄って来て、なにか訊ねかけて来た。君平は、こたえようのないままに、かぶりを振っておいて、脇差を把りあげた。
すでに、昨日の出来事は、この周辺に噂になってひろまっているに相違なかった。人々は、君平が、脇差を抜きはなつと、騒然となった。
一人の中年男が、なにか叫びたてて、例の若者の一人を、突き出し、その場へ、坐らせた。
若者は、しぶしぶ、胸で十字を切ってみせた。
君平は、それに目もくれず、懐中からとり出した紙を、白刃へきりきりと巻きつけた。
そこへ、警官が馳せつけて来た。
警官は、君平に近づいて来て、なにか云いかけ、意味が解されぬと知るや、連行すべく、拳銃をつきつけて、
「立て！」
と、手まねで命じた。
君平は、かまわず、白衣の前を、左右に押しひろげた。
ようやく、人々は、君平が何をしようとしているのか、判断して、口々に叫びたてた。警官は、躍起になって、中止させようと、拳銃を突きつけ乍ら、呶鳴った。
君平は、一切無反応のまま、右手に脇差をつかみ、左手を、左脇腹へ押しあてた。

それから、おもむろに、切先を、あらわにした腹部へ擬した。
女性の鋭い悲鳴が、起った。

この切腹は、さいわいに、中止された。
一人の陸軍士官が、背後からとびつき、それに呼応して、前から、警官がとびついたのであった。
上野介は、君平が、連れ戻されると、笑い乍ら、
「君平、目的は果したの」
と、云った。
君平が、けげんな面持で見かえすと、上野介は、
「メリケンたちが、お前を、みすみす、切腹させることはあるまい、と思って居ったが、その通りであったな」
と、云った。
ハラキリ、という言葉を、アメリカ人たちにおぼえさせたのは、君平の功績であった。
三使節が、ワシントンに滞在したのは、四月、五月、六月、七月の四箇月間であったが、そのあいだに、アメリカ人に最も有名になったのは、君平という小者の方であった。
君平が、上野介のお供をして、おもてへ出ると、まず、子供たちが喚声をあげて、君平のまわりへ寄って来て、
「ハラキリ！ ハラキリ！」
と、連呼したものであった。

上野介が、君平に切腹させようとしたことは、成功であった。
日本人というものを、合衆国の庶民に、最も明白に、端的に識らしめるために、上野介は、君平と愚連隊どもとの争いを利用したのであった。
アメリカ人の考えでは、喧嘩をふっかけられた者が、自衛の腕前をふるって、勝ったことは、なんの咎めるにはあたらないことであった。
しかし、日本人は、自分にも罪があるとみとめ、その場合は、いさぎよく、切腹して、謝罪する民族である。
切腹という異常手段をえらんで、おのが誇りを保つ。これが、日本人というものである。
上野介は、それを、アメリカの庶民に知らせた次第であった。
合衆国大統領はじめ、政府高官連も、ハラキリという行為に対して、ひそかなおそれをおぼえたことは事実であった。
徳川幕府の使節が、ワシントンへ出かけた意義は、条約調印よりも、ハラキリを知らしめたことであったかも知れない。

七

万延元年九月二十八日、遣米使節は、ぶじに、祖国へ帰りついた。
しかし、帰りついてみると、時勢は、急変していた。
日本を開国しようとした大老井伊直弼が、桜田門外で、水戸浪士佐野竹之助ら十八人に要撃されて

斬殺されていたからである。
　正使新見豊前守正興も、副使村垣淡路守範正も、一変した江戸城内の空気に、おそれをおぼえて、かたく口をつぐんでしまい、アメリカという強大な文明国の現状を述べようとはしなかった。
　桜田門外の異変を契機として、一挙に、日本中に攘夷熱がたかまっていたからである。
　朝廷に於ては、これまで頑として、皇女和宮の降嫁を奏請する幕閣に対して、拒否しつづけて来ていたが、
「もし、夷をしりぞけて、日本の沿岸から、その軍艦商船を追いはらうならば、和宮降嫁を許すであろう」
　と、条件をつけたくらいであった。
　これは、天皇ご自身の意志であり、関白九条尚忠に、直接に、そう云われた、という。
　それくらい、攘夷熱は、上は天皇から下は江戸のやくざにいたるまで、熾んであったのである。
　アメリカから帰って来た使節たちが、へたに、その文明を口にすれば、忽ち、攘夷浪士らに襲撃されて、大老の二の舞いをふみそうな気配であった。
　一人、小栗上野介だけは、口をつぐまなかった。
　泰西文明がいかに進歩し、我国が数百年もおくれている実情を、上野介は、芙蓉の間で、堂々と説いた。
　ひとつひとつ、実例を挙げてみせる上野介を、反駁する者はいなかった。しかし、賛成する者もいなかった。
　結果——。

　上野介に与えられたのは、新見正興に代る外国奉行職であった。
　狂的な攘夷熱のさなかに、外国奉行という職をつとめることは、明日の生命は亡いものと覚悟しなければならなかった。したがって、その職に就こうとする者はいなかった。
げんに——。
　箱館奉行兼外国奉行堀利煕は、苦悩の挙句、自殺していた。
　上野介は、しかし、よろこんで、外国奉行職を襲った。

八

　小栗上野介は、三河譜代の旗本で、二千五百石の大身であった。名は、忠順、通称又一。
　又一は、小栗家代々の当主の通り名であった。始祖は、徳川家康に仕えて、幾多の戦場で、一番槍の功名を樹てた。
　家康は、小栗の一番槍の報告をきいて、
「また一か」
と、云った。それで、又一が通称になったという。
　上野介は、幼少から、頭脳がきれた。
　成年になっても、酒も飲まず、声色も近づけず、精励恪勤したが、それでいて、奉公第一とする他の旗本たちとちがって、思慮が幅広く、融通性に富んでいて、若くして清濁あわせ呑む器量を示した。
　芙蓉の間詰の有司の中では、抜群であった。

さて――。
万延が文久に移ると、時勢は、さらにあわただしくなった。
露国の軍艦一隻は、対馬に現われて、艦長ビリレフは、軍艦修理を名目にして、ひそかに対馬占拠を企てた。露兵数人が、島の若い人妻と娘を強姦したため、島民が、これに反抗し、双方銃殺騒動が起った。
そこで、幕府は、事態収拾のため、外国奉行小栗上野介を、対馬に派遣した。
上野介は、目付溝口八十五郎ら数人をつれて、対馬へおもむいた。その供の中に、君平も加えられていた。
上野介は、対馬に到着すると、露艦へ、乗り込んで行き、艦長ビリレフに面会を申し入れた。その時、連れたのは、通辞の外、君平ただ一人であった。
上野介は、穏やかに、退去を要請した。
ビリレフは、軍艦修理が、思いのほか長びく、という口実をかえようとしなかった。
ビリレフというこのロシヤ海軍の猛者は、対馬を本拠にして、朝鮮を攻め取るという野心を抱いていた。
朝鮮をわがものとすれば、清国と天津で戦って、北京を陥れた英仏両国に対して、睨みをきかせることができるし、やがては、日本も制圧できる、という考えであった。
上野介は、いったん、談判をうちきって、座談に移るや、しきりに朝鮮に就いて話題をもち出すビリレフを見まもっているうちに、その野望を看破した。
上野介は、なにげない口調で、

「貴下は、東洋人の精神の中に、つよく根を張っている、一騎して千兵に当る誇りをご存じであろうか」
と、云った。
ビリレフは、笑って、こたえた。
「それは、十五世紀頃までの騎士道精神というやつで、いまは、そんな精神では、戦争は出来ない」
「いや、私は、日本人が、今日でも、百姓や職人にいたるまで、これを持っていると申し上げている」
「すると、そこに立っている貴下の下僕も持っている、と云われるか？」
ビリレフは、君平を、頤で示した。
上野介は、微笑した。ビリレフのこの言葉を待っていたのである。いわば、これは、巧妙な誘いであった。
「勿論、この下僕は、貴艦の乗組員のうちの、最も逞しい勇士らが幾人、とびかかって参っても、屈服いたさぬ」
「面白い。試してみよう」
ビリレフは、上野介の誘いに乗った。
上野介は、君平をふりかえると、
「君平、オロシヤ水夫を、幾人か、たたきのめすがよい。ワシントンのあれは私闘であったが、こんどは、日本男児の面目にかけて、やることだ。遠慮は無用――」
と、命じた。
君平は、ちょっと、当惑の表情になったが、

「幾人かを対手にいたしますと、不具をつくることになると存じますが――」
と、云った。
「かまわぬ。……ただ、殺してはならぬ」
試合は、上甲板で行なわれた。
まず、ビリレフは、水兵の中から、平素手に負えぬ乱暴者で通っている男をえらんで、君平と素手で闘わせた。
その水兵は、六尺二三寸もある巨漢で、これに比べると、君平は、まるで小児であった。
水兵は、こんな矮小の下僕と闘うことに、いかにも不服げに、鼻を鳴らすと、一撃でふっとばすべく、ずかずかと、迫った。
文字通りの鉄拳が、君平の頭蓋めがけて、唸って来た。
君平は、ひょいと身を沈めて、うしろへさがった。
水兵は、けげんそうに、君平を見なおした。君平は、にやっとしてみせた。
次の瞬間、水兵は、吼号して、躍りかかった。
君平は、敏捷な身ごなしで、後退をつづけて、ついに、舷側へ追いつめられた。
水兵が、窮鼠を追いつめた猫のように、ゆっくりと、肉薄するや、君平は、ひょいと、舷上へ、跳び上った。
うしろは、玄海灘の荒海が、牙のような白い波を逆立てていた。
水兵は、わざと、その海原で溺れ死ぬ身振りをしてみせて、おいでおいでをした。

と――その一瞬。
君平の小軀が、舷上から、宙へ躍った。
水兵は、胸を蹴られて、棒のごとく倒れた。そして、再び起たなかった。肋骨が数本折れたのである。
ビリレフは、君平の鮮やかな勝ちぶりを眺めてから、上野介に、
「あの下僕の一命を保証できぬが、よろしいか？」
と、念を押した。
「おことわりになるまでもない」
上野介は、こたえた。
ビリレフは、三人の士官に、剣を携えて来るように命じておいて、上野介に、
「下僕に、貴下の刀を貸してやるがよろしい」
と、すすめた。
上野介は、大刀ではなく、脇差の方を、君平に与えた。
君平は、それを、峰を下にして左手で握った。
血気の露国士官たちは、三方から、君平を包囲する陣形をとった。
もとより、士官の栄誉にかけて、一時に三方から攻撃するつもりはなく、正面の者が襲って、他の二人は、その動きを封じる威嚇の役割をつとめる手筈であった。
正面の士官が、突きの構えをとって、するすると進んで来るのを、君平は、動かずに、待った。
片手振りの脇差は、ダラリと下げたなりであった。

士官は、鴉の疳高いひと啼きにも似た懸声もろとも、突きかけて来た。
君平の脇差が、目にもとまらぬ迅さで、この突きに応えた。
細身の剣は、中ほどからま二つに折れて、士官の手をはなれると、甲板の上へころがった。
とみた次の刹那には、君平の小軀は、旋風のごとき動きを示した。
威嚇の立場にあった二人の士官は、あわてて防禦の業をとろうとしたが、そのいとまを与えられず、それぞれ、あっけなく、剣を折られ、手がしびれて、それをとりおとしてしまった。
ビリレフはじめ、居並ぶ士官、水兵らの顔面の色が変った。
上野介は、声を高くして、一同に向って、云った。
「わが日本には、この程度の腕前を持つ者は、すくなくとも、五十万は、いるとお思い頂きたい」

九

維新史では、対馬の露艦を退去せしめたのは、英国公使オールコックと同艦隊司令官ホープの尽力による、ということになっている。
事実は、露艦を退去させたのは、小栗上野介とその下僕君平であった。
文久二年を迎えるや、さらに、天下の形勢は、急速な動きをみせた。
正月十五日には、水戸浪士平山兵介ら六人が、老中安藤信正を、坂下門外で襲撃して、これを手負わせて、闘死した。
薩摩、長州は、手を結ぼうとしていた。

将軍家茂は、皇女和宮と婚儀を挙行した。
島津久光は、春を迎えるや、薩摩を発して、上洛して来た。
これを機会として、薩摩藩士有馬新七、久留米の真木和泉ら、諸藩の志士七十余人は、関白九条尚忠、所司代酒井忠義を襲撃、誅戮する計画を抱いて、伏見の寺田屋に会した。それをききつけた島津久光は、家臣奈良原喜八郎ら八人を遣して、訓諭せしめようとした。しかし、有馬新七らは、肯き入れなかった。やむなく、奈良原喜八郎らは、有馬新七はじめ、田中謙助、柴山愛次郎、橋口伝蔵、橋口壮介、弟子丸竜助、西田真五郎、森山新吾左衛門らを斬った。
世に謂う「寺田屋騒動」である。
島津久光の上洛とともに、長州・土佐の藩士らの往来も繁くなり、おのずから連合のかたちをとって、さらに、尊皇攘夷派の勢力は強くなった。
久光は、江戸へ出ると、閣老らと会って、時勢を説き、勅諚遵奉を勧告した。
その帰途、武蔵生麦村にさしかかった時、従者の一人が、英国人一人を斬り、二人を手負わせる事件をひき起した。
九月に入ると、ついに、薩、長、土三藩が、連合した。三藩の重臣らは、薩摩藩邸に会して、攘夷実行の建議を決した。
攘夷督促の勅使は、京を発して、江戸へ向って来た。
しかし――。
諸外国とむすんだ条約を、すべて破棄せよ、という勅諚は、あまりに時世を知らなさすぎる無謀もきわまる命令であった。

江戸城評定所では、勅使下向の急報によって、三昼夜、ぶっ通しで、評定がつづけられた。
幕権擁護と開国策のために、論戦をつとめたのは、当然のこと乍ら、芙蓉の間の旗本たちであった。
芙蓉の間は、大目付、町奉行、勘定奉行ら各奉行などの、幕府の中核をなす役人の詰所であった。
この牛耳をとっていたのが、小栗上野介であった。
上野介は、将軍後見の一橋慶喜、政事総裁松平慶永（春嶽）、会津藩主松平容保ら、老中、若年寄ら幕閣の要職が居並んだ閣議の席上で、堂々と、論陣を張った。
「政権を、幕府に委任せられるのは、鎌倉以来の定制であり、戦国の時代は措くとして、幕府が政権を持ったればこそ、三百年の和平を保つことができ申した。成程、天朝の尊さは、申すまでもないこと乍ら、信を海外に失い、国を孤立の危険に置くことが、畏き叡慮とは存じ申さぬ。この頃にいたって、種々京都より御干渉あるは、中間に策するものがあり、諸大名中、なにかと容喙する者が多く、そのために、既定の政務まで、変更されようとするなど、まことに、以ての外の失態と申して、はばかり申さぬ。この際、断乎として、幕府の権威を相立てずば、ついには、諸大名の頤使に、あまんじることにも、なり申そう」
この論旨に賛成する芙蓉の間の面々は、衣服の下に、白い死衣をまとうていた。
閣老たちは、圧倒された。
老中板倉周防守勝静、大目付岡部駿河守長常らは、この開国強行論を支持した。
ただ、松平春嶽、松平容保らは、勅命にさからうことを、ためらった。

十

小栗上野介は、江戸城評定所に於て、熱弁をふるった翌朝——陽がさしそめた時刻に、庭へ出ていた。
遠くから、薪を割る音が、一定の間を置いて、ひびいて来たのに、さそわれたのである。
母屋と離れのあいだを抜けて、裏庭へ出た上野介は、そこで、薪を割っている君平の姿を見出した。
君平は、割り台の上へ、一尺あまりに切った丸木を縦に立てて、割っていたが、ただ割るのではなく、斧を、宙に抛りあげ、それを受けとめた刹那、すぱっと割っていた。
のみならず——。
君平は、頭上はるかに高く、斧を投げ乍ら、それを仰ごうともせず、視線を、丸木へ据えておいて、落下して来たそれを、受けとめるやいなや、割っているのであった。
斧は、柄を下にして、垂直に落下して来た。
君平は、その柄を掴むと同時に、丸木へ振りおろしていた。
見事な業というよりほかはなかった。
上野介は、しばらく、眺めていてから、そばへ寄った。
君平は、作業の手を停めて、上野介に、挨拶した。
「君平、昨夜は、何人を斬った？」
上野介は、訊ねた。

昨夜、上野介が、下城して来たのは、夜も三更をまわった時刻であった。
自邸の門前まで帰って来た時、闇の中から、
「神州をけがす逆賊、天誅っ！」
その叫びとともに、幾人かの刺客が殺到して来た。
上野介は、駕籠を地面へおろさせたばかりで、出ようとはしなかった。
刺客の前に立ちはだかったのは、君平一人であった。
かねて、上野介は、供の者たちに、曲者の襲撃があった場合、君平一人にまかせて、鉄砲とか矢とか、飛道具にだけ、お前たちは備えるがよい、と命じておいたのである。
上野介は、駕籠の中で、目蓋を閉じて、短い鋭い懸声と、人間の肉と骨が截たれる音をきいた。
斬りあいは、すぐに止み、やがて、駕籠は、何事もなかったように、門を入ったのであった。
「四人でございました」
君平は、こたえた。
「手練者であったか？」
「闘志ばかりが先立って、そのために、平常の心得を忘れた御仁たちと見受けました」
上野介は、君平が、その四人を、一太刀ずつで斬り伏せたのを、耳にしている。
「お前を、吉岡良太夫からもらいうけたおかげで、わしの寿命は、のびて居る」
「……」
「お前の方は、どうだ？　わしに仕えて、悔いては居らぬか？」
「……」

「正直にこたえてくれてよいぞ」
君平は、顔を擡げて、上野介を仰いだ。
「わたくしの祖父も、父も、狂人になって、相果てて居ります。叔父も、二十年、納屋の屋根裏の格子の中ですごしました」
「ふむ――」
「わたくしも、いずれは、気が狂うのではあるまいか、とおそれて居りまする。いえ、屹度、狂うに相違ございませぬ」
「そうとは限るまい」
「いえ、もう、その徴候がみえて居ります。……それを考えますと、おそろしゅうございます」
「どのような徴候だな？」
「はい。……たとえば、お供をして道を歩いて居りますと、通行の人々が、なにやら、目に見えぬ糸であやつられている人形のような気がして来るのでございます。どなたも、自分の意志で歩いておいでに相違ないにも拘らず、何者かにあやつられて、自身気がつかずに、動いているような――そう見えて参るのでございます。そして、てまえ自身も、その人形のような……」
そこまで云いかけて、君平は、顔を伏せた。
上野介は、笑って、
「この上州もまた、そうだ、とお前は、云いたいのであろう」
「は、はい。……いえ――」
「ははは……、その通りだ。わしも、木偶の一人だ。それに相違ない」

「申しわけございませぬ」
「皮肉を申して居るのではない。如意棒をふりまわす猿も、所詮は、釈迦如来の掌の上でとびまわっているにすぎぬ、ということだ」
そう云い乍ら、上野介は、君平の神技の秘密をのぞいたように思った。

十一

翌日から、再び、上野介の精励恪勤が、はじまった。
攘夷実行の勅諚を持って下向して来たのは、三条実美であった。
一橋慶喜は、閣議に於ては、いったんは攘夷論をしりぞけて、開国意見を採ろうとしたが、勅使を迎えるや、開国奏上論を一変して、攘夷奉勅に傾く閣老たちを、抑えきれなかった。そのために、慶喜は、辞表を提出した。
しかし――。
心にもない攘夷論に賛成することに堪えられなくなった慶喜は、病気と称して、登城しなくなった。
小栗上野介は、慶喜のまねをすることはできなかった。
外国奉行、町奉行、陸海軍奉行、勘定奉行と、目まぐるしく諸職を移り乍ら、外交に、軍事に、財政に、三面六臂の腕をふるい乍ら、上野介は、疲れることを知らなかった。
と同時に、上野介は、この緊急の事態に対処するために、妥協の態度をすてた。
たとえ上司の忌憚を受けようとも、おのが主張を枉げることをしなくなった。閣老参政といえども、

痛烈骨を刺す舌鋒を、おさめようとはしなかった。
人材の乏しい幕末であった。
上野介ほどの器量ならば、当然、枢要の職にも就けるものを、妥協の態度をすてたために、つぎつぎと後進に追い抜かれて行った。
勘定奉行になり、多くの功績をみせ乍ら、上司同僚から幾多の怨みを買って、職を貶されて、陸軍奉行並にされ乍らも、その地位に就くや、即座に、陸軍伝習所とともに、仏語伝習所を設けて、陸軍強化をはかる、というあんばいであった。
しかし、いかに、閣老たちは、上野介を憎んでも、その才腕をみとめざるを得なかった。
上野介を、勘定奉行の職から追うと、たちまちにして、幕府の財政は、難破してしまった。
徳川幕府の知行は、天領八百万石、と称されていたが、実際は四百万石にすぎなかった。
歳入およそ米五十万石、金子三百余万両であった。
泰平の治世にあっても、これだけの収入で、台所がまかなえる筈がなかった。
まして、うちつづく内外多事の変動期であった。ふくれあがる年予算のほかに、巨額の臨時費が、のしかかって来るのである。
たとえば――。
文久三年以来、将軍家茂の二度にわたる上洛で、ついやされた総経費は、大判五百七十三枚、小判百七万六千二百両、銀一万三千五百両の莫大な額にのぼっていた。
慶応元年、長州征伐には、軍費予算は、三百十五万七千余両と計上された。
ない袖はふれぬ、ではすまされないことだった。

貨幣を改鋳してみても、富豪に御用金を命じても、それは、一時の弥縫策であった。
小栗上野介以外に、この難関をきり抜ける手腕の所有者は、他にはなかった。
上野介は、陸軍奉行並から、ふたたび、勘定奉行に復した。
その年、上野介にのしかかって来たのは、途方もない臨時費であった。
若年寄酒井飛騨守と外国奉行竹本淡路守によって、英仏米蘭四国公使とのあいだに結ばれた下関償金条約であった。
その償金は、三百万両を、六箇年年賦で、返すという苛酷なものであった。
文久三年五月、久坂玄瑞が、米国商船ベムブローグ号を下関で砲撃したことから端を発し、長門藩は、あるいは、仏国商船キャンチャン号を豊浦沖で砲撃し、あるいはまた、和蘭船メジュサ号を下関で砲撃し、さらにまた、薩摩藩は、生麦事件の償金を要求して来た英艦と戦うなど、日本の武士の面目を大いに発揮したのはいいが、やがて元治元年、英仏米蘭連合艦隊が、下関へ押し寄せて、砲撃して来て、馬関戦争となった挙句、そのしりぬぐいを、幕府がせざるを得なくなったのである。
まことに、ばかげたしりぬぐいであった。

十二

「たわけが！」
上野介は、長州や薩摩の藩士らが、外国商船を撃ったり、外国人を斬ったりする報をきくたびに、吐きすてた。

——攘夷！ なんという、ばかげた憎悪であろう。
国を開き、泰西文明をとり入れることが、どうして、いけないのか。
外国を憎悪することのおろかさが、上野介には、いまいましく、じれったく、やりきれなかった。
腹立たしいだけでは、すまされず、そのしりぬぐいをさせられることの激怒もあった。
外国商船を砲撃する、ということは、悪童が意味もなく、隣家へ石を投ずるのに似ていた。
隣家は、富有で、腕力のある青年がいた。
青年は、悪童の家へ乗り込んで来て、損害をつぐなえ、とおどしかけて来る。
悪童の家では、老いぼれた親と、貧窮があるばかりであった。青年は、それを容赦せずに、毒吐くのである。
おそろしさに、老いぼれた親は、弁償を約束する。そして、その工面を、この上野介に、たのむのだ。
「たわけが！」
上野介としては、この罵詈に、あらゆる意味をこめざるを得なかった。
上野介にできるのは、償金延期の談判だけであった。
おめおめと、三百万両を支払う、と約束した若年寄や外国奉行の無能ぶりにも、上野介は、腹を立てながら、勘定奉行として、必死の努力をせざるを得なかった。
上野介が、調べてみると——。
馬関戦争に加わった連合艦隊は、英艦九隻、仏艦三隻、和蘭艦四隻、そして米艦一隻であった。そのうち、米国側は、在泊の軍艦がなかったので、そこに居あわせた商船をやとって、二門ばかりの大

砲をかつぎ込んで、加わったのである。
まことに、人を小ばかにした襲撃であった。
にも拘らず、長州勢は、もろくも、諸砲台を破壊され、奪われたのである。
上野介は、この償金延期の談判役を、外国奉行となった栗本安芸守に、たのんだ。
栗本安芸守は、もとは喜多村瀬兵衛といい、幕府の奥医師栗本氏を嗣いで、はじめはその道を進んだ。
やがて、洋学に熱心なあまり、お匙（将軍家医師）の岡櫟川院の弾劾を受けて、蝦夷地へ追われ、箱館に在ること六年、そのあいだに、異例をもって、医籍から士籍に列せられたのであった。
その才腕がみとめられたのである。鋤雲と号した。
栗本鋤雲は、箱館に在る六年間を無駄にしなかったのである。仏国人と親しくなり、仏蘭西語と英語を自由にしゃべるように、身につけたのであった。
外国語を、通訳なしで、しゃべれることは、当時に於ては、稀有の存在であった。
上野介と栗本安芸守は、ウマが合った。
二人が急速に親しくなったのは、上野介が、幕府の汽船翔鶴丸の修理をするために、仏国公使にたのんで、横浜在泊中の仏蘭西軍艦から技術職工を借りる計画をたて、その交渉方を、安芸守に依頼したことから、はじまる。
この翔鶴丸修理をきっかけとして、上野介は、横須賀に、ドックをつくる計画をたて、ついに実現したのであった。
これの計画の協力者として、仏蘭西公使ロッシュから、海軍提督ジョーライスに推薦してもらって、

蒸汽学士ウエルニーを、上海から呼び寄せた。
ウエルニーが、えらんだ土地が横須賀であった。横須賀は、仏蘭西のツーロン軍港に似ていたからであった。
上野介の計画は、大小ドック二箇所、製鉄所一箇所、造船所三箇所、他に武器弾薬所をあわせて、総経費二百四十万ドル、四年計画で、一年の支出額六十万ドルという大きなものであった。
財政窮乏の折柄、幕閣が、これを容易にみとめる道理もなかったが、上野介は、老中水野和泉守を必死に説いて、ついに実現させたのであった。
水野和泉守は、天保改革を為した越前守忠邦の子で、人間が出来た名相であった。
横須賀は、上野介のおかげで、一大軍港となったのである。
さて——。
上野介の嘆願を受けた栗本安芸守は、即日横浜におもむいて、まず、アメリカの代理公使に会うと、下関償金延期の談判を開始したのであった。
アメリカは、他三国につきあって連合に加わったにすぎないので、安芸守の願いを、こころよく承知した。
安芸守は、次に、最も強硬派のイギリスに対して、交渉した。イギリスは容易に承知しそうもなかったが、アメリカ公使の口添えで、ようやく納得した。そうなると、仏蘭西も和蘭も異議はなかった。
上野介と安芸守のコンビは、こうして、一時、幕府の困窮をすくった。
しかし、いったん傾いた大廈は、もはや、旧に復せしめることは不可能であった。
上野介の運命は、その大廈をささえようとすることによって、悲壮味をおびたのである。

十三

ついに――。

慶応三年十月十四日、十五代将軍徳川慶喜は、参内して、政権奉還の儀を、奏上した。

この報が江戸城へもたらされると、鼎の沸くごとき騒ぎになった。

老中以下諸有司が、総登城して、評定がひらかれて、甲論乙駁、はてしがなかった。

小栗上野介は、芙蓉の間詰を代表して、このような意見を述べた。

「この期に及んで、未練がましい言葉を述べるのは如何かと思われますが、われら徳川の家臣たる者が、社稷を一日存続せしめることは、一日の忠義を為すことを意味すると申さねばなりませぬ。……このたび、政権を奉還あそばされたのは、上様のご英断とは存じますが、そもそも、権現様がご威勢を以って、天下を定め給うてより、外様譜代のわかちなく、旗本下役にいたるまで、ご当家の御家人として、君臣の義を守って来たものでありまする。この三百年に及ぶ武士たるものの性根が、一朝一夕にして、ふりすてられるものでありましょうか。……近年に至って、草莽不逞の徒輩が、兎角の論をふりかざして、禍を国の内外に及ぼして、ついに、今日の形勢をまねきましたが、しかし、幕臣たる者は、この秋に於てこそ、君臣の大義を明らかにし、忘恩の王臣たらんよりは、全義の陪臣にあまんじて、時運の挽回をはかるべきかと存じられます。されば、われら一同の執るべき道は、第一に、旗本の兵を進めて、すみやかに、京都にはせ上り、首鼠両端のやからを掃い、闕下をきよめるとともに、薩長土勢の根拠をくつがえすこと。第二は、上様に訴えて、関東鎮撫の名の下に、すみやかに、

当城へご帰還あそばすこと。このことに存じます」

江戸城に拠って、関東の要所をかため、東北の親藩譜代の力を合せて、攻め寄せる薩長土の軍勢を、微塵に蹴散らしてくれる。

上野介の決意は、それであった。

評定は、この意見に賛成し、東北諸藩の意嚮も、佐幕に傾いた。

あとは、勇気と断行の問題であった。

しかし――。

翌年――明治元年正月三日、鳥羽伏見の一戦により、幕軍が賊名を負い、将軍慶喜が、朝敵の汚名を蒙って、官位を剝奪されるや、江戸城内の空気は、一変してしまった。

次いで、正月十二日、軍艦開陽で大阪を発して、江戸へ帰って来た慶喜が、西丸に入って、恭順謹慎するや、要路の面々はさておいて、若い旗本たちは、のこらず、悲憤した。

「毛利大膳父子ですら、朝敵となり乍ら、やがて、官位封土を復せられたではないか。将軍家たるわが主君にかぎって、政権奉還という未曾有の忠誠を示されたにも拘らず、降官削封を命じられるとは、何事であるか！」

檄文は、江戸内外へ、ばらまかれ、町の辻々には、薩長土を罵る文書が、貼り出された。

上野介は、勘定奉行・陸軍奉行並として、断乎として、薩長土と戦うほぞをかため、海軍副総裁榎本和泉守、歩兵奉行大鳥圭介らとともに、その作戦図まで、作製していた。

慶喜が帰還した三日後には、登城して、慶喜の面前で、熱弁をふるっている。

「上様が、朝廷に対し奉り、二心をお持ちあそばさぬことは、天下万民衆知するところにございます。

しかるに、朝廷におかせられては、朝敵慶喜征討の師を布れられ、その軍の中に、上様のご兄弟である因州（池田慶徳）備州（池田茂政）のご両家を加えられたるのみか、譜代筆頭たる井伊掃部頭殿はじめ、譜代の諸侯を加えられるとは、まさしく、名分の廃滅と申してはばかりませぬ。……斯様な事態をまねき、名分なきご沙汰を蒙りましたのも、思えば、今上帝がいまだ若年にましまして、奸佞の公卿らが、権勢と我欲をほしいままにせんと、野望をたくましゅうして、詔を矯めているものと存じられます。……この上野介は、不肖乍ら、先祖の又一以来の累代のご厚恩を忘れぬ身ゆえ、ご馬前にて討死することこそ本懐に存じます。三河譜代の旗本ら一同、同じ覚悟にございます。薩長土らが、いかに躍起になろうとも、われらが関東を守備つかまつる限り、断じて、箱根を越えさせるものではありませぬ。何卒義兵の儀、ご決意のほどを願い上げまする」

十四

慶喜は、上野介が述べるがままに、まかしていたが、

「上野、ひかえい！」

と、云った。

ひくいが、凜乎たる声音であった。

「鳥羽伏見のことは、もとより、予の志ではない。供先の争闘にすぎぬ。しかし、そのために朝敵の汚名を蒙ったのは、予の不徳のいたすところだ。これをうらみとして、朝廷に反抗する存念など毛頭みじんも持たぬ。錦旗の前には、ひたすら恭順の態度をもってのぞむばかりである」

「上様。奸佞の臣が、朝廷に横行する時は、これを除くのが、日本臣民としての道ではございますまいか。上様ご自身、おん身におぼえなき罪をきせられて、そのまま、こうしてご城内に謹慎あそばされるに於ては、その無実の罪をおみとめあそばされたことになります。これは、徳川将軍家として、後世までの恥辱と相成りましょう」

「上野、その方は、すでに、征討軍を迎え撃つ陣容をととのえたか？」

「はい。陸軍総勢は、箱根、笛吹へ出陣の用意をととのえおわって居ります。また、海軍は、全艦隊を以って、大坂へおもむき、西国、中国を制圧する手筈をととのえて居ります。さらに、この千代田のお城は、東北十三藩の兵が、お守りつかまつります」

「その軍略は、すべて放棄せよ」

「上様！　敵は、朝廷ではなく、薩長土の外様大名どもでありまする」

「その薩長土は、勅命を奉じて居る」

「それは天子のまことのお心より出たものではありませぬ」

「上野、それは、不敬の暴言であろう」

「上様！」

上野介は、起とうとした慶喜に向って、思わず、声を高いものにした。

「もし、上様が、あくまでも恭順の道を踏みたい、と仰せあそばすならば、ただ、一騎にて、上洛あそばしては如何かと存じます。それがしども旗本は、遠く、前後をご警固申上げまする」

「たわけが――。その手には乗らぬぞ。……上野、もう予の料簡を変えようなどという考えは置けい。……予は、ひたすら、禁裏のご沙汰をお待ち申しているのみじゃ」

慶喜は、云いすてて、座を立った。
「上様、十五代将軍家たるの矜持を、おすてあそばしたのではありますまい」
「……」
慶喜は、上野介を、不快げに、見下した。
「上様、ご返答を――」
「莫迦者っ！」
ついに、慶喜は、一喝した。
「主人をして、大義を枉げさせようとするその方は、もはや、奉行職に就いて居る資格はない。致仕閉門を申しつける。さがれ！」
上野介は、両手を畳につかえた。
家康以来、二百六十余年のうち、将軍家が、じきじきに、直参からその職を召し上げたのは、これが、はじめてであった。
その宵、上野介は、駿河台の屋敷へ戻って来ると、すぐに、上書をしたためた。
領地を返上し、上州群馬郡権田村に土着し、農兵を教練して、いずれ再び事ある時のご用に立ち度く存じ奉る。
上書の内容は、それであった。
したためおわると、上野介は、君平を呼んだ。
廊下にひかえた君平は、主人の顔面が、別人のごとく暗いものになっているのをみとめた。
「君平、明日より、お前の護衛は、無用と相成った」

「はい――」
「致仕し、采地を返納して、上州の田舎へひっ込む。就いては、お前を、自由の身にしてやろう、と思う」
上野介は、金包みを、几上から把って、畳に置いた。
「ここに、二百両ある。一命をなげうって、護衛の役をつとめてくれたのに対しては、いささかすくないが、取っておくがよい」
「わたくしは、すでに、充分の給金を頂戴いたして居ります。このお金は、頂くわけには参りませぬ」
「金は、いくらあっても、べつに重荷にはならぬぞ。取っておけい」
「はい」
「お前のことは、忘れぬ」
「殿様――」
「なんだ？」
「わたくしは、このお屋敷をはなれますと、どうして生きて参ればよいやら、全く途方にくれまする。何卒、ご指示の程をお願いいたしとう存じます」
「うむ！」
上野介は、小首をかしげた。
この君平という稀代の兵法者は、狂人になる恐怖を、四六時中、胸中に抱いているのであった。
自身の強い意志というものを、持たぬようであった。指令が必要であった。

しばらく、沈黙を置いてから、上野介は、さしてふかい思慮でもなく、
「どうだ。もう一度、吉岡良太夫の許へ還るか」
と、云った。
「はい」
君平は、すなおにうなずいた。

十五

吉岡良太夫は、アメリカから帰朝して以来、漸次出世の道を辿っていた。
慶応元年には、新御番に進み、翌年長崎奉行支配組頭に転じ、風雲迫って、大坂が幕府の権勢の中心となるや、大坂町奉行支配組頭となり、将軍家慶喜が大坂城に入ると、挙げられて別手組頭取取締となった。
そして、慶喜が朝敵となって、江戸へ帰って来るや、良太夫もまた、別手組五十名を率いて、大坂を立退き、海路江戸へ戻って来て、いま、代々木新町の木村摂津守の別邸に、部下とともに拠っていた。
君平は、次の日、上野介に暇乞いして、代々木へおもむいた。
良太夫は、君平の姿を視て、
「なつかしいのう、君平。……勘定奉行の身辺の守護にあたって、鬼神の働きを示したことは、噂できいて居ったぞ」

と、云った。
君平は、上野介が致仕して、上州の田舎へ隠棲することになったので、こちらへ来るように指示された、と告げた。
「上州殿が、罷免になったと!?」
良太夫は、眉宇をひそめた。
「すると、上様には、もはや、薩長土に一泡噴かせるご存念はないのか」
舌打ちした良太夫は、しかし、
「それにしても、旗本八万騎が、むざむざ、薩長土の田舎ざむらいに、千代田城を土足でけがさせるわけには参らぬ。その時は、直参武辺の面目を、はなばなしゅう示してくれる。君平たのむぞ。共に阿修羅じゃ、はははは」
と、豪快に笑った。
二月十二日、将軍慶喜は、ついに、江戸城を出て、上野大慈院に屏居した。
そこで、良太夫は、部下の別手組を率いて、谷中天王寺のあたりに駐屯して、警衛に任じた。
それから十日あまり後、君平が、三日間の暇を、良太夫に乞うた。
良太夫は、べつに、理由もきかずに、許した。
君平は、小栗家の中間から、上野介がいよいよ、駿河台の屋敷を引払う旨を、通報されたのであった。
上野介が、養嗣子又一、母国子、妻道子の家族をしたがえて、江戸を発したのは、二月二十八日で

あった。
職を免じられ、屋敷をすて、野州の采地にも未練を持たずに、上州の片田舎へひっ込む旅であった。
しかし、馬上ゆたかに打たせて行く上野介の顔は、むしろはればれとしていた。
のみならず——。
そのうしろには、家来の頭数こそすくなかったが、二門の大砲、数十挺の鉄砲、弓槍弾薬など、いざ一戦となれば、忽ちに、一隊を組織できる武器を、行列させていた。
沿道の人々は、その行列に、目をそばだてた。
それが、先の勘定奉行小栗上野介の江戸退去と知ると、
「あの夥しい行李の中には、軍用金がつめてあるのじゃろうな」
と、ささやきあった。
数十頭の馬の背にのせられた行季には、たしかに、そう臆測させる重さが、感じられた。
「もしかすると、あの漬物樽には、金の伸べ棒が入っているのではあるまいかな？」
まことしやかに、口にする者もいた。
上野介が、きわめて清廉であったことは、その死後、手函を改めると、わずか拝領の小判二枚があったにすぎないことで、明らかになった。
その行列に一町ばかりおくれて、君平は、ひそかな護衛役をつとめていた。
小栗家の誰にたのまれたわけでもなかった。
自分で、そうしたかったのである。
君平は、目に映るすべての人が、なにやら、姿のない何者かにあやつられている人形のような気が

してならぬが、小栗上野介だけは、自分の意志でしっかりと大地を踏みしめて歩いている唯一の人物のような信頼感をおぼえていたのである。
小栗上野介の生命を守護すること——これが、君平にとって、唯一の使命となっていた。

十六

君平が、吉岡良太夫に乞うたのは、三日間の暇であった。しかし、君平が、江戸へ帰って来たのは、恰度二月後であった。
君平は、小栗上野介の最期を見とどけて来たのである。
上野介が上州権田村に退隠したのは、自ら死をもとめた結果になった。
三月朔日、権田村に到着した上野介は、村はずれの東善寺という曹洞宗の古刹に、仮寓したが、まだ行李をとくいとまもないうちに、七千余の暴徒の集団の襲撃を受けなければならなかった。
時世が急変すれば、政治思想を抱く者のみが、徒党を組んで狂奔するとは限らなかった。三百年間、生かさず殺さずに米をつくらされて来た農民が、幕府の権勢の衰微をみてとるや、霖雨の後の晴れ間に一斉に飛び立つ羽蟻のように、むらがり起ったのは、当然といえた。
暴徒の勢いが、最も凄じかったのは、やはり、関東であった。諸藩には、まだ、藩主に対する忠節、尊敬の念があった。幕府直轄の地ともなれば、将軍家の威光が失われると、農民は、にわかに、解放感にうかれて、その行動の抑制を忘れる。
将軍慶喜が、大政を奉還した頃、関東各地に、暴徒は蜂起した。

野州に起った一団は、前橋・高崎の豪農、商家を劫掠して、上州群馬郡室田に迫り、武州秩父に起った一団は、多野郡藤岡、北甘楽郡富岡附近をあらしまわって、室田の一団と合流し、七千余人にふくれあがっていた。
そして、
「勘定奉行小栗上野介が、十万両の軍用金を持って、権田村に来たそうだ。公儀の軍用金は、わしらの血と汗でつくられたものだ。返してもらおうじゃねえか」
と、掠奪を即決するや、どっと、殺到して来たのであった。
暴徒が、三の倉に迫ったという急報に、上野介は、やむなく、二門の大砲を、山門前へ据えると、村民の助力をもとめた。
権田村の壮丁は、必ずしも、上野介に心服していたわけではなかった。かれらもまた、上野介が、夥しい軍用金を持ちはこんで来ていると思い込んで居り、ここで、暴徒を追いはらえば、その働きに多分の報酬が与えられるものと考えたのであった。
三月四日未明、権田村へなだれ込んだ暴徒は、五箇処へ放火しておいて、鬨の声を噴かせた。
しかし、村には、上野介の指令によって、老幼婦女子の姿はなく、屈強の壮丁だけが、隊を組んで、待ちかまえていた。
上野介から、「暴徒らは、必ず火を放つであろうから、直ちに、消しとめることに、努力せよ」と命じられていた壮丁たちは、放火した暴徒たちが、そこからはなれるや、さっと奔って、懸命の消火につとめた。
火の手は、村中へひろがることはなく、夜が明けた時には、わずかな煙がたちのぼっているにすぎ

なかった。
壮丁たちは、おのが村に身をかくすのであった。寄手に容易に発見されるようなことはなかった。
逆に、寄手の方が、人影のない村の静寂に、薄気味わるさをおぼえた。寄手のうちには、近隣の村から、脅迫によって狩り出された農民が、多数交っていたので、足並は一致していなかったのである。
狩り出された農民たちは、加わらねば村を焼き、女房子供を殺される、と脅迫されて、やむなく、従いて来ていたのである。生命を投げ出す度胸など、みじんも持ってはいなかった。
顔見知りの多い隣村の者たちに対して、はじめから闘う意志などなかったのである。
ただ、しかたなく、わあっ、わあっ、と鬨の声をあげているばかりであった。

十七

小栗上野介は、東善寺山門の屋根に立って、夜明けを待っていた。
押し寄せて来る暴徒の群を、雑木林のむこうに見わけると、
「撃てっ！」
と、命じた。
満を持していた砲手は、二門の砲口から、火を噴かせた。
あらかじめ、照準は、雑木林に合せてあった。
二箇の砲弾が、そこに炸裂するや、七千余の暴徒は、忽ちに、浮足立った。
まず狩り出された農民たちが、一斉に、遁げ出した。

「逃げるなっ！　逃げる奴は、斬るぞっ！」
頭梁の金井庄助が、呶号した。
その折——。
雑木林わきの田の畦道を、すたすたと近づいて来る人影が一箇、見出された。
「なんだ、おのれは——？」
むこう鉢巻に、長脇差を携げた暴徒の小頭が、見とがめた。
君平であった。
尻端折りをして、小刀を一本腰に帯びているだけであった。
「頭梁に、お目にかかりとう存じます」
君平は、無表情で、云った。
「だから、おのれは、なんだ、ときいとるんだ？」
「小栗上野介の下郎でござる」
「なんだと？」
「頭梁は、どなたでありましょうか？」
「莫迦野郎っ！」
喚きとともに、長脇差が、振り下された。
君平が、すっと、その脇をすり抜けた瞬間、むこう鉢巻の首が、宙に刎ねとんでいた。
信じ難い迅業であった。
暴徒たちは、一瞬、あっけにとられた。

「野郎っ！」
「こいつがっ！」
われにかえって、暴徒たちが悪鬼の形相になった時には、君平はもう、その中央にわけ入っていた。
刀や槍や竹槍が、君平めがけて、襲いかかったが、血飛沫と悲鳴をあげたのは寄手の方ばかりであった。
君平の周囲が空けられて、睨みあいになった時、すでに、十人以上が、斬り伏せられていた。
返り血をあびた君平は、依然として無表情であった。
いつの間にか、敵の手から、刀を奪い取って、二刀を摑んでいた。
暴徒たちは、君平を遠巻きにすると、重苦しい沈黙を、あたかも強いられたごとく、つづけた。
「頭梁、卑怯ではあるまいか」
君平が、云った。
金井庄助は、しかし、君平の前へ姿を現わそうとはしなかった。
君平は、ぐるりと、見わたして、
「お主ら、こんな卑怯者に、ひきつれられて居るのか。なさけないの」
と、笑った。
その時、三方の畦道に、それぞれ百人一隊の村の壮丁たちが、姿を現わして、どっと、鯨波をあげた。
と同時に——。
山門前の二門の大砲が、再び、火を噴いた。
あっと浮足立った暴徒が、なだれをうって、退却しようとするのを見て、君平は、

「頭梁は、どいつだ?」
と、叫んだ。
農民の一人が、遁げ乍ら、
「こ、この人じゃ!」
と、こたえて、指さした。
君平は、猛然と、金井庄助めがけて、疾駆した。
金井庄助は、狂人のように滅茶滅茶に、刀をふりまわして、君平の迅業から遁れようとした。
君平は、その刀を、はねとばしておいて、脳天から、肋まで、まっ二つに斬り下げた。
すでに、その時は、三手にわかれていた壮丁隊が斬り込んで居り、七千余の暴徒は、いたずらに、遁げまどうばかりであった。

暴徒は、午になった頃には、一人のこらず、権田村から、消え失せた。
上野介は、壮丁たちの働きをねぎらった際、何者とも知れぬ男が、唯一人、暴徒の群に突入して、頭梁の金井庄助を斬った、という報告を受けた。
その風貌をきいた上野介は、微笑して、
「君平の奴、わしを護衛して居ったか」
と、呟いた。
君平はしかし、上野介の面前に、姿を現わそうとはしなかった。
ともあれ、上野介は、権田村に、新宅をつくらねばならなかった。

暴徒の再挙に備えるために、要害の地をえらぶことにして、上野介は、一日を費して、歩きまわった。
そして、榛名山の峰つづきの、観音山と呼ばれる山の中腹をえらんだ。一筋谷川の流れが、烏川に落ちあうところで、数十丈の絶壁の上に、かなりの平地がひらけていたのである。
絶壁の下には、官道が通じていて、便利がよかった。それよりも、上野介に気に入ったのは、風致の絶佳であった。
「ここから、天下の形勢を眺めるとするか」
上野介は、妻の道子に、笑った。
この地をえらんだことが、わが身を滅す原因になろうとは、上野介は、夢にも考えてはいなかった。
君平は、遠くから、その絶壁上に、棟があげられるのを眺め乍ら、なんとなく、まだ、立ち去り難かった。
暴徒が、再び襲来するかも知れぬ、という不安も去らなかったし、君平は、その館が建ちあがるのを見とどけてから、江戸へひきかえしたい気持であった。

十八

やがて、上野介を襲って来たのは、暴徒ではなかった。
官軍であった。
東山道総督岩倉具定が、薩長軍を率いて、東下して来る途次、三の倉の名主某が、小栗上野介が権

田村の山に砦を構えて、官軍に敵対しようとしている、と直訴に及んだのであった。
名主某は、暴徒襲来の朝、伜を、君平に斬られていた。その伜は、生来狂暴な男で、自ら進んで暴徒の群に投じたのであった。しかし、名主某は、伜が屍となって、戸板にのせられて、運んで来られると、父親の情として、小栗上野介を憎まずにはいられなかったのである。
小栗上野介が、官軍に敵対しようとしている、と訴え出る証拠はそろっていた。
多額の軍用金とともに、大砲その他の武器を備えて、嶮岨の地をえらんで、砦を築き、しかも、近隣の壮丁を召集して、兵として養成しているのであった。
官軍は、名主某の直訴により、密偵を放って、さぐらせ、訴える通りであることを、たしかめた。
高崎、小幡、安中の三藩に対して、小栗上野介追討の令が下されたのは、江戸城明け渡しがおわった頃であった。
総督府からは、原保太郎・豊永憲一郎の両名が監軍として臨み、高・小・安三藩は、追討の軍を起し、三の倉の全透院という寺院を本拠とした。
もとより――。
三藩はいずれも、徳川家の譜代であったので、小栗上野介を本当に討つ気持はなかった。
追討令を受けたので、やむなく、軍を進めたにすぎなかった。
四月朔日、使者が、東善寺へ、遣された。
上野介は、冤罪であることを述べて、即刻、一門の大砲と二十挺の銃を引き渡し、翌日には、嗣子又一に従者をつけて、人質として、高崎の官軍出張所へ出頭せしめた。
三藩は、上野介に異心のないことをみとめて、すぐに兵をひきはらおうとした。

しかし――。
監軍の原保太郎と豊永憲一郎は、肯き入れなかったのだ。
原・豊永両人は、すでに、監軍となった時から、ほぞをかためていたのである。たとえ、小栗上野介に、異心がない、とわかっても、これを許さず、断罪にすることに、きめていた。
すなわち、渠らもまた、上野介が、夥しい軍用金を江戸から運んで来た、と信じ込んで居り、それを奪う肚であった。
官軍は、軍用金に欠乏していた。
「江戸城の倉には、すくなくとも、二三十万両は、のこって居ろう」
そう思って、開城させてみると、金蔵は空であった。
当然、勘定奉行であった小栗上野介が、持って逃げた、と解釈された。
三の倉の名主某が直訴したのを奇貨として、官軍は、小栗上野介を処断して、その軍用金を奪うことにしたのである。
原・豊永両人は、三藩に対して、もし兵をひきはらうならば、三藩とも同罪とみなすと、おどした。
やむなく、三藩は、両監軍に、それぞれ一小隊ずつ附けて、東善寺へ、むかわせることにした。
その前夜――。
方丈に寝ていた上野介は、廊下に、人の気配があることを知って、
「誰だな、そこにいるのは？」
と、訊ねた。
「君平にございます」

「お前、まだ、ここにとどまっていたのか」
「はい」
「なぜ、江戸へもどらぬ？」
「殿様、おん身に危険が迫って居ります。今夜のうちに、お立退きなさいますよう——」
「わかって居る」
「では、すぐに、お立退きを——」
「わしが、往くところ、必ず、官兵が追って参るであろう。無駄だ」
「てまえが、追いはらいまする」
「君平、たった一人で、一万も二万もの敵軍を、どうして追いはらうことができるぞ」
「殿様が、遠く落ちのびられるあいだ、道をふさぎまする」
「ははは……、無駄だの。敵は、わしが、多額の軍用金を持っている、と思い込んで居る。いわば、餓狼だ。これを、追いはらうことは、不可能だ。……君平、はよう、江戸へもどれ。お前も、たとえ、生命をながらえることはできぬとしても、死花を咲かせる場所は、ここではない」

十九

翌朝、東善寺は、百名ちかい官兵によって包囲された。
しかし、山内は森として、人の気配もなかった。
高崎藩次席家老が、客殿に踏み込んでみると、そこに端座していたのは、小栗上野介と三人の従者

——大井磯十郎、荒川祐蔵、渡辺多三郎だけであった。
上野介は、母と妻道子を、夜のうちに権田村から落し、誉田三左衛門以下の家臣らも、それに従わせたのであった。
「東山道先鋒総督府よりの上意でござる」
高崎藩次席家老は、世が世であれば、直接言葉も交せぬ小栗上野介を罪人として召捕ることに、忸怩たるものをおぼえ乍ら、
「小栗上野介御不審の廉により、取調べのため三の倉陣営まで引立てる。神妙に、縄を受けられよ」
と、宣告した。
「承知いたした」
上野介は、自若として、縄を打たれるにまかせた。
従者たちは、流石に、主君が縄を打たれようとすると、烈しい気色を示したが、目蓋を閉じて微動もせぬ主君の態度に、自分らも、黙って、縛に就かざるを得なかった。
三の倉の陣所に曳かれた上野介主従に対して、ただ一回の訊問すらも、行われなかった。
一夜をそこにとどめられた主従は、夜明けに、村の西境の烏川の畔——俗に水沼河原という磧に設けられた刑場へ、引き出された。
大井、荒川、渡辺の三人の従者は、後手に縛られたままで、首を刎ねられた。
上野介は、永年自分に仕えて、忠勤をはげんでくれた家臣らの最期を、大きくまなこをひらいて、見とどけた。
監軍の一人原保太郎は、流石に、さきの勘定奉行を、縄を打ったまま、斬ることをためらった。

その縄目を解くと、
「小栗殿、存念次第では、総督にも慈悲がござる」
と、云った。
「存念とは——？」
上野介は、ひややかに見かえした。
「たとえば、江戸城より持ち出された軍用金を、すすんで、総督へさし出される存念があれば——」
この言葉をきくと、上野介は、声をたてて笑った。
笑っただけで、なんともこたえなかった。
返答しなかったために、上野介は何処かに数十万両の軍用金を隠匿した、と後のちまでつたえられて、それをさがし出そうと血眼になった者が、あとを絶たなかった。
原保太郎は、憤然となって、
「斬れい！」
と、下知した。
上野介は、従容として、刑に就いた。享年四十二歳。
首級は、そのまま、磧に梟された。
処刑者が去ったのち、そこへ近づいたのは、君平であった。
その前にひざまずいて、しばらく、暗涙にむせんでいたが、そっと、梟首台からとりおろした。
首級を、同村東の堂の墓地へ、また遺骸を、東善寺に葬るのは、すべて君平一人の手で為した。
君平は、住職にたのんで、法名をつくってもらい、陽寿院法岳浄性居士と記した位牌を胸に抱いて、

権田村を立去った。
高崎の官軍出張所へおもむいた上野介嗣子又一は、三人の従者とともに、その翌日、同じく、処刑された。又一は、わずかに二十一歳であった。又一は、上野介の実子ではなく、大目付駒井甲斐守朝温の次男で、上野介に養われて、小栗家の祖先の通称を襲いだのである。不幸な若者であった。

二十

君平が、上野介の位牌を胸にして、江戸へ帰って来た——その日。
徳川慶喜は、朝命によって、水戸へ退隠することになり、仮住いの上野大慈院を出ていた。
供は、重臣としては、若年寄浅野美作守ただ一人であった。
慶喜は、黒木綿の羽織に小倉袴、麻裏草履という粗末ないでたちで、髭も月代ものびたままであった。
美作守のほかに、二十余人の供奉員が従ったばかりであった。
高橋泥舟が率いる遊撃隊、中条金之助の率いる精鋭隊が、それぞれ、路次の警衛に任じた。
この時、吉岡良太夫もまた、彰義隊の有志十余名とともに、よそながら、水戸まで扈従して行った。
君平は、その供に加わることが、間に合わなかった。
いや、追いかければ、君平の足では、なんの造作もなく、追いつくことができたであろう。
君平は、それをせず、吉岡良太夫が、水戸へ扈従して行ったときくと、その足でおとずれたのは、駿河台の小栗邸であった。

小栗邸は、そのまま、空屋敷となっていた。
君平は、仏間に入って、一基の位牌もなくなった仏壇へ、上野介の位牌を置き、庭の花を採り、井戸から水を汲んで来て供えた。
そして、その前に、黙然として、頭をたれた。
「下郎、何をして居る？」
不意に、背後から声が、かかったのは、ものの半刻も過ぎてからであった。
君平は、顔を擡げて、振りかえった。
一瞥して、官軍の隊長と判る男が、そこに立っていた。
君平は、廊下を踏んでいる土足を、視た。
「おのれ一人、なにをして居るんだ？」
「ごらんの通り、主人の霊をとむらって居ります」
「主人？　ここは、小栗上野介の屋敷だろう？」
「はい、左様でござる」
「その位牌は、上野介のものだ、と申すのか？」
「はい」
「上野介は、上州群馬郡に砦を築いてたてこもっているときいたぞ」
どうやら、上野介が処刑されたことを、この隊長は、知らぬようであった。
「主人は、このように、もはや故人になって居ります」
「ふん――」

隊長は、仏間へ踏み込んで来ようとした。
とたん、君平が、
「待たれい！」
と、鋭く叫んだ。
「ここは、仏間でござる。土足でけがすのは、おひかえ下され」
「下郎のぶんざいで、なにをほざくか」
せせらわらって、隊長は、靴で、畳を踏んで、入って来た。
君平のこめかみが、びくっと痙攣した。しかし、坐ったまま、動かなかった。
「退け！」
隊長は、叱咤して仏壇へ寄ろうとした。
瞬間――。
悲鳴とともに、隊長は、棒倒しに、倒れた。
その両脚は、臑から二本とも両断されていた。
悲鳴をきいて、表玄関に屯していた官兵十数人が、どっと、廊下を奔って来た。
かれらは、裏庭に、足を喪って、ころがっている隊長の無慙な姿を見出して、仰天した。
「何奴のしわざだ？」
「さがせ！」
「どこだって？」
官兵らは、八方へ奔った。

仏間に、障子がたてきってあり、その障子がひき開けられたのは、かなり経ってからであった。
仏壇へ向って正座している小者姿の男が、よもや、下手人とは思えなかった。畳の血汐は、きれいに拭かれていたし、そこで惨劇が起った跡は、どこにもとどめられてはいなかった。
「おい、貴様——」
官兵が、ずかずかと入って来た——瞬間。君平は、坐ったままで、くるりと向きなおりざま、再び、目にもとまらぬ抜きつけの一閃を、その官兵の下肢へ、送った。
「うああっ！」
両脚を薙ぎはらわれて、官兵は、宙へはねとんだ。
君平の眼光は、あきらかに、常人のものではなかった。
事実、そこへ殺到して来た官兵のうち、
「こやつ、きちがいじゃ！」
と、叫んだ者がいた。
「いいや、わしは、狂っては居らぬ！」
君平は、叫びかえした。
「主家の仏間を、土足でけがすのを、許さぬだけだ！」
そう云って、はじめて、君平は、立ち上った。
その悽愴な姿に、官兵たちは、たじたじとなった。
「おのれら、去せろ！　去せぬと、一人残らず、斬るぞ！」
君平が進むと、官兵たちは、どっと後退した。

障子の蔭にかくれていた一人が、横あいから、躍りかかったが、これは、苦もなく、袈裟がけに、斬り下げられてしまった。
君平が、携げているのは小刀であり、多勢で押し包めば、討ちとれそうな気がするのであったが、浮足立った官兵たちは、陣形をととのえるいとまもなく、後退しつづけた。
と——。
なにを思ったか、君平は、くるっと身をひるがえすと、仏間へ馳せもどって、そこに仆れている官兵を、裏庭へ、抛り出しておいて、障子をぴしゃりと閉めてしまった。
官兵たちは、顔を見合せた。
隊長と同輩を斬られて、このまま、おめおめと引きあげるわけには、いかなかった。

二十一

一人が、刀の切先で、障子を一枚、突き開けてみると——。
君平は、再び血汐でよごれた畳を、ていねいに拭きとっているところであった。
「こやつ、本当に狂っている！」
一人が、云った。
誰も踏み込む度胸はなく、黙って、君平の振舞いを見まもるばかりであった。
廊下にひしめく敵が十人以上もいるにも拘らず、平然として、畳を拭くのは、やはり常人とは受けとりがたかった。

君平は、拭きおわると、ゆっくり立ち上って、官兵たちを、視た。
「おのれら、まだ、なにか用があるか？」
冷やかに、訊ねた。
「出ろ！　おもてへ出ろ！」
呶号した者は、君平の視線をあびると、思わず、一歩退った。
君平は、薄ら笑った。
「おのれらの腕では、わしを斬ることは、叶わぬ」
と、云い、しずかに歩いて来ると、障子を閉めた。

町を巡察中の一隊に、応援をもとめて、仏間の障子を、蹴倒した時、もう、そこに、君平の姿は、なかった。
「彼奴っ！　どこへ、消え失せ居った？」
どやどやと、踏み込んで来た時であった。
天井の中央の板が、一枚音もなく、はずされた。
「おっ！　あそこだ！」
と、指さした者が、次の瞬間には、第一番に、咽喉へ、小柄を刺されて、のけぞった。
小柄は、つづけさまに、官兵たちを襲った。
いずれも、咽喉を刺されて、忽ち仏間は、修羅地獄と化した。
辛うじて、廊下へ遁れたのは、二人だけであった。

八人が、仏間へ斃れた。
天井裏の薄闇の中から、じっとのぞきおろす君平の眼眸は、氷のように冷たかった。
叫びが、玄関からおもてへ走り、官兵が続々と馳せつけ、野次馬もまた数を増した。
騒然たるうちに、日が昏れた。
鉄砲隊が到着した時、屋敷は、数百の官兵で包囲されていた。
しかし――。
ついに、君平は、討ちとられず、つかまりもしなかった。
君平は、決して、勝手知った屋敷を、かくれまわって、脱出した次第ではなかった。
仏間の天井裏から、書院の天井裏へ、身を移しただけで、宵闇を待って、とび降りるや、疾風のごとく、玄関へ奔り、そこで、二人を斬り伏せておいて、正門からおもてへとび出したのであった。
よもや、正門から脱出するとは、考えなかった官軍方の不覚であった。
あっという間もないほどの迅さであった。
蝟集した見物人の中には、君平と顔見知りも多く、すでに、その下手人が小栗上野介の家僕であることを知った庶民たちは、口にこそしなかったが、
――ざまあみろ！
と、内心では、快哉を叫んでいたのである。
官軍に対する反感は強く、家僕ただ一人が堂々と闘いをくりひろげてくれることは、溜飲の下る快事であった。
いわば、二千余も蝟集した見物人は、のこらず君平の味方であった。

その中へまぎれ込んだ君平を、討ちとることは、不可能であった。
君平は、ものの三町もはなれていない古道具屋の二階へ、遁げ込んだ。
その店は、上野介が江戸退転にあたって、家財をはらい下げて居り、あるじは、三代にわたる出入りだったのである。
「君平さん、ようやって下さった。お殿様も、あの世で、手を拍っておよろこびになって居りますぞ」
あるじは、君平に、冷酒を与えながら、そう云ったことだった。

二十二

慶喜が、水戸に退隠したあと、徳川家の跡目は、田安亀之助（六歳）によって相続された。
しかし、城池・禄高などは、追って沙汰がある、とのみ伝達されただけであった。
徳川家直参たちが、これを詐謀と受けとったのは、当然であった。
「禁裏のご意嚮は、徳川家の社稷を絶つにあるに相違ない」
この憤激が、ひろまった。
旗本、御家人はもとより、商人職人にいたるまで、新を忌み旧を慕うた。
官兵と江戸の住民たちの反目、いさかいは、日とともに、件数を増した。
泰平を謳歌した江戸の様相は一変した。
吉岡良太夫が、水戸から帰府したのは、そうしたさなかであった。

代々木新町の自邸に入った良太夫は、急遽同志を糾合した。集ったのは、藤田米太郎、斎藤善助、五十嵐半平ら伊庭道場出身の手練者をはじめ、別手組の諸士に加え、食いつめていた浪人者や、やくざまで、およそ三百人であった。
彰義隊がいよいよ合戦の覚悟をきめた、という報告に、配下一同は、気負い立った。
しかし、良太夫は、容易に動かなかった。
いわば、赤穂浪士の頭領大石良雄の気持であった。
徳川家に対して、城池・封禄の沙汰があるまでは、軽挙妄動してはならぬ、と配下を抑えたのである。
もし、朝廷の意嚮が、徳川家を根絶やしにしようとすることにあると、明白になれば、決断起つことは、云うを俟たぬ。また、その城池・封禄が、異常に不当なものであれば、当然抗議することになろう。
「いまは、堪忍あるのみ」
良太夫が、抑えたことは、やがて、無駄となった。
山岡鉄舟らが、必死に阻止した効もなく、上野山内にたてこもった彰義隊が、反逆の狼火をあげ、一日にして敗れ去った。
夜に入って、遁れた彰義隊残党は、ひそかに、代々木新町の吉岡邸へ、奔り込み、忽ち、千余人にふくれあがった。
江戸がようやく平静にかえった頃、朝廷からの徳川家移封処分方が、巷間にも伝達された。
「徳川亀之助を、駿河国府中の城主とし、領地高七十万石を与えられる。但し、駿河国一円、その

余は遠江、陸奥両国を下し賜わる。」
この沙汰は、幕臣を、茫然自失させた。
徳川家の所領は、八百万石であった。その実収はもちろんすくなかったが、それでも、四百数十万石はあった。
たとえ、将軍職を奉還しても、いやしくも三百余年間の日本の支配者であり、べつに、天下分け目の合戦をくりひろげて、敗れたという次第ではなかった。
徳川慶喜が、むしろすすんで、王政復活に、努めたのである。
その半ばを削られたとしても、関八州を含めて、二百万石は、残してもらえるであろう。幕臣らは、そう考えていた。甘い考えであった。
沙汰されたのは、わずか七十万石であった。尾州でさえ六十二万石である。それよりも、わずか八万石多いだけである。加賀前田家よりもはるかにすくない。これでは、徳川宗家としての面目が維持できる道理がない。
江戸を追われて、駿河の掌大の地に屈することも、幕臣にとって忍びがたい無念であった。
すでに、この処分は、慶喜を水戸に退隠せしめた時に決意していたことも、やがて判って、いよいよ、幕臣たちを悲憤させた。

二十三

——頽勢は、すでに掩うべくもない。

吉岡良太夫は、幕臣たちが悲憤し乍らも、決然として団結し、大総督府に楯ついて、江戸の武辺の気概を放とうとする動きを、さらに示そうとせぬのを、観てとった。
旗本八万騎の勇武は、地を払ってしまっていた。
わずかに、彰義隊が、それを示したにすぎなかったのだ。
——しかし、わしは、屈することはできぬ！
吉岡良太夫は、一千余人の隊長として、徳川家の移封減地を、黙視はできなかった。
もとより、勝算はあるべくもない。江戸っ子の心意気を、天下に知らしめてやろうとする気持だけであった。
良太夫は、七月半ばの某夜、築地河岸から、一艘の釣舟を漕ぎ出した。
品川沖には、開陽以下八隻の軍艦を擁して、無気味な沈黙をまもっている海軍副総裁榎本和泉守（武揚）がいた。
良太夫は、それをたずねたのである。
榎本に面接するや、良太夫は、声をはげまして、官軍にひと泡噴かせる作戦を説いた。
七十万石の沙汰であるが、おそらく、大総督府は、朝には甲の地を削り、夕には乙の地を奪い、ついには、名目を設けて、徳川家を地上より抹殺するこんたんに相違ない。荏苒として、主家の滅亡を待つよりは、この時、海に於て榎本が、陸に於てこの吉岡が、相呼応して闘い、奥羽各藩の援軍を待てば、必ずや千代田城を取りもどして、官兵を一人残らず箱根の彼方へ追いはらうことが、でき申す。
そう述べたのであった。
しかし、榎本は、動かなかった。

「江戸に於ける旗揚げは、賛成しかねる。わしには、別の思案がある」
「思案とは――?」
「蝦夷という広大な土地のことを、わしは、考えている。ここに、あらたに、城を築き、別国をつくることだな」
良太夫にとって、そんな企図は、あまりにも、いまの自分の気持から遠いものであった。
良太夫は、榎本に別れると、再び釣舟で、築地河岸へ、もどって来た。
深更の黒い海面を、櫓音のみをひびかせて、釣舟は、ふかい沈黙をまもった。
やがて、築地河岸の明りが、むこうに見えた時、良太夫は、漕ぎ手を、
「君平――」
と、呼んだ。
「はい」
「お前は、河岸へ上ったならば、その足で、まっすぐに、故郷へ帰れ」
良太夫は、命じた。
「故郷へ帰る意志は、毛頭ありません」
君平は、こたえた。
「お前は、わしと行動をともにすれば、やがて、捕えられて、断罪になるぞ」
「覚悟して居ります」
「お前は、幕臣ではない。べつに、将軍家に忠節をつくさねばならぬという気持があるわけでもなかろう」

「……」
「故郷へ帰って、百姓になり、世の中が、どう変わるのか、わしの代りに、見とどけてくれ」
「吉岡様、もうおそうござる」
「おそいとは?」
「てまえは、人を斬りすぎました。このむくいは、受けねばなりませぬ」
「人を斬りすぎた?……小栗邸で、仏間をけがした官兵を幾人か殺傷したのは、お前らしい、と噂にきいたが……」
「いいえ。それればかりではありません。……あの日以来、てまえは、夜な夜な、市中をうろついて、巡邏の官兵ばかりをえらんで、辻斬りして居ります」
「なに!?」
良太夫は、愕然となった。
この数箇月のあいだ、闇から闇を掠めて、官兵を、一太刀ずつで、斬り仆す曲者がいることは、あまりにも噂が高かった。
それが同一人か、それとも数人かは、まだ判ってはいなかった。旗本中の手練者であることは、その目的が物取りではないことで、明白であった。
官軍方では、巡邏の頭数を増し、躍起になって、その下手人の正体をつきとめようとしているが、まるで見当がついていなかったのである。
「てまえは、もう、夜に入ると、人を斬らずにはいられなくなって居ります。……狂って居ります」
「君平!」

良太夫は、鋭く呼んだ。
「故郷へ帰るのだ。刀をすてて、鍬を取れば、もとのお前にもどる。屹度もどることができる！」
「帰れ！」
「はい――」
河岸道に上ると、良太夫は、懐中の所持金をのこらず、君平に与えて、いくども念を押した。
君平は、合点して、歩き出した。
しかし、その後姿を見送る良太夫は、
――君平は、おそらく、故郷へは帰るまい。
との予感がした。

二十四

吉岡良太夫が擁する一千余人は、もとより烏合の衆であった。主家の興廃を念じ、義憤に燃えた直参や浪士は、比率としては、尠かった。
多くの者が、官兵を襲うよりも、商家を脅かし、庶民を悩ました。そして、捕えられると、昂然として、吉岡良太夫の部下であることを、高言した。
官軍は、吉岡良太夫を捕えることにして、きびしい探索の網を張った。
良太夫は、慶喜が、水戸から駿府へ移ったのを知り、また榎本武揚が、艦隊を率いて東北へ去った報に、決起の機が失せたのを知った。

良太夫は、隊を解散して、身ひとつで、転々と住居をかえつつ、追捕の手からのがれた。
江戸が東京と改称されてからほどなく、良太夫は、板橋在の赤塚村で、部下の総召集を行った。
忽ち集ったのは、三百余人であったが、いずれも、食いつめ、自暴自棄になっていることが一目瞭然となった。
すでに、良太夫には、三百余人をやしなう金はなかった。このまま隊を組んでいれば、野盗の群に堕ちることは目に見えていた。
やむなく、良太夫は、情勢を説いて、大半の者を去らせた。
再び、市中へ忍び帰った良太夫は、芝伊皿子の知辺の家にひそんだ。
一夜、良太夫は、その家も危険になったので、江東へ遁れようとした。
その途中、突如として、捕吏に包囲され、ついに捕えられた。
ひきたてられたのは、下谷七軒町の屯所であった。そこは、柳川藩管轄であった。
良太夫は、その屯所に、三日間拘留されていた。
三日目の宵、良太夫は、番士の警戒の下に、厠に入った。
すると、そこに、刀がたてかけてあった。
何者が、そうしてくれたのか、思案するいとまもなく、良太夫は、厠の窓を破って脱走した。
吉岡良太夫が、捕えられたのは、明治三年四月初旬であった。
官の詮議の厳しさに追われて、奥州路へ遁れ、ようやく帰って来て、浅草東光院に身を寄せてから、わずか四日目であった。

二年余を各処にひそみ、奥州にまで遁れて、もう大丈夫であろうと、戻ったところを、直ちに、官の邏卒に踏み込まれたのである。良太夫は、ついに、観念して、縛に就いた。

いったん、茅町の屯所に曳かれたが、こんどは、警固厳重に、その日のうちに小伝馬町の牢獄へ押送された。

もはや、その頃は、すでに、旧幕臣に対しては、なるべくその罪を寛大に扱うように、という沙汰があった。

良太夫も、いずれは、放免になるであろうと、近親者や知己は、考えていた。

しかし、良太夫は、放免にならなかった。

二年前、江戸市中で、夜陰に乗じて、官兵を闇討ちしたのは、吉岡良太夫の仕業である、とみなされたからである。

良太夫は、取調べを受けた際、そのことを尋問されると、べつに否定せず、

「推測は随意にされい」

と、こたえた。

その言葉が、罪をみとめたものと、解釈された。

その年霜月十八日、良太夫は、ついに、牢屋敷の処刑場で、首を斬られた。享年四十一歳であった。

辞世に、

郭公我をいざなへ死出の山ひとり行く身の友しなければ

というのであった。

その処刑が世間に公告されてから、十日あまり過ぎて、上州群馬郡権田村の曹洞宗東善寺の墓地に、

一人のむさくるしい風体の男が入って来た。

痩せさらばえ、幽鬼のように、眸子ばかり底光らせて、足もともさだかでない歩行ぶりであった。

君平の変わりはてた姿であった。

君平は、肺を患い、喀血をつづけて、こうして歩いているのさえ、ふしぎなくらい、衰弱しはてていたのである。肺を患った、と知ったのは、良太夫に別れてほどなくであったが、養生をしなかったのである。

君平は、旧主小栗上野介の墓の前に、坐った。

「御主人様。吉岡様の最期を知りましたので、かねて、考えて居りました通り、お墓の前を、けがさせて頂きます」

君平は、かすれ声で、墓へ云いかけた。

そして、懐中から、一握りの短剣を、とり出した。

思えば――。

君平は、ワシントンの往還で、切腹して果てる筈の身であった。

幸か不幸か生きのび、ようやく、切腹する秋を迎えたのである。

君平は、鞘をはらい乍ら、胸のうちで、

――この体力で、十文字腹に切れるかな。

との呟きをもらしていた。

八代目団十郎

一

一

江戸には、十月朔日になると、炉びらき・口切の催しがあった。
風流隠士の遊びであった。直参大身の隠居とか、医師とか、江戸城御用達町人とか、蔵前の札差とか、豪商とか、諸山の僧侶とか、吉原遊廓のあるじとか――いずれも、富裕の人間ばかりが、自慢の茶亭と庭園に、この日のためにさらに金をかけて、よそおいをあらたにし、茶味の濃淡を愛す同好者を招いた。
寛永以来、台所窮迫にあえぐ諸大名の家臣らには、その余裕はなかった。
炉びらきには、もちろん、茶事の宗匠が加わったが、わざと宗匠を排けて、将軍家直参の御坊主とか、上野東叡山に勤める士などを招く家もあった。それらの者の方が、宗匠をしのいで、斯道の蘊奥をきわめた人がすくなくなかったからである。
炉びらきの中心地は、東叡山のうしろにある根岸の里であった。

当時、根岸の里は、都下第一の静地で、風流人士の住居がならんでいたのである。
その夜――三更近く。
蔵前札差なにがしの別宅から、炉びらきに招かれた客の一人が、駕籠で、出た。
閑静の地だけに、戌刻（午后八時）を過ぎると、往還には人影は全く絶えてしまう。
炉びらきの催しに、三弦の音はないので、あたりは、しいんとして、樹木の中に、遠い灯がちらちらとうごくばかりである。
駕籠の前を、提灯で路面を照して行く供の男が、突然、息をのんで、立ちどまった。
行手に、宛然幽霊のごとく、黒い影が立ったのである。
供の男は、おそるおそる、提灯をかかげてみた。
編笠をかぶった着流しの浪人者であった。
――辻斬りか！
供の男は、膝がしらが、がくがくとなった。
浪人者は、ゆっくりと距離を縮めて来た。
「ど、どうしなさる？」
供の男は、悲鳴に近い声をあげた。
「合力をのぞみたい」
浪人者は、云った。
駕籠の中のあるじが、たれをあげさせて、顔をのぞけた。
「てまえは、八代目市川団十郎にございます。役者と申すものは、懐中に金子を所持つかまつりませ

ぬ。ご容赦を――」
おちついた声音で、ことわった。
「祝儀をもらって来たであろう。札差の祝儀ならば、百両は下るまい」
「ご存じないことでございますが、炉びらきには、祝儀はございませぬ。その代り、来月の顔見世に、幕を贈って頂きまする」
浪人者は、さっと近づくと、供の男から、提灯を奪いとって、それを、団十郎の顔へ、さしつけた。
団十郎は、この時、まだ二十四歳であった。その人気は、満都を圧していた。家の芸の荒事はもちろん、和事、実事を兼ねて、世話物にも時代物にも、往くとして可ならざるはなく、切られ与三、山名屋時次郎、足利光氏、児雷也など、渠自身のために書きおろされた狂言を、見事にこなして、大当りをとっていた。
その人気にふさわしい、大きく張った二重の双眸といい、肉の厚い鼻梁といい、ひきしまった口もとといい、いかにも役者になるためにつくられた秀れた風貌を持っていた。
黒羽二重紋服姿は、そのまま、十万石の大名の座に据えても、すこしもおかしくはない。

天然の育ちを見るや白牡丹

これは、団十郎を誉めた句のひとつであるが、まさに、若さと美しさを合せて、見惚れる男ぶりであった。
ところが――。
「ふむ!」
合力を乞うた編笠の浪人者は、ひくく呻くように、おのれに頷くと、

「合力する対手をまちがえたようだ」
と云いすてて、提灯を、供の者にかえすと、踵をまわして立去ろうとした。
「お待ち下さいまし」
団十郎は、呼びとめた。
浪人者は、ふりかえった。
「なんだ?」
「いま仰言いましたのは、どういう意味あいでございますか、うかがわせて下さいまし」
「他人に慈悲をほどこせるような豊かな相を持ち合せて居らぬのだ、お主は――」
浪人者は、冷然と云ってのけた。

二

小半刻のち、団十郎は、浪人者をともなって、深川木場の別宅に戻って来ていた。
編笠をはずした浪人者の面貌は、団十郎と対蹠的に、ひどく醜かった。
幼時に疱瘡をわずらったのであろう。全面があばたで、眉毛がなく、化物に近かった。のみならず、窪んだ眼窩に底光る眼眸が無気味な鋭さであった。
迎えた老婢は、一瞥して、思わず小さな悲鳴を発したくらいであった。
しかし、団十郎は、鄭重にみちびき入れて、平常は人を入れぬ、役の工夫のために設けた座敷に、浪人者を据えた。

「あらためて、おうかがいいたしとう存じます。てまえの人相に、貴方様は、貧しいものをごらんなさいましたか？」
団十郎は、真剣な面持で、訊ねた。
「それがしは、人相に就いて、学んだことはない、したがって、お主の人相のどこがいかぬ、などとは指摘することはできぬ。……ただ、直感で、申したまでだ。これは、それがしのひがみかも知れぬな」
そうこたえて、浪人者は、笑った。
「いえ――」
団十郎は、かぶりを振った。
「実は、てまえ自身、鏡の中のおのが貌をのぞいて、ぞっとすることがあるのでございます。……なんという幸せの薄い、暗い凶相であろうと――」
すべての人が羨望と憧憬で眺めてくれるおのが面貌が、堪えがたい凶相であることに、団十郎は、二十歳前から、気がついていたのである。鏡の中をのぞいているうちに、まるで別の人間の貌が、うつっているような戦慄をおぼえ、思わず、鏡をつかんで、たたきつけたこともしばしばであった。
もともと、疳性で、家に在る時など、なにか気に食わぬことがあると、手あたり次第、物をつかんで、庭へ投げる狂暴な振舞いをみせた。贔屓から贈られた数百両もする高麗の焼物を、いきなり、庭の根府川石へたたきつけて、みじんに砕いたこともある。
ただ、おのが面貌が、凶相であることに気づいていたのは、自身一人だけで、誰からも指摘されたことはなかった。

今夜、はじめて、見知らぬ浪人者から、云われたのである。
「幸か不幸か、役者と申すものは、素顔でいる時はすくなく、一日の大半は、塗りつぶして別の顔になって居ります。別の顔になっていると、この身が背負うているさまざまの因果を忘れていることができるのでございます。おかげで、どうやら、今日まですごして参りましたが、この凶相を持っている限り、いずれは、惨めな最期を遂げるような気がいたします。
貴方様が、どうして、てまえの凶相を、直感なさいましたか――その直感の力をやしなわれたのは、何に依ってでございましょうか、うかがわせて下さいまし」
団十郎の思いつめた視線を受けて、浪人者は、しばらく、無言でいたが、やおら、脇差の柄に、右手をかけると、
「えいっ！」
懸声を発した。
この懸声は、団十郎の臓腑に電流のような衝撃を与えた。
一閃の白光が、団十郎の眸子を掠めたばかりで、はっとなった時には、もう、白刃は鞘におさまっていた。
そのまま、浪人者は、湯呑み茶碗を把って、ゆっくりと喫した。
団十郎も、衝撃の強さで、のどのかわきをおぼえて、自分の湯呑み茶碗を把ろうとした。
とたん、茶碗は、ま二つに割れて、番茶は畳に撒かれた。
茫然となった団十郎に、浪人者は、微笑を投げた。
「それがしは、備中の郷士の倅で、物心ついた頃から、木太刀をふりまわして参った。……新免武十

郎と申す。わが祖先に、宮本武蔵がいる、とつたえられ、兵法きちがいの祖父によって育てられ、なにがなんでも、宮本武蔵をしのぐ兵法者になれと、云いきかされるままに、修業をつづけた挙句、三十六歳の今日まで、三十一度び試合をして、十七人の兵法者を、あの世に送り申した。……あれは、幾度目の試合であったか、その対手の道場で、木太刀を把って、対峙した時、対手の顔が、すでに死相を呈しているのを、直感いたした。対手は、まことに立派な相貌をそなえ、闘志をみなぎらせ、一撃でそれがしを、床に匐わせてみせる、と満々たる自信のほどをみせて居り申したが、それがしの方は、まぎれもなく、その顔が死相を呈しているのを、直感いたした。……床に匐ったのは、対手の方であり、それがしは、なんとも名状しがたい暗い気分で、その道場を立ち去り申したが……」

爾来、新免武十郎は、道場内で、あるいは、野原や空地で、決闘するたびに、対手を死に至らしめる場合は、必ず、その直感を湧かせた。

そのたびに、暗い気分に滅入って、新免武十郎は、だんだん、おのれの迅業に嫌悪をおぼえるようになった。

道場破りや、用心棒や、やとわれ刺客で、その日をすごすことよりも、いっそ富有の人間に合力する恥をえらんだ方が気楽だ、と考えて、今宵はじめて、根岸の里へおもむいて、炉びらき帰りの駕籠を待ちかまえたのであった。

三

「わかりました」

団十郎は、ふかく頷いた。

「新免様、これも、なにかの因縁でございましょう。あらためて、てまえから、お願いがございます」

「なんであろうか？」

「てまえの凶相を、貴方様の剣で、斬って下さるわけには参りますまいか？」

「斬れ、とは？」

「てまえが、そこで、踊ります」

団十郎は、床の間の代りに設けられた舞台を、指した。

「てまえの踊りに、隙をごらんになったならば、斬って下さいまし。もとより、生命は惜しゅうございますゆえ、てまえの額に、傷をつけるにとどめて頂きとう存じますが、いかがでございましょうか？」

「心得た」

新免武十郎は、承知した。

団十郎は、羽織を脱ぎすてると、舞台に上った。

団十郎が踊りはじめたのは、歌舞伎十八番「景清」の牢破りのくだりであった。

新免武十郎は、舞台から一間ばかりはなれた座で、じっとその踊りを凝視しはじめた。

八代目団十郎は、きわめて不幸な星の下に生れた役者であった。

七代目団十郎の長男に生れ、幼名新之助といった。

母親は、市村座の芝居茶屋「菊屋」の娘であった。
五歳の年に、十一月の顔見世で、海老蔵を名のり、五代目松本幸四郎のふところに抱かれて、中村座の初舞台をつとめた。
初役は、七歳で、河原崎座の顔見世で、楠多門丸をつとめた。恰度その月は、父の七代目が上坂中であったので、五代目岩井半四郎が、代って、口上を述べてくれた。
八代目団十郎を襲名したのは、十歳の年の顔見世で、十六歳ではすでに座頭となっていた。
すべて、親の七光であった。
七代目団十郎は、一代の豪驕をほしいままにして、全盛ならぶ者のない役者であった。その長男に生れたのであるから、少年時代は、まことに順境であった、といえる。
しかし、その幸福は、十九歳までであった。
父親の七代目が、あまりの驕奢ゆえに、公儀に睨まれて、追放処分を受けたのである。
七代目は、太閤秀吉の栄華を理想とするまでに思い上った役者であった。寿海と号したが、それは、秀吉の印章に「寿比南山福如東海」とあったのから、とったのである。
いま、八代目が住むこの深川木場の別宅は、きわめて地味な、つつましい構えであるが、七代目が全盛を誇っていた頃は、大名屋敷にも比肩する規模の建物、庭があった。
水野忠邦の天保改革によって禁じられていた造りを、七代目は、平然としておかしたのである。長押造りに塗框、赤銅七子の釘隠し、庭には御影の石燈籠のほか、日本全土から奇岩珍石を集めたし、また、不動堂を建てて、総金泥の格天井をあげ、伽羅の像を安置した。その結構は、視る者の目をみはらさせた。

性格は驕慢であり、極度の色好みで、いくたびか妻をとりかえ、常時、妾を三四人置いて、本妻・妾につぎつぎと、子供を産ませていた。
御奉行所では、役者のぶんざいであまりにも目にあまる振舞である、と睨み、処分方の時機をうかがっていた。
七代目の人気があまりにも高いので、処分決定までには、十年あまりかかった。
七代目自身は、江戸はおろか日本全土の人気者である自分に対して、よもや、公儀が手を下しはすまい、とたかをくくっていたのであった。

四

七代目団十郎が、南町奉行鳥居甲斐守の役宅へ呼び出されて、追放処分を受けたのは、天保十三年三月の、河原崎座の興行最中であった。
この月、七代目は、一番目の「岩藤浪白石」に、宇治常悦と岩藤と大黒屋惣六、中幕の歌舞伎十八番「景清」では、その景清をつとめ、祖父白猿（五代目団十郎）写しで、大変な好評を博した。
突如として、南町奉行の役宅へ呼び出された七代目は、それでもまだ、自分がお咎めを蒙るなどということは、夢にも考えていなかった。
鳥居甲斐守から、じきじきに、
「おふれにそむき、奢侈僭上の行い多く、さらにまた、舞台にて、革製の本鎧、鉄づくりの武具を用いたる廉により、手錠の上、家主に預ける。吟味の上、罪状あきらかとなり次第、追って沙汰いたす

であろう」
と、宣告されて、顔面蒼白となった。
それから、一月後に、本邸別荘とも取りこわされ、贅をきわめた物品はことごとく没収の上、七代目は、江戸十里四方追放の処分を受けたのであった。
その時、七代目は五十二歳。息子の八代目は、十九歳であった。
七代目は、やむなく、江戸を立ち退いて、元祖団十郎以来縁故のふかい下総成田山新勝寺に身を寄せて、その名も成田屋七左衛門と改めて、舞台から遠ざかった。
若い八代目団十郎の苦労は、その時から、はじまったのである。
尤も、八代目団十郎の、舞台の上での苦労は、十六歳で座頭になった時から、はじまっていた。
十六歳で座頭になったのは、もとより市川流宗家の嫡男であったおかげであるが、舞台で芸をみせる役者である以上、実力がともなわなければならなかった。
いかに、市川流宗家を継ぎ、団十郎を名のっても、大根役者であっては、意味をなさぬ。たちまち、影はうすいものとなる。
といっても、わずか十六歳では、まだ芸が身についている道理がない。
したがって、十六歳の座頭は、先輩であり実力者の五代目沢村宗十郎や、二代目中村富十郎から、
――小僧めが！
と、小莫迦にされていた。
座頭になったその年の暮のことであった。
大晦日になると、一座の役者一同は、うちつれて、座頭の家を訪れて、初芝居の祝をのべ、また、

元日にも、朝はやばやと、年始の礼にやって来て、それから楽屋入りをするのが、ならわしになっていた。
しかし、その大晦日に、団十郎の家に、一人だけ、訪れぬ役者がいた。沢村宗十郎であった。
太夫元や手代が、心配して、同じ町内――猿若町一丁目の宗十郎の家へ、使いをやってみると、当人は、酒をくらって、酔いつぶれて寐てしまっている、という返辞であった。
元日になっても、宗十郎は、団十郎の家へ、挨拶には来なかった。
すでに、市村座に於ては、舞台に「式三番叟」の用意も出来ていた。
しかし、団十郎は、一人宗十郎が挨拶に来ないので、家を出るわけにいかなかった。家を出たあとで、宗十郎が挨拶に来たならば、座頭として先輩の実力者をはずかしめることになるからであった。
元旦の舞台は、座頭である団十郎が、若水をわかした楽屋風呂で、塩でからだをきよめた上で、式三番叟を踏み、その踏む音に合わせて、三階で、祝酒の盃をあげるならわしになっていた。
このならわしは、毎年、決して破られることはなかった。慣習というものを尊ぶ歌舞伎の世界であるだけに、絶対に守られるものであった。
しかし、宗十郎が自家から腰を上げぬ限り、団十郎も家を出られず、時刻はいたずらに移った。
座元では、気が気ではなかった。
ついに、太夫元が一案を思いついた。すなわち、宗十郎も団十郎も、同時に家を出ることにする。
そして、双方が歩み寄って、往還上で挨拶する。こうすれば、いずれの顔も立つ、という次第であった。
この案に、宗十郎も、ようやく、腰を上げ、団十郎も合点した。

猿若町一丁目の角で、宗十郎と団十郎は、顔を合せた。
団十郎の方から、いんぎんに、
「小父さん、おめでとう」
と、挨拶すると、宗十郎は、酔眼を据えて、
「ああ――成田屋小僧かい」
と、木で鼻をくくったような応待をしたことであった。
十六歳の団十郎に対して、宗十郎は三十七歳の役者盛りであった。地位は書出しであったが、芸も人気も、十六歳の小僧などとは比較にもならぬ役者だったのである。
宗十郎は、三階へ上ると、また、ごねた。
席順は、座頭、書出しと、きまっているにもかかわらず、
「この紀国屋は、乳くせえ成田屋の下に坐る役者じゃねえよ」
と、座蒲団を蹴とばした。
さらにまた――。
団十郎の口上になるや、宗十郎は、
「なんでえ！　あのかたちは、なっちゃいねえぞ。阿呆らしくって見ちゃいられねえや」
と、うしろから、きこえよがしに、罵ったことだった。
団十郎は、その元日の夜、くやしさに、ねむれなかったことを、昨日のことのように、思いうかべることができる。

五

しかし、芸だけがものを云う実力の世界であり、未熟者が実力者に軽蔑されたのは、やむを得ないことであったので、団十郎は、歯を食いしばって、先輩たちの冷酷な仕打ちに堪えて、座頭の地位を守って来た。
父七代目の江戸追放は、さらに、その上に、団十郎の肩へ、父がのこした大家族と、莫大な負債をのしかからせたのであった。
さらに――。
水野忠邦の天保改革によって、芝居小屋すべてが猿若町へ引き移らされることになり、その苦労も、座頭が背負わなければならなかった。
十九歳から十余年間、八代目団十郎は、人にも語れぬ、しばしば死を想うほど辛い歳月をすごして来たのであった。
尤も、その人気は、父七代目の全盛時代をもしのぐほどになっていた。
父が追放された翌年、「和藤内」と「鳴神」で、にわかに人気を呼び、さらに次の年の「助六」の初役で大当りをとって、人気を爆発させて以来、他の実力者たちを圧しつづけて、いまや、日本随一といってもよい絶頂期を迎えていたのである。
にも拘らず――。
団十郎個人のひそかな憂悶は、ふかまりこそすれ、決して薄れはしなかったのである。

楽屋で、いざその役の化粧にとりかかろうとして、鏡に素顔を映した瞬間、思わず刷毛をとりおとしそうになるほど、陰惨な凶相を見出すことが、しばしばであった。

いま――。

自宅にともなった見知らぬ浪人者に、この凶相を斬って欲しい、とたのんでおいて、稽古舞台に立った団十郎が、本舞台で踊るよりも、真剣になったのは、無理からぬことといえた。

新免武十郎は、端座して、双眸をほそめ乍ら「景清」を演ずる団十郎を、じっと見まもっていた。

牢破りのくだりに及んで、一瞬、武十郎の双眸が、かっとひらかれた。

左手は、脇にひき寄せた差料をつかんでいた。

団十郎は、景清そのものになって、武十郎に目もくれずに、演じつづける。

武十郎は、しかし、ついに、白刃を抜かなかった。

演じおわって、舞台を降りて来た団十郎は、武十郎の前に正座すると、

「どうして、斬って下さいませんでしたか？」

と、訊ねた。

「隙がなかった」

武十郎は、こたえた。

「わたくしは、多少の人気こそあれ、いまだ名人などと云われたことはありませぬ。景清に隙がなかったはずはございますまい。自身で演じ乍ら、父寿海に遠く及ばぬのに、歯がゆい思いをいたして居ります」

「いや――」

武十郎は、かぶりを振った。

「お主の芸が見事だとほめて居るのではない。……ただ、お主は、舞台に立っている限り、景清になりきって居るのだ。市川団十郎の顔は、たとえ素顔であっても、そこには、なかった。したがって、凶相は消えて居った。それがしが、刀を抜いて斬りつける余地はなかった」

そう云われて、団十郎は、俯向いた。

武十郎は、おのれにもどった団十郎のその顔に、名状しがたい暗い翳が、濃く刷かれるのを眺めた。

六

沈黙があった。

団十郎は、新免武十郎が前に在ることも忘れたような放心状態に陥ちていた。

「成田屋――」

武十郎に、呼ばれて、団十郎は、われにかえって、顔を擡げた。

「お主は、刃引きの剣を、舞台で使ったことはあるかな？」

「いえ、いまだ一度も、使っては居りませぬが……」

「それに、役者が、剣術を習ったことはあるまい」

「ございませぬ」

「しかし、踊の稽古には、血のにじむ思いをして、身につけて来たであろう」

「それは、当然のつとめでありますゆえ――」
「真剣を持って、それがしと立合ってみる気はないか？」
武十郎は、唐突な提案をした。
団十郎は、ちょっと考えていたが、
「それならば、てまえの凶相が斬れる、と申されますか？」
「あるいは――」
「かしこまりました。立合わせて頂きます」
場所は、広い庭がえらばれた。
父七代目が集めた石燈籠や珍石奇岩は、ことごとく没収され、さむざむとした空地と化していた。
夜がしらじらと明けた頃あい――。
団十郎は、贔屓から、贈られた守り刀の虎徹を携えて、足袋跣で、庭へ降り立った。
黒羽二重の紋服に、襷をあやどって、袴のもも立ちをとったその姿は、役者あたまでなければ、旗本も布衣の大身と見ることもできた。
武十郎は、差料を携げて、その前に立ったが、
「さきに、抜いて、構えてもらおう」
と、促した。
「では、おさきに――」
団十郎は、一礼すると、虎徹の鞘をはらった。
もとより、ただの一度も、剣の修業などしたことはないので、構えはこうか、と中段に、白刃をさ

しのべたばかりである。
武十郎は、その構えを、じっと、見据えた。
それが、みじんの隙もないものであるのをみとめて、
――流石は！
と、武十郎は、頷いた。
物心つかぬうちから、舞台に上って、衆目にさらされて、おのが五体を動かしているうちに、しぜんに、隙のない構えを身にそなえたのである。
「暫」にしても「助六」にしても、「鳴神」にしても、一瞬の隙をみせてはならない所作を必要とする十八番である。さらに、団十郎は、父七代目から、写実芸を学んでいた。例えば、七代目は、名作者鶴屋南北の出現によって、「生世話もの」という新領域をひろげたが、「東海道四谷怪談」の伊右衛門が、その浪宅で幽霊に襲われて、刀をふるう所作に、見事な写実芸を発揮し、それを八代目につたえている。
生れてはじめて真剣を構えた団十郎が、そこいらの町人が刀をつかんだのとは、自らちがう、剣気をみなぎらせた姿を示したとしても、べつに、ふしぎではなかった。
武十郎は、しばらく、その構えを、凝視しつづけた。
団十郎は、絵に入ったように不動を保ちつづけた。流石は、舞台できたえただけあって、微動もせぬ、ということは、べつに、なんでもなかったのである。
武十郎は、やおら、差料を、抜いた。
「参る！」

ひくく、鋭く、一語を吐くと、ゆっくりと、上段にふりかぶった。
団十郎は、まばたきもしなかった。
武十郎の方も、それなり、動かなくなった。
朝陽がさしそめるまでの一刻ちかく、双方は、微動もしなかった。
と――突如。
「えいっ！」
武十郎の口から、凄じい懸声が噴いて出た。
団十郎は、おのれ自身、どうやって、対手の白刃を、虎徹で受けとめたか、おぼえがなかった。
はっと、気づいた時には、武十郎の斬り込んだ剣を、鍔もとで、ぴたりと受けとめていた。
武十郎は、すうっと、二歩退った。
「斬れぬ」
武十郎は、微笑して、云った。
「お主は、一流剣客の業もそなえて居る」

七

三年の歳月が経った。
八代目市川団十郎の人気は、いまや、異常なものがあった。文字通り前代未聞の人気であった。
役者の人気は、婦女子によってつくられることは、云うを俟たぬが、八代目団十郎によって、その

人気が、婦女子を狂わせるまで、爆発するものであることを、実証した。
その芸の力では、むしろ父の七代目はじめ、代々の団十郎の方が、まさっていたかも知れない。
名優であっても、人気のわかぬ役者もいる。
人気というものは、さまざまの条件が、期せずしてかさなって、つくられるもののようである。
天保改革という、庶民の生活全般にわたって、息苦しいまでに節約を強いられた時世であった。
芝居見物を唯一の愉しみとして生きている女たちが、その息苦しさを忘れるために、贔屓役者を偶像化するようになるのは、当然であった。
女たちの偶像化は、八代目団十郎に集中した。
美貌で、若く、独身で、しかも、女色の噂をたてぬことは、団十郎を偶像化するために、完全な条件といえた。
年老いた下婢だけを置いた深川木場の別宅に、ひっそりととじこもって、いかなる贔屓の招待にも応ぜず、まして、自ら足をはこんで遊里で興ずるなどということは一切しない、ということは、まことに、女たちにとって神秘な存在とみなされた。
役者は河原乞食であり、贔屓から呼ばれたならば、どんな場所にもお供をし、もし対手が皺だらけの婆さんでも、のぞまれれば枕を交すし、また、その家庭に於ては、七代目のごとく、妻妾を同居させて、いささかも世間をはばからぬ。そういう常識が、あった。
八代目が、はじめて、その常識を破ったのである。
独身を押し通し、遊興の場所へただの一度も顔を出さぬ、というくらしは、役者としてはむしろ異常といえた。

男は十五歳になれば、必ず目上の者に、女郎買いにつれて行かれ、また妾をたくわえるのは男の甲斐性といわれた江戸時代であった。

まして、役者ならば、もとめずして、女はむこうから寄って来るし、さまざまの女と浮名を流すことによって、舞台の姿に艶を出せる、と世間から許された立場にいたのである。

にも拘らず、八代目団十郎が、頑として、孤独な生活を守り通していることは、女たちの胸に、なんとも云おうようのない感動を与えたのであった。

八代目団十郎は、次第に、美化され、理想化され、偶像化され、神秘化され、その人気は、女たちの熱狂で盛りあがったのである。

女たちにとって、団十郎が、舞台に現われるだけで、満足であった。どんな芸をみせようと、そんなことは、どうでもよかった。

嘉永六年三月、中村座に於て、二番狂言「与話情浮名横櫛」で、切られ与三郎を演じ、大当りをとった頃には、八代目が吐きすてた痰を「団様御痰」と記して、錦の守り袋に入れて、肌身につける娘まで現われていた。

八代目団十郎が、後世にのこる名演技は、まさしく、この切られ与三郎であったが、しかし、この中村座の芝居は、甚だ不入りであった。

というのは、「与話情浮名横櫛」とともに、「鏡山」が上演され、団十郎が、敵役の岩藤を演じていたためであった。

お座敷女中や町方の娘たちにとって、理想化し神秘化し、おのが人生の上にかがやく太陽であり、共通の恋人である団十郎が、憎らしい敵役になって最後に殺される、というだけで、悲嘆し絶望して、

見物する気持を失ったのである。

八代目団十郎は、人気というものを、はじめて、私生活の条件によって、信仰に近いものにまであおった役者といえた。

皮肉なことに――。

その人気をあおった私生活は、逆に、暗い陰惨なものであった。

八

深川木場の別宅には、まつという老婢が一人いるだけであった。

もとより、朝から夕まで、ひと目だけでも、団十郎を見ようとする娘たちが、おもてをうろついていたが、深川の岡っ引に、月ぎめいくらで見まわりをたのんでいたので、家の中まで押し入って来る者は、いなかった。

猿若町の本宅には、実母や弟妹、父の妾やその子たち、そして弟子とか番頭手代など、およそ二十余人が、いた。団十郎は、二年あまり前から、全く、本宅へ帰らなくなっていた。

しかし、それらの大家族や厄介人を養うことからは、まぬがれることはできなかった。いや、父がのこした借財、座頭としての出費など、小屋からもらう給金は、その五分の一にも足りず、団十郎は、毎月、十数枚の借用証文を書きかえていた。

「今日こそは、埒を明けてもらいたい」

と云って、楽屋に居坐る債鬼が、毎日、数人いた。

流石に、債鬼たちも、芸の工夫の場所である別宅にまでは、押しかけて来ない人情を持っていた。
別宅に戻ると、団十郎は、全くの孤独の世界にとじこもった。
灯もつけぬ暗闇の稽古舞台で、団十郎が、稽古をしているのを知っているのは、まつだけであった。
最初、団十郎がいるにも拘らず、その座敷が、暗闇であるのをいぶかったまつが、おそるおそる覗いて、
「どうして、あかりをつけなさいませぬ？」
と、訊ねると、
「めくらの方が、余念が去ってよいのだ」
という返辞がなされた。
爾来、まつは、団十郎が、暗闇の中にいることを、芸の工夫のためと思って、そのままにしておいたのである。
その夜も――。
団十郎は、一刻近くも、暗闇の稽古舞台の上にいた。
まつが、ふと思い出して、顔をのぞけて、
「旦那様、今日の午すぎに、あのあばたのご浪人がみえられました」
と、告げた。
舞台に仏像のように正座していた団十郎は、
「おお、そうか！」
と、声をあげた。

「新免様が、おいで下さったのか！」
三年前、おのが顔を斬って欲しい、と依頼して、それをはたしてもらえずに、別れた新免武十郎という浪人者に、別れぎわに、是非もう一度、お目にかかりたい、とたのんでおいた団十郎であった。
しかし、ついに今日まで、杳として音沙汰がなかったのである。
「なんと仰言っていた？」
「はい。明日の舞台を拝見する、と仰言っておいででございました」
「それだけか？」
「はい」
団十郎は、首をかしげた。
――どういう意味であろう？　ただ見物して下さるだけで、わざわざ、それを申し越される筈もないが……？
その時刻――。
新免武十郎は、浅草金竜山浅草寺内の新門辰五郎と対座していた。
新門辰五郎は、町火消十番組のかしらで、鳶仕事師の親分であった。その乾分は千人といわれていた。
江戸の町火消は、一番組から十番組まであったが、四番組と七番組が欠けていた。江戸っ子は、シをヒと訛る。したがって、四と七は、ヒと読んで、火に通じるため、これをきらって、除いたのである。この番組を、「い」から「を」までの組に分けて組織していた。

新門辰五郎が受け持つ十番組は、「と組」「ち組」「り組」「ぬ組」「る組」「を組」で、火消地域は、浅草黒舟町から、外寺町、新鳥越、三谷、今戸橋、下谷坂本、金杉、三の輪であった。鳶の者は合計七百三十一人。これに、人足を加えれば、たしかに、千人を越えていた。

新免武十郎は、曾て数年前、新門辰五郎の用心棒を、つとめたことがあった。

鳶人足は、博徒とはちがうが、やはり、博奕好きが多く、そのために、博奕の金が欲しさに、かたぎに対して、せびることもしばしばあった。殊に、浅草奥山を地盤とする十番組の鳶人足は、辰五郎が、諸国から流れ込んで来た凶状持ちやら浮浪の徒を、遠慮なく加えたので、凶暴な手輩が多かった。

他の地域の頭取は、その町その町の富有な町人から金をもらって、鳶人足をやしない、いわば、旦那衆のお抱えとなっていた。しかし、大金持の一人もいない、下層民の集まった浅草では、辰五郎は、そのような旦那衆を上に仰ぐ利も不利も持たなかった。

その代り、別の収入で、一家をささえていた。奥山の香具師、大道商人から、毎日の売上げの幾分かを、取っていた。また、巾着切とか博奕打ちとか女衒などから、辰五郎に睨まれることをおそれて、目こぼし料がとどけられていた。

一人一人がとどける金は零細であったが、集めれば多額になったのである。

その代り、辰五郎は、おのが睨みを、絶対のものにしなければならなかった。そのために、滅法に強い用心棒をかかえる必要があった。

辰五郎が、えらんだ用心棒の中で、最も強く、信頼の置けたのが、新免武十郎であった。しかし、武十郎は、半年も経たぬうちに、何処かに姿を消し、辰五郎を、残念がらせたことであった。

九

飄然として、姿を現わした武十郎を見て、辰五郎は、大悦びした。

「また、先生は、あっしの家にいて下さるのですかい」

辰五郎は、声をはずませて、云った。

辰五郎は、武十郎が姿を消した翌年、町奉行所から、十番組頭取を召し上げられて、佃島に送られ囚徒として一年あまりすごしていた。

十番組が、大名火消の柳川藩の火消と大喧嘩をやり、柳川火消十数人を死傷させた罪を問われたのであった。

当時、火消は、幕府直属の旗本が責任を持つ定火消と、大名火消と、そして町火消によって、構成されていた。

このうち、定火消が当然最も偉張って居り、それに大名火消が次ぎ、火事場に於ては、常に町火消を圧倒していた。

この定火消・大名火消に、まっ向から対抗して、一歩もひけをとらなかったのが、町火消の中でも最も人数のすくない十番組であった。

辰五郎は、かねて、定火消・大名火消が、町火消をさげすんでいるのが、癪にさわっていたので、折あらば目にものをみせてくれるほぞをかためていたのである。

辰五郎は、柳川火消を、滅茶滅茶にたたきのめした。裁きを受けることは、覚悟の上であった。

辰五郎は、裁きの結果、江戸十里四方お構い――すなわち、追放になった。しかし、辰五郎の名は、一挙にとどろいた。
辰五郎は、昼間は、朱引地外(市外)にいたが、日が暮れると、本宅かまたは妾宅へもどって、乾分たちを指図し、元通りの地盤をつかんでいた。
これを訴える者があって、辰五郎は、再び捕えられて、佃島へ送られたのであった。
しかし、弘化三年一月の本郷円山火事で、火が下町から佃島まで及ぶや、辰五郎は、囚人を指揮して、大いに働いた。その功で、赦免され、再び、十番組の頭取の地位にもどった。
辰五郎は、おかげで、いまや、江戸随一の頭取になっていた。
新免武十郎が用心棒として戻ってくれれば、まさに鬼に金棒であった。
喜色を正直に面にあふらせる辰五郎に対して、武十郎の醜怪な顔は、無表情であった。
「いや、用心棒になりに、舞い戻って来たわけではない」
武十郎は、こたえた。
「それじゃ、なんのご用でござんすかい?」
「合力に参った」
「合力? いかほど欲しいと申されるので?」
「三百両、欲しい」
「三百両?!」
さすがの辰五郎も、あきれた。
「先生、合力となりゃ、せいぜい二分どまりですぜ。ふっかけて一両でさ。……三百両とは、おそれ

入りやしたが、いったい、なににお使いなさるので?」
辰五郎は、眉宇をひそめて、訊ねた。
「人助けをする」
「人助けをねえ?」
辰五郎は、武十郎の人柄を知っていた。嘘いつわりなど、絶対に口にせぬ人物であった。
「三百両といえば、この辰五郎にとっても、大金ですぜ。ただ、貸せと云われても……」
「ただ、貸してくれとは云わぬ」
「なにかを、抵当に置くと云いなさるので――?」
「そうだ」
武十郎は、にやりとした。
「お見受けしたところ、抵当に置くようなものを、お持ちじゃござんせんがね」
「八代目団十郎の一命を、抵当にする」
「なんですって?」
辰五郎は、あまりの唐突な言葉に、あっけにとられた。
「成田屋のいのちを抵当に――? それは、いってえ、どういうことなんで?」
「団十郎を、明日より、しばらく、舞台に立てぬように、重病人にしてみせる、ということだ」
武十郎は、平然として、こたえた。

十

その翌日——。
新免武十郎が、新門辰五郎に予言したことが、市村座で起った。
「鳴神」を熱演している最中、団十郎が、舞台に倒れたのであった。
見物していた女客の中には、衝撃で失神する者もあらわれた。
団十郎は、倒れた時、鳴神上人の衣裳の端で、咽喉をかくすようにして、馳せ寄った人々に、
「このまま……このままで、わたしを、木場へはこべ」
と、命じておいて、目蓋を閉じた。
見物客の中に、医師がいて、舞台へひきあげられて来たが、診ようとすると、団十郎は、すげなく、
「大事ありませぬ」
と、拒絶した。
団十郎自身が、両手で、咽喉をおさえて、頑として、見せぬのであったから、医師もやむを得ず、ひきさがらざるを得なかった。
数人が、そっとかかえあげた時、血汐が、ぼたぼたと、したたった。
眺めていた医師が、思わず、
「動かしてはいかぬ。手当をして、楽屋に寐かせよう」
と、云った。

しかし、団十郎は、「運べ！」と命じた。
駕籠にのせられると、団十郎は、人事不省に陥ちた。
木場の別宅へ、運び込まれた時には、気丈夫にも、意識をよみがえらせていて、駕籠をそのまま、座敷へかつぎ込むように、命じた。
そして、つき添うて来た十数人の者たちに、立去って欲しい、と要求した。
いったん云い出したら、テコでも肯かぬ気象を知っていたので、一同は、近所の料亭を借りて、経過を待つことにした。
団十郎は、老婢のまつ一人になると、はじめて、鳴神上人の衣裳でおさえていた咽喉から、両手をはずした。
まつは、一瞥して、悲鳴をあげた。
その咽喉には、小柄が突き刺さっていたのである。
「旦那様！　ど、どうして、お、お医者を……？」
「うろたえるな！」
団十郎は、顔面に、ふしぎに静かな表情をたたえていた。
疼痛さえも感じないようであった。
「この小柄を、抜いて下さる御仁は、一人しか、いないのだ」
「は、はい——」
「まつ——」
「は、はい」

「鏡を、持って来てくれ」
まつは、鏡をどうするのかわからぬままに、持って来た。
団十郎は、微かに顫える両手で、鏡を受けとると、自分の面相を、映した。
鳴神上人の化粧をしているが、まぎれもなく、おのが貌に還っていた。
しかし、そのあくどい顔ごしらえのために、凶相と化しているかどうか、判じがたかった。
「まつ、化粧を落してくれ」
「そ、それより、手当を——」
「かまわぬ。化粧を落すのが、先じゃ」
まつが、おろおろし乍ら、鳴神上人の面を、拭き消している時であった。
音もなく、姿を現わした者が、すこしはなれた場所に、坐った。
新免武十郎であった。
団十郎は、ちらと、武十郎を視たが、何も云わずに、まつが白粉を拭きとって、現われ出た素顔を、鏡にうつした。
凶相は、消えていた。
まつが、武十郎に気づいて、息をのむと、団十郎は、退るように命じた。
武十郎は、そばへ寄ると、懐中から、傷の手当の道具をとり出した。団十郎が、待っているのを、ちゃんと予期していたようであった。

十一

武十郎は、咽喉に突き刺った小柄を、真綿で包むようにしてから、すばやく抜きとり、焼酎で傷口を消毒し、薬を塗って、晒を巻きつけた。
団十郎は、手当がおわるのを待ってから、
「てまえの鳴神に、隙がございましたか？」
と、天井を仰ぎ乍ら、訊ねた。
「わしは、初日に観て、お主が、心気をみだしているのをみとめた。そこで、お主の生命を奪わぬように、倒せるかも知れぬ、という自信を抱いた。冒険であった。一分の狂いがあれば、小柄は、のどのまん中をつらぬいて、生命を奪うことになる。……いちかばちか、やってみた」
新免武十郎は、四間余もはなれた場所から、小柄を投げて、団十郎の咽喉を刺したのであった。
その凶相を消すためには、顔面を傷つけるべきであったろうが、役者のいのちであるそれを傷つけるにしのびなかったし、団十郎がそのまま即死すれば、それまでの寿命と考える非情で、敢えて咽喉を狙ったのであった。
「このたびの鳴神は、われ乍ら不出来でございました」
団十郎は、云った。
今年になってから、団十郎は、身辺に愈々堪えがたい不快事がかさなって、さらに厭世感を増していたのである。

そのひとつは、女房役として、大坂の二代目中村富十郎が現われたことであった。
二代目中村富十郎は、舞台顔は地味であまり美しくはなかったが、しぶい芸風と初代に劣らぬ所作事の巧みで、大坂随一の立女形の名をほしいままにした役者であった。
しかし、その私生活がぜいたくすぎて、七代目団十郎と同様、大坂から追放になって、江戸へ現われたのであった。
この年、江戸へ現われた富十郎は、すでに、六十九歳の老人であった。
団十郎の女房役としては、坂東しうかという、恰度年齢からも似合いの女形がいた。
しかし、一世の名女形と称われた富十郎に、押しかけられては、拒絶はできなかった。
「忠臣蔵」でも「一の谷」でも「三十三間堂」でも、団十郎は、富十郎に附合わされて、舞台でも楽屋でも、ことごとく、小僧扱いにされていたのである。
たしかに、富十郎は、名演技をみせた。それだけに、団十郎は、小僧扱いにされても、一言も文句を云えなかった。
未曾有の人気を持ったとはいえ、団十郎は、まだ名優と称される役者ではなかった。切られの与三郎で、絶品とほめそやされただけで、師直でも由良之助でも助六でも源太でも熊谷直実でも、名演技をみせるわけにはいかなかった。
団十郎は、まだ三十になっていなかったのである。
団十郎は、富十郎の侮蔑に、堪えるよりほかはなかった。
侮蔑され、その口惜しさを怺えて演ずる「鳴神」が、みだれていない道理がなかった。
「新免様、てまえは、今日、いっそ死ねばよかった、と考えました」

団十郎は、云った。
「しかし、凶相は消えて居る」
「このまま、凶相が二度と現われねば有難いのでございますが……」
「そう祈る」
「おそらく、また、てまえは、凶相を、鏡で見ると存じます」
「そうであれば、今日、それがしが、お主を傷つけたことは、徒労となる」
「いえ、有難く存じて居ります。てまえは、一度死んで、蘇生する必要のあるからだなのでございます。……癒りましたならば、もうすこしは、ましな芝居をお目にかけられるかと存じます」
「期待いたす」
武十郎は、懐中から金包みをとり出すと、枕元に置いた。
「ここに、三百両ある。借金の返済にあてるがよろしかろう」
「貴方様が、どうして、こんな大金を調達なさいました？」
「はは……お主の生命を抵当にして、ある男から借りた。その男も、今日の芝居を見物して居ったはずだ」
武十郎は、立ち上った。
「百歳までの長寿を保って、名優の盛名をほしいままにされんことを、祈る。もう二度と、お主の前には、現われぬ」
そう云いのこした。
団十郎は、その翌朝から、高熱を発して、三昼夜生死のさかいをさまよった。

気の早い絵双紙屋は、辞世と追悼の句をつくって、刷物にして、売り出したくらいであった。
江戸中の神社仏閣に、治癒祈願の女たちが、列をなした。
一月後、団十郎は、起き上った。
すると、絵双紙屋は、たちまち、「市川団十郎蘇生の次第」と題し、団十郎が日頃信心する不動尊のご利益によって一命をとりとめた筋書きをつくって、売った。
団十郎自身、
「黄の泉を渡らんとせし夢さめければ」
と前書きして、
　雨露に活かへりたるふくべ哉
と、吟んだ。

十二

しかし、八代目市川団十郎の生命は、それから三年後の短さで、終った。
安政元年六月二十九日夜、団十郎は、深川木場の別宅を出て、上方へ旅立った。そして、再び、江戸へは還らなかった。
名古屋にいた父親の七代目と同座して、大坂に入った。
大坂に於ける団十郎の人気は、凄じいばかりであった。
七月二十八日、桜の宮から、船で乗り込んだが、両岸は、提灯、篝火で昼をあざむき、道頓堀筋に

は、数万の見物人が蝟集し、前代未聞の人出であった。
小屋は、中座で、狂言は「児雷也」と「切られ与三郎」であった。
初日は、八月六日であったが、団十郎が乗り込むと、大坂中は、団十郎の噂でもちきった。
団十郎は、しかし、芝居の金主である島の内御前町の植木屋久兵衛宅を旅宿にしたが、贔屓筋からの招待も一切ことわって、一室にとじこもったままであった。
八月に入って、父七代目のたっての所望で、大世という料亭へ、はじめて姿を現わしたが、ものの半刻も座に就いてはいなかった。
二日、三日の稽古を了えて、四日を休み、五日には、他の役者たちとうちつれて、年寄の宅へ、惣判に行き、帰途中座へ立寄った。そして、夜もかなり更けてから、植久へ帰った。
初日をひかえた前夜は、座頭ともなれば、いろいろのしきたりをまもらなければならなかった。しかし、団十郎は、一切を無視して、居間にとじこもって、人を寄せつけなかった。
翌朝――夜明けに、中座から手代の安吉が、やって来て、待っていたが、団十郎は、なかなか起きて来なかった。
安吉は、団十郎が、不眠症であることを知っていたので、時間ぎりぎりまで、待った。
いよいよ、ぎりぎりになったので、二階へ上って、その旨を告げた。
しかし、返辞はなかった。
安吉は、そっと、障子を開けてみた。
「あっ！」
安吉は、仰天した。

蚊帳の中で、臥せているものとばかり思っていた団十郎が、蚊帳も寝床もきれいにとりかたづけ、ひろい座敷のまん中で、鼠紋つきの帷子に、丹後縞の袴をつけて、俯伏していた。

畳には、おびただしい血汐が流れていた。

短剣で、見事に咽喉を突いて、果てていたのである。

書置は、一通ものこしていなかった。

誰も――一人として、なぜ、団十郎が自害したのか、原因の判る者はいなかった。芝居の初日は、もちろん幕があがらなかった。

遺骸は、検視の上、南の一心寺に葬られた。

篤誉浄莚実忍居士――享年三十二歳であった。

未曾有の人気を持った役者が、原因理由を明かさずに、自害して、この世を去ったのである。ありとあらゆる噂が、大坂、江戸はじめ、日本全土にみだれとんだ。

江戸の菩提所の芝常照院に、遺髪を埋めて、墓碑がたてられると、大奥はじめ大名旗本の御殿女中、町娘、芸者など、一日に数十人ずつが、参詣し、櫛、簪、箱せこ、香函などを、惜しげもなく、手向けた。寺僧は、やむなく、盗まれないように、床几を持ち出して、張番をしなければならなかった。また、戒名を記した紙片を、一枚一歩で分けたが、羽根が生えてとぶように売れた。

翌年の春には、浅草奥山で団十郎の一代を、生人形にした見世物がつくられたが、百二十日間の興行で、千五百両の利潤をあげた。

一周忌のその日、大坂南の一心寺の墓前には、五千余の参詣人があった。さまざまな手向けの品が

山と積まれて、寺僧数人が、世話をした。

参詣人の影がとだえた夜中――子刻過ぎに、ひとつの黒影が、墓地に入って来た。

新免武十郎であった。

ゆっくりと、団十郎の墓に近づいた。

花だけが、かざられ、他の供物は、とりかたづけられていた。

武十郎は、合掌もせずに、じっと、墓碑を見まもった。

「成田屋――」

ひくい声音で、呼んだ。

「とうとう、凶相には、克てなかったな。……気の毒であった。お主に、人間としての幸せは、なかったようだ。……お主が、つくった小唄に、露は尾花と寐たという。尾花は露と寐ぬという――というのがあるが、露はお主で、尾花はその凶相であったのだな。……お主が自身で咽喉を突くぐらいならば、それがしが、舞台の与三郎を、小柄で仕止めてやるのであった。そこまで、気がつかなかったことを、お詫びいたす」

そう語りかけて、ふかぶかと、頭を下げたことだった。

片耳奴

一

万治二年初秋の一日――。

旗本書院番・吉田吉太夫邸に、一人の訪問客があった。

吉田吉太夫は、駿河に二千石、秩父に千五百石の知行所を持ち、そして、別に五百石高を給せられている書院番の中でも上席である旗本であった。

御小姓番、御書院番という両番は、将軍家の身辺を守護する役で、旗本中でも上流である。

御小姓番は、その名称のごとく、風貌物腰ともに気品のある士がえらばれていたし、御書院番は、律義に勤める気風を持っていた。

この日、昏れがた――あるじの吉太夫が、お城下りをした頃あい、屋敷の門前に現われた男は、およそ、律義な書院番を訪れるにふさわしくなかった。

年齢は、まだ二十代なかばであろうが、蓬髪で、色あせた黒羽二重を着流して、袴もつけず、刀も

一本だけ佩び、藁草履をはいていた。どうしたのか、片目を閉じ、片耳が殺げ落ちていた。

のみならず、口をひらいた時、上歯はことごとく欠けて、満足なのは一本もないようであった。

門番が、主が帰邸したので、門扉を閉めようとすると、その男は、ことわりもせずに、のそのそと邸内へ踏み込んで来た。

「無礼者っ！　出いっ！」

長屋から、三四人血相かえて、とび出して来たが、男は、平然として、

「親爺殿に会いに来た。次郎太が参った、と取次いでくれい」

と、云った。

「親爺殿？」

「左様、吉田吉太夫は、おれの親爺だ。当邸に仕る吉郎太は、おれの兄貴。おれは次郎太、すなわち、次男。わかったか。わかったら、取次いでくれい」

そう告げておいて、男は、袂から、なにやらつかみ出して、口へほうり込むと、ぐちゃぐちゃと、ひどく下品な喰べかたをした。

みるみる、口がまっ赤になった。秋茱萸であった。

全身から臭気をはなっているむさくるしい風体の男を、門番たちは、うさんくさげにじろじろ睨みつけているだけで、その言葉を信じなかった。

次郎太と名のる男は、玄関へ向ってのそのそと歩き出そうとした。

「待て！　ここで、待て！」

門番頭が、制止しておいて、いそいで、奔った。

次郎太は、さらにまたひとつかみ、袂から、赤い実をつかみ出すと、門番の一人に、
「どうだ？」
と、すすめた。
門番が、しりごみすると、次郎太は、まっ赤になった歯欠けの口をひらいて、あははは、と笑って、それを、ほうり込んだ。
誰も、こんな息子が、主にあった、とはきいていなかった。
やがて、門番頭がもどって来たら、思いきり、手ひどく、おもてへたたき出してやろう、と考え乍ら、その前をふさいでいた。
ところが、馳せ戻って来た門番頭は、甚だ当惑した面持で、
「庭へ、ご案内つかまつる」
と、云って、仲間たちをおどろかせた。
次郎太は、千坪もあろう庭園へ出て、見まわすと、
「ひろすぎる」
と、一言吐き出した。

二

門番頭にみちびかれて、次郎太が、書院の広縁さきに至った時、腰の曲った下僕が、箒を持って、近づいて来た。

「若様――」
呼びかけられて、ふりかえった次郎太は、破顔して、
「おお、倉造か。達者でなによりだ」
と云って、歩み寄ると、肩に手を置いた。
老いた下僕は、みるみる泪ぐんだ。
「若様も、お健かで……爺は、う、うれしゅうございます」
「ははは、そう云ってくれるのは、お前だけだ」
次郎太は、秋茱萸をつかみ出すと、老僕に与えた。倉造は、それを両掌に受けて、おしいただいた。
広縁にあらわれたのは、吉太夫でも兄の吉郎太でもなく、女中であった。
「お湯殿へご案内つかまつります。こちらへ――」
「いや、このままでよい」
次郎太は、かぶりを振った。
「出府したので、ちょっと立寄ったまでだ。挨拶がすめば、すぐ辞去する」
そう云うと、さっさと、書院へ上っていた。
女中は、畳へ、虱でも落ちるのではないか、といったしかめ顔をして、いそいで、奥へ入った。
吉太夫と吉郎太が、書院へ入って来たのは、夕餉をすませてからであった。
次郎太は、待たされたので、のうのうと横臥していた。
吉太夫は、座に就くと、もそもそと正座する次郎太を、堪えがたそうに眺めて、
「十年も、消息不明のまま、いったい、何処を徘徊いたして居ったのだ！」

と、叱りつけた。
書院番は、毎年交替で、駿府に在番する。したがって、駿府にも屋敷を持っていた。
吉太夫は、駿府屋敷に、御家人の娘を妾として置いていた。次郎太は、その妾に産ませた子であった。
吉太夫は、次郎太が元服しても、江戸へつれて来ようとはしなかった。本妻に気がねもあったが、次郎太がただの息子ではなかったからである。まず、左眼が、生れながら黒瞳を持たぬ片端であった。そして、性格が不羈奔放で、物心ついた頃から手がつけられなかったことである。
次郎太は、十七歳になった春、生母が逝くや、そのまま、父の愛馬にうちまたがって、出奔してしまったのであった。
爾来、杳として消息を断っていたのである。
「父上、歩いてみると、日本は広うござる。なんとなく、歩きまわっていても、十年ぐらいの歳月は、すぐに過ぎますな」
「黙れ！　いやしくも、旗本譜代の家門に生れて、乞食同然の浮浪を為すとは、なんという見下げはてた痴れ者か！」
「一所不住は、浪人、乞食ばかりではござらぬ。悟りを求める雲水にも、数多く出会い申したが、その中には、なかなか以て、敬服すべき人物が……」
「黙れっ！　黙れっ！　家名を忘れたか、家名を！」
激昂して、立ち上ろうとする吉太夫を、吉郎太が、あわてて、とどめて、
「次郎太、なんの目的があって、出府いたした？」

と、問うた。
「ただ、なんとなく――」
「この江戸は、なんとなく、姿を現わすところではないぞ！　いやしくも上様お膝元だ。栄誉をになう御書院番の子息たる者が、この江戸で、放埒を働けば、家名のけがれになることぐらい、心得て居ろう」
「兄上。江戸には、旗本奴という無法者が、徒党を組んで、公然と乱暴を働いているとききましたが、それらは、家名をけがしては居りませんか」
「次郎太！　十年の流浪で、その方は、いったい、何を学んだのだ。品性をいやしくしただけであろう」
「品性か。品性などというものは、生れつき持ち合せては、居り申さぬ。おかげで、十年間、つつがなく、日本全土をうろつくことができ申した。盗みだけは働き申さなんだのが、いささか自慢でき申すが、そのほかは、ありとあらゆることを、やってみました。田植え、稲刈り、炭焼き、まぐろ釣りから土器焼きにいたるまで……、左様、馬に子を産ませることまでおぼえ申した。父上も兄上も、貧しい庶民が、いかに、その貧しさに堪えて、ものをつくっているか、一向にご存じござるまい」
「黙らぬか！……おのれは、そのようなくらしをつづけ乍ら、武士たるものの修業をおこたって、なんの面目があって、父や兄の前へ出て参った？」
「お待ち下され。稲刈りも土器焼きも、修業のうちと思うて、やったまでのこと。もとより、刀を振りまわすことも、やり申した。兵法試合も、幾度か、やり申した。この耳を失うたのも、そのためでござる」

「大方、賭博でもして、破落戸どもに、斬られたのであろう」
「賭博もやり申した。人間の屑どもの世界も、面白いものでござる」
次郎太は、云った。
父と兄は、あきれはてて、顔を見合せた。
「では、挨拶も済み申したので、退散つかまつる」
次郎太は、頭を下げた。
「江戸から、明日うちにも、立去れ！　よいな！」
吉太夫は、きびしく命じたが、それでも、懐中に用意した金子を、呉れることを忘れなかった。
百両あった。

三

次郎太は、庭へ降り立った。
そこにうずくまる倉造を、みとめると、次郎太は、
「爺――。おれが、十年を無駄にすごさなかった証拠を見せるか」
と、云った。
まだ書院に坐っている父と兄を意識した上での言葉だった。
「はい」
倉造は、駿府屋敷で、手のつけられぬ腕白者であった次郎太を、四歳から七歳まで、面倒をみた下

僕であった。
次郎太が、この世で慕ったのは、生母とこの倉造のただ二人であった。尤も、この二人のいましめを、素直に守った次第ではなかったが……。
「そのぐみをひとつ、月代にのせてくれい」
次郎太は、命じた。
「は、はい」
倉造は、まだ、掌に、赤い実をのせたままで、そこにうずくまっていたのである。
その一箇が、倉造の月代にのせられるや、吉太夫と吉郎太は、興味をそそられて、広縁へ出て来た。
次郎太は、六尺の距離を置いて、立った。
両手をダラリと脇へたらしたままであった。
「おっ！」
次郎太の口からほとばしった懸声は、道場できたえたそれとは、全く異質の、猛獣の唸りにも似た凄じいものだった。
抜きつけに撃った白刃は、倉造の月代に、触れて、ぴたりと停止していた。
小さな赤い実は、ま二つに截られていた。
次郎太は、三尺余の長剣を、鞘に納めると、
「倉造、百歳までも生きろ」
その言葉をのこして、ゆっくりと立去って行った。広縁上で、茫然となっている肉親には、一顧だに、くれなかった。

当時――。
江戸には、旗本奴と町奴との激しい対立があった。
旗本奴は、文治の才能ある者が権勢を張る天下泰平の時世に反抗する無法者であり、町奴は、政治上にも社会上にも最も蔑視されて来た町人が、その鬱積した不満を散ずるために押し出した代表者といえた。
戦乱の功名話が、五十年もむかしのことになれば、それを語る者自身、阿修羅の戦闘は未知のものであり、それをきく者にとって、小うるさい、退屈なものになっていた。
腰に佩びる刀は、抜く機会はなくなり、弓は袋に、鎗は鴨居にかけられっぱなしであった。
戦争と無縁になった武士は、逆に、武士道の吟味をきびしく要求され、およそ煩瑣きわまる形式にしばられた。
当然、この矛盾が、武士の世界からはみ出す無法者を生んだ、といえる。
世に謂う、かぶき者であった。
渠らは、豺狼のごとく、群をなして、町中を横行した。その風体は、きわめて奇妙なものであった。天鵞絨襟の小袖をまとい、大撫付（総髪）や立髪（長髪）で、大髭をたくわえ、三尺四五寸の長剣をたばさんでいた。その背中には、南無妙法蓮華経と大書したり、不惜身命と赤く染めた幟を、背に立てていたりした。
その大半は、中級、下級の御家人、牢人者などであった。
生命知らずを表看板にしているので、町奉行所の役人たちも、手にあまった。
かぶき者の収入は、博奕宿を営むことであった。

承応元年には、町奉行自ら指揮をとって、かぶき者の一斉逮捕にふみきった。捕えた者は、死罪、遠島、重追放の重罰を加えた。
翌年、有名な男伊達夢の市郎兵衛が、死刑になった。そのほか、てれつく喜兵衛、赤銅惣五郎、荒野小兵衛など、名だたる伊達者が捕えられ、斬罪となった。
しかし、この取締は、一時的なものにすぎなかった。
その時期がすぎると、またぞろ、かぶき者は、むくむくと鎌首をもちあげたのである。
いや、かえって、しまつにおえぬ手輩が、このかぶき者に加わったのである。すなわち、れっきとした旗本の面々であった。
御家人、小普請の微禄の連中とちがい、千石、二千石の大身が、自ら好んで、市井横行の無法者の仲間に入ったのである。

四

かぶき者が、生れたのは、慶長年間である。
慶長十四年頃、京都には、荊組、皮袴組という徒党が生れている。渠らは、対手かまわず喧嘩を売り、乱暴狼籍をほしいままにした。
その風体は、異様をきわめ、白羽二重の小袖に、朱でいちめんに、経文を記したり、三尺余の大煙管を腰にさしたり、あるいは、わざわざ傴僂や小人をえらんで家来にしてひきつれていた。これらの徒党の生れた直接の原因は、奇妙なことに、煙草の禁令であった。

煙草の流行は、慶長初年であった。幕府は、これをぜいたくとして、再三禁じた。それに対する反抗が、巨きな煙管を腰にさすという示威になって現われ、にわかに、かぶき者の頭数が増えた。

江戸の町にも、それより数年おくれて、かぶき者が現われた。

その頭分は、大鳥居逸兵衛、大風嵐之介、風吹散右衛門などという、奇妙な仮名を誇示した面々であった。

この中で最も有名なのは、大鳥居逸兵衛で、本多信勝、大久保長安の屋敷で、小者をつとめた男であった。弓、鉄砲、槍などの兵法に長じていたので、士分にとりたてられたのである。

逸兵衛には、いくつかの逸話が残っている。

慶長十七年、家康は、江戸の悪少年たちが徒党を組み、かぶき者と称しているのをきいて、これを禁じた。旗本大身の柴山某が、罪を犯した小姓を成敗したところ、その小姓の朋輩が、すぐさま、その場で、柴山を刺殺した事件が起り、調べてみると、小姓たちが徒党を組んでいることが判明した。

家康は、これをきいて、かぶき者全員の逮捕を厳命したのである。

当時、江戸の町奉行は、土屋権左衛門、米津勘兵衛であったが、協力して、まず首魁とみなす大鳥居逸兵衛を逮捕し、同類を白状させるために、さまざまの拷問をこころみた。

逆吊り、石抱かせから、尿を飲ませたり、腐った鼠を食わせる残酷な拷問を行ったため、とうとう、逸兵衛も、屈服した。

「しかたがねえ。白状してくれよう。人数が多いから、紙を百枚ばかり、帳にとじて、持って来てもらおうか」

ところが、逸兵衛の書きつらねたのは、日本国中の大名の姓名だったのである。

流石の奉行たちもあきれて、爾後は、牢に下げて、そのままにすて置いた。

逸兵衛は、牢内で、食事を奪い合う餓鬼地獄を眺めて、牢内法度をもうけ、自ら牢内支配者となった。

これが、いわゆる牢名主のはじまりである。尤も、後年のように、牢名主に、まだ特権的なものはなく、すこぶる公平なものであった。

その逸兵衛も、ついに、江戸市中ひきまわしの上、磔刑になった。その時、同時に処刑された者は、三百余の多きに及んだ。また、歴々の旗本たちの中からも、幾人か、改易や流罪になった者も出た。

しかし、かぶき者は、あとを断たなかった。

いつの間にか、男伊達と称して、その気風は、大名旗本から庶民の間にまでも、浸透していた。

男伊達の語源は、朝鮮出兵の際、名護屋に向う伊達政宗の行装が、大層華美であったので、伊達者と称されたことから、起ったという。だてとは、侠気、華美、流行の風俗を兼ね合せた意味を持った。

男伊達は、信義、教条を重んじ、仁侠のためには一命を惜しまなかった。

男伊達は、万治・寛文の頃には、六法（六方）とも呼ばれた。無法と語呂を合せたのだが、江戸に六つの男伊達の徒党が、組まれていたからである。

鶺鴒組、吉屋組、金棒組、唐犬組、笊籠組、大小神祇組の六組であった。

大小神祇組、吉屋組などは、旗本、あるいは徒士の衆が組み、唐犬組、笊籠組などは、町人が組んだ。

すなわち、旗本奴と町奴とに分れたわけである。

その生活は、博奕と喧嘩と遊興であった。

昼を夜とし、夜を昼にし、はては、冬を夏とし、夏を冬にする極端な試練をてらい、狂犬のように市中を深更うろつきまわり、泥酔しては、ところかまわず路傍に睡った。

幕府が、政策として、戦国の余風である殺伐な習俗を除いて、泰平を維持しようとすればするほど、これに反逆する武辺が現われるのは当然であり、また、武家の下に押しひしがれていた町人階級の中から、腕力好みの若者が博徒になって、放縦不羈な生活にとび込むようになったのも、無理からぬところであった。

ただ――。

渠らが、後年の破落戸とちがっていたのは、生涯を義をもって貫く廉直を忘れなかったことである。

対手が一面識もない人物であっても、言葉を厚くしてたのまれると、一命を賭してまでも引き受けた。功利の念が、露ほどもないことは、見事といえた。金銭に関する限り、これを最もいやしむべきこととしたのである。

したがって、青楼に登っても、料亭にあがっても、代金踏み倒しは、日常の行状とした。

五

片目片耳の吉田次郎太が飄然として、江戸に現われたのは、そういう時世であった。

父の屋敷を訪れてから、七日ばかり経って、次郎太の姿は、木挽町の芝居小屋のまむかいの空地に、現われた。

奇妙な大道あきないをはじめたのである。

造りさまざまの刀を、十数本も地べたへならべて、「大安売り」の木札を立て、自身はどこかの古道具屋で買ったらしい塗りのはげかかった曲彔に腰かけたのである。

町人たちは、うす気味わるそうに、横目で眺めて行き過ぎたが、やがて、旗本奴数名がのし歩いて来て、これに目をとめるや、たちまち、面上に怒気をみなぎらせた。

「武士の魂を、地べたへほうり出すとは、正気の沙汰か！」

「おのれ自身武士であり乍ら、武士をいやしめるとは、許せんぞ！」

「早々に消え失せんと、そっ首を刎ねとばすぞ！」

口々に、呶号した。

次郎太は、にやにやして、

「そういきり立つな。これらの刀は、地べたへならべるねうちしかないしろものなのだ」

と、こたえた。

しかし、眺めたところ、いずれも、立派なつくりの品ばかりで、中身もちゃんとした銘のあるもののようであった。

「理由を申せ、理由を！」

「理由か。理由は、いまに、判るはずだ」

次郎太は、のんびりとかまえている。

「いまに判るとは、なんだ？」

「待って居るがよい。……そのために、この盛り場をえらんだのだ」

「待って居れん！　理由を申せ！」

「江戸の連中は、気ぜわしいのう」
次郎太は、襟もとから片手を出して、無精髭をなでた。
その時——。
小者二人を供にして、やって来た縞天鵞絨の袖なし羽織をつけた旗本大身が、地べたにならんだ刀を一瞥するや、
「おっ！　こ、これは！」
と、驚愕の叫びをあげた。
「ははは……、現われたのう、一人」
次郎太は、笑って、一本の刀を把りあげると、その旗本へ、ぬっとさし出し、
「先夜は、失礼いたした。お預り代一両、申し受ける」
と、云った。
旗本の面上に、朱が散った。憤怒の形相に、狼狽の色を刷き乍ら、
「なにを申す！」
と、唸った。
旗本奴の一人が、その様子を、じろじろと見やって、
「ご貴殿、この刀を、こやつに、奪われたのでござるか！」
と、訊ねた。
「い、いや……」
旗本は、愈と狼狽した。

次郎太が、
「奪ったとは、人ぎきのわるい。お預りいたしたまでだ。一昨夜、丹前風呂から出て来られたところをな」
と、云った。
「貴様、これらの刀は、旗本を襲って、奪ったのだな？」
「奪ったのではない。預った、と申して居るではないか。但し、預けた、と正直に申される御仁は居らぬように思われるので、大安売りをいたすことにして居る。いずれも、千石以上の大身の差料ばかりゆえ、利刀であることは、保証いたす。貴公ら、一本ずつ、いかがだ？」
「うぬがっ！」
旗本奴の一人が、いきなり、抜きつけに、次郎太めがけて、あびせた。
次の瞬間——。
その白刃も、そして、腰の鞘も、次郎太の手に移って居り、当の旗本奴は、当て身をくらって、その場へ、崩れていた。
「また一本、ふえたのう」
次郎太は、白刃を鞘に納めると、地べたの蒐集刀に、加えた。
おそるべき迅業は、旗本奴はじめ、見物人の息をのませた。
しかし、旗本奴たちは、このまま、ひきさがったのでは、直参の面目にかかわった。
渠らは、水野十郎左衛門を頭領とする吉屋組の面々であった。
「貴様っ！　そこの祥雲寺境内へ来いっ！　果し合いをしてくれる！」

一人が喚き、他の者たちも、吶号した。
次郎太は、蝟集した見物人を見わたして、
「誰か、仲裁する者は居らぬか？　あきないの邪魔をされて困る」
と、ぬけぬけしたことを云った。

六

それに応えて、一人の町奴が、芝居小屋の前から、
「てまえ、その喧嘩おあずかりいたしましょう」
と、云った。
長身に、黒木綿に三つ引の大紋を染めた小袖を着流し、片手に裾をつまんでいたが、その裾べりの紅裏甲斐絹が、ぱっと派手であった。
双眸が切長で澄み、鼻梁高く、色白の、いかにも女郎なぶりの佳い男であった。
「唐犬だ！」
見物人たちが、ささやいた。
額をひろく抜きあげて髪を結っているので、すぐに合点したのである。
唐犬組の町奴は、その額を粋なものとして誇って居り、世間では、これを唐犬額と呼んでいた。
その貫禄は、頭領の唐犬権兵衛にまぎれもない。
ゆっくりと、往還を横切って、近づいて来た唐犬権兵衛は、

「お歴歴がたに、申し上げます。この唐犬権兵衛が、仲に入らせて頂きとう存じますが、いかがなもので――？」
と、いんぎんに申し入れた。
「余計なことだ」
「さし出たまねをするな」
旗本奴たちは、一応虚勢をはってみせたが、内心ほっとしていることは、誰の目にも瞭然とした。
唐犬権兵衛は、笑い乍ら、次郎太に向って、
「ご浪人さん、その刀、一本五両で、どうでしょうかね？」
と、訊ねた。
次郎太は、じっと、権兵衛を視ていたが、
「結構だな。但し即金だ」
と、こたえた。
「おいっ！　おれたちが、果し合いで、取りかえしてみせるのだぞ！」
旗本奴の一人が、叫んだ。
「まあまあ、お待ちなせえ。ここんところは、この唐犬におまかせを――」
権兵衛は、芝居小屋の方へ、片手を挙げた。乾分が駆け寄って来て、権兵衛から、金を用意するように命じられると、茶屋へ走った。
次郎太は、ふところ手で、待っていた。
旗本を襲って、その差料を奪い、それを白昼、盛り場で、公然と大安売りしてみせるこの浪人者の

不敵さは、たちまち、噂になって、見物人の頭数はみるみる増し、往還いっぱいになった。
こうなると、旗本奴たちも、手も足も出ぬかたちであった。
権兵衛は、乾分が、三方に小判の包みをのせてやって来るや、刀十四本分七十両を、無造作に、次郎太へ手渡そうとした。
すると、次郎太は、そのうちの十両を、手づかみにして、
「あとは、貧乏人へまいてもらおう」
と、云って、やおら曲彔から、腰を上げた。
「これは、どうも、粋なおはからいで、忝う存じます」
権兵衛は、礼をのべておいて、旗本奴たちに向うと、
「この刀は、てまえがお預りした上からは、屹度、お持主へお返し申し上げますゆえ、ご安堵下さいまし」
と云い、まず、そこに当て落されている旗本奴へ、その差料をのせかけてやった。
次郎太が、歩き出そうとすると、旗本奴の一人が、
「名を名のれ！」
と、呶鳴った。
「さあ、なんと名のろうかな。……片耳奴とでも、おぼえておいてもらおう」
次郎太は、こたえておいて、道をあけた見物人の中を、悠々と遠ざかった。
「唐犬！　この場は、お前にまかせたが、彼奴との果し合いは、われらの料簡次第だぞ！」
と、睨めつけられて、権兵衛は、微笑し、

「それは、むこう様も、のぞむところでございましょう」
と、こたえていた。

七

片目片耳の浪人者が、旗本大身を襲って、その差料を奪い、木挽町の守田座の前で大安売りした、という噂は、数日経たぬうちに江戸中にひろがった。
それと知りつつ、五人の旗本奴が、腕を拱ぬいて唐犬権兵衛の仲裁にまかせた、ということも、片耳奴の人気をあおる効果があった。
しかし、旗本奴の方には、一応弁解の余地があった。
頭領水野十郎左衛門は、二年前、町奴の巨魁であった幡随院長兵衛を、邸内へ呼び寄せて、手討ちにして以来、部下たちに、町奴との争いを厳重に禁じていたのである。
唐犬権兵衛は、幡随院長兵衛の兄弟分であった。いわば、権兵衛にとって、水野十郎左衛門は、仇敵であり、もし権兵衛がその気になりさえすれば、町奴が総決起して、軍勢にも似た党を組んで、水野邸になぐり込みをしかける事態も起りかねまじい状勢だったのである。
幕府では、すでに、旗本奴ならびに町奴の厳重な取締り方針をさだめ、御持頭中山勘解由は、この年、盗賊火付改めの制を敷いて、いつでも、一網打尽の体制をととのえていたのである。
旗本奴の頭目とみなされている水野十郎左衛門としては、ここにいたって、行動に充分要心しなければならなかった。

いわば――。

かぶき者全盛の時期は、水野十郎左衛門が、幡随院長兵衛を、自邸に招いて、討ち取ったのを転機に、去っていたといっていい。

旗本奴の前に立ちはだかった幡随院長兵衛の存在が、死んでみて、いかに大きかったか、ということが判った。

長兵衛は、元和元年、江戸で生れている。

この年、家康は、大坂城を攻めおとして、豊臣家を滅亡せしめている。

長兵衛は、島原一揆によって滅亡した寺沢兵庫頭の家臣塚本織部の長子であった、といわれている。

一説には、浅草神田山幡随院の門守になっていた西国牢人の伜であった、ともいう。

いずれにしても、武家の裔であることには、まちがいなかった。

十三四歳の頃は、すでに十七八歳の上背を有ち、膂力は異常にすぐれ、剣術柔術を好み、近隣の少年たちの長になっていた。

貧家に育ち、度胸があって、膂力がすぐれている者が、当然辿る道を、長兵衛も、えらんだ。

博徒である。

美い男であったらしい。ひとたび、博徒の群に投ずるや、衣装に贅をつくし、一町の彼方からも、それと判る華美ないでたちをして、評判をとったので、忽ち、遊里、芝居小屋、岡場所の人気者になった。二十歳にもならぬうちに、長兵衛には、すでに、七人の女がいた。

博徒は、目に一丁字もない、無知蒙昧の、ただ糞度胸ばかりが取柄の乱暴者が殆どであったが、文武の道を一応そなえた長兵衛が、その仲間に加わったので、際立った存在にみえたに相違ない。弁舌

も巧みであったし、白刃の前で微笑を忘れぬ演技も心得ていたので、二十歳になった頃には、浅草組と称する博徒団の頭領になっていた。

家が、花川戸にあり、長兵衛は、博奕だけでくらすのをいさぎよしとせずに、口入稼業の割元を開いた。

普請人足の周旋屋を、口入、人足まわし、元締、割元などというが、後世の周旋業とちがい、その人足を乾分として自家にやしなっているのであった。人足どもを多く集めるには、自家に賭場をひらいて、博奕を打たせるのが、最も手っとり早い手段であった。

当時、土方人足の需要は大変なもので、長兵衛は、開業してから数年も経たぬうちに、乾分千人余も擁する大親分になっていた。

戦乱がおさまり、治世泰平になれば、まず建築土木工事が盛んになるのは、いつの世も同じであった。江戸の市街は、発展の一途を辿り、江戸城をはじめ、神社仏閣、武家屋敷の修築、建立、新築は、あいつぐ。いくら、土方人足がいても、足りない有様であった。

幕府が、大名に命ずる江戸城とか東照宮の修築、寺院の建立、河川工事のお手伝いというのがあった。大名は、お手伝いを命じられると土方人足を集めなければならなかった。

また――。

旗本のうち、小普請組は、こうした仕事に中間を人足としてさし出さなければならなかった。

小普請、というのは、直参で無役のことをいった。戦争がはじまれば、旗本として戦場でたたかうが、平時となれば、用がないので、休職となり、俸禄だけを受ける。その代り、建物の修築などの手伝いをする、小普請というのは、普請の小さなもの――すなわち、屋根とか垣根のこわれた箇処をな

おすといった仕事の意味であり、この小普請に、小普請組は、人足をさし出すのであった。
百石毎に二人か三人の人足を出さねばならず、また五百石以上の者は、人足のほかは、杖突きという、人足の監督を一人宛出さなければならなかった。
千石取りともなれば、二十人以上の人足、数人の杖突きを、出さなければならなかった。

八

しかし——。
元和偃武がおわり、寛永も過ぎた時世ともなると、千石取りの旗本も、内緒は苦しくなっていた。まして、無役の直参ともなれば、台所は火の車である。
人足をさし出すために、年中多くの中間をかかえている余裕はなかった。
また、中間というものは、原則として、世襲の譜代の家来であり、したがって、出人足の中間に過失があれば、その責任は、主人の旗本が取らねばならなかった。
そこで、小普請組の旗本は、中間は、年期奉公の渡り中間をかかえ、小普請奉行にさし出す人足の方は、口入稼業の割元にたのみ、人足の身元を引受けさせたのであった。
したがって、口入稼業の割元は、親分乾分の関係によって、人足に出した乾分に絶対に過失がないようにとりはからった。
「もしお前があやまちを起したら、親分の顔に泥をぬることになるのだぞ」
この一言が、無知蒙昧な乱暴者を、まじめに懸命に働かせる威力となった。

乾分としては、その代り、仕事のない時は、博奕に明け暮れても、親分がやしなってくれ、面倒をみてくれたのである。
幡随院長兵衛にとって、水野十郎左衛門も、口入の顧客の一人であった。
したがって、はじめのうちは、旗本奴対町奴という敵対関係にはなかった。
長兵衛にとって、十郎左衛門は、大切な顧客であり、しばしば、吉原などへ、招待してもてなしている。
水野十郎左衛門は、三千石、小普請組出雲守成貞の嫡男であった。
出雲守成貞は、備後福山城主・十万石、水野日向守勝成の三男であった。名門である。
十郎左衛門の祖父日向守勝成は、一槍をひっさげて、一介の名もない牢人者から十万石の城主にのし上った典型的な戦国の武辺者であった。
元亀天正の乱世であった。
その槍の働きに自信があれば、どこへ行っても、自由に、主人をえらんで随身することができたし、手柄次第で、千石の知行を得る機会はいくらでもあった。
水野勝成は、東北、北陸、九州の果てまで、流浪し乍ら、処々の大名に召しかかえられ、戦場を駆馳した。
ある時は、同藩の士と争いを起して、これを斬りすてて退散し、またある時は、主君の横暴を憤怒し、面罵して城から去った。
実力を競う時代であった。
智謀に長け、武術戦略に達した者だけが、おのが運命をきりひらくことのできる自由の世界であっ

た。

水野勝成は、おのが好むままに、随身し、そして退転した。やがて、徳川家康の麾下に加わって、長湫の戦いで、あっぱれの手柄を樹て、関ヶ原の戦いでは、一方の部将として武名を馳せた。

福山城は、その実力によって、わがものにしたのである。

十郎左衛門の父成貞は、勝成の三男として生れ、徳川家直参に加えられて三千石を領したが、勝成の血を享けただけあって、放縦不羈の性格の持主で、江戸に於ける旗本ぐらしはことごとく常規を逸した。

白犬を二十四も飼い馴らして、これを行列させて、登城してみたり、寒中侍女を全裸にして、泉水へとび込ませて、鯉を攫ませたり、刀の柄に棕櫚を巻き、配下にもそれにならわせて、しゅろ柄組と称したりした。

我慢会というものをつくったのも、どうやら、この水野出雲守成貞のようであった。

夏は戸障子をしめきって、座敷に屏風をたてまわし、いくつもの大火鉢に炭火をあかあかと燃やし、小袖を数枚もかさねて着て、熱いうどんをむさぼりくらった。

逆に、極寒の季節には、戸障子をはずして、座敷に寒風を吹き渡らせ、帷子の胸をはだけて、扇をつかい、冷そうめんを食った。

さらに、珍味をあじわうと称して、土竜の汁、蟇のなます、蛇の蒲焼、鼠のむし焼き、みみずの塩辛、百足の吸物などに、舌つづみを打った。

成貞のいでたちも、異様であった。あたまは、糸鬢奴という髷を結いあげ、羽織は鼠色で、定紋代りに髑髏を染め抜き、腰のあたりに、右に花切り鎌、左に輪ちがいを大きく抜いていた。これは、あ

たまの糸鬢奴の奴という字を、「ぬ」と読ませて、「かまわぬ」としゃれた趣向であった。

小袖は、脛までの短さに仕立てて、脛毛を露出し、鎖帷子を着込み、柄に棕櫚を巻きつけた朱鞘の大小を、腰に佩びて、平然と、登城した。その大刀の長さは、三尺四寸もあり、つねに、こじりが地面をすっていた、という。

こうした八方破れの豪気豁達な武辺を、父に持った水野十郎左衛門が、ただの旗本として育つ道理がなかった。

九

ある時――。

水野成貞は、この異風を誇って、蜂須賀阿州邸前を、通りかかった。

恰度その時、門から、行列が出て来た。

当主の姉にあたる阿波守至鎮の次女が、墓参におもむこうとしていたのである。

姫は、乗物の窓から、水野成貞の異常な伊達姿を、垣間視て、側につき添うた老女に、何人かと訊ねた。

老女は、告げた。

「あれは、いま評判のしゅろ柄組の頭領である旗本奴の水野出雲守成貞と申す御仁にございます」

姫は、墓参から戻ると、すぐに、弟の当主に会い、

「水野出雲守成貞という直参に嫁ぎたく存じます」

と、申し出た。
当時としては、娘が自ら嫁ぐ先をきめることは、考えられぬことであった。
阿波守は、おどろき、あきれて、いさめたが、娘は、肯き入れなかった。
重臣たちも反対したが、姫は、水野成貞以外ならば、一生嫁がぬ、と云いはった。
やむなく、使者が、水野家へ遣された。
成貞は、その口上をきくと、にやりとして、
「それがしは、屋敷内の長屋に、五人の妾をたくわえて居り申すが、それでもかまわぬと申されるならば、お迎えつかまつろう」
と、返辞をした。
姫は、戻って来た使者から、この旨をつたえられると、
「かまいませぬ」
と承知した。
押しかけ嫁になった姫は、婚礼当夜、五人の妾を指図して、祝いの客をもてなしてみせ、
「流石は、大名中華美で鳴る蜂須賀家の息女らしい振舞いだ」
と、評判をとった。
夫婦の間には、二人の男児が生れた。兄を百助——すなわち十郎左衛門成之、弟を又八郎成丘。又八郎の子孫は、現在まで伝って、残っている。
武名天下に鳴る祖父と、泰平の時世にことごとく反逆してみせる父母を持った十郎左衛門成之は、また、少年時代から、一風変った面目を発揮した。

十歳の頃、祖父からつたわる名槍を持ち出して、小刀で柄を両断し、これを、泉水の鯉突きに使用した。
流石に、父成貞は、激怒して、
「関ヶ原で十万石を手中にした名槍をめちゃめちゃにした罪は、許されぬぞ。この詫びをなんとする？」
と叱咤した。
成之は、じっと考えていたが、
「こういたしまする」
と、云いざま、その場で、衣服をかなぐりすてて、全裸になるや、玄関へ走り出て、若党に裸馬を曳かせて、それにとび乗ると、まっしぐらに駆け出て行った。折柄、厳冬であったが、成之は、そのまま、往還を駆け抜けて、隅田川へ、馬もろとも、とび込んだ。
あやうく溺れ死ぬところを、人に救われた。
成貞も、かつぎ込まれた瀕死の息子を眺め、事情をきくと、苦笑して、妻をかえり見、
「わしとお前のあいだに生れた奴だ。どうせ、畳の上では死なぬであろう」
と、云った。
意識をとりもどした成之は、すぐに、掛具をはねて、起き上り、父の居間に入った。
「父上、あの名槍と伜の生命と、いずれが、大切か、おうかがいしとう存じます」
そう問われて、成貞は、
「切った柄は、とりかえれば元のままになるが、そちの生命はかけがえがない、と申したいのであろ

う」
　と、云った。
「そちは、父をやりこめたいのか。ははは……、悪戯した上に、父を詫びさせたい小わっぱは、そちぐらいのものであろう」
　成貞は、あきれざるを得なかった。

十

　水野十郎左衛門成之の奇行は、いくつか残されている。
　当時、名医と評判の高い島田卜庵が、毎日江戸城へ登城する道順に、水野邸があった。
　将軍家典医ともなると、その登場行列は、一万石の格式をみとめられている。のみならず、一万石の大名などとは、比較にならぬ裕福さであった。ふつうの大名が、将軍家典医に往診をたのむと、礼金として百両以下を包むことはできなかったからである。
　慶安三年正月に、堀田加賀守が、大病で倒れると、幕府では、将軍家御匙・狩野玄竹に命じて、その治療にあたらせた。さいわいに、加賀守は全快したので、幕府では、玄竹に、千両を賜わった。堀田家でも、千両を出さざるを得なかった。爾来、将軍家御匙は、大名を診療する場合、千両までの薬礼を受けてもいい、という不文律ができた。
　勿論、千両の薬礼を出す大名は、そんなにいる筈もなかったが、それでも、収入は桁はずれに莫大

なものであった。
　当然、その行列は、華美なものになった。供廻り侍が三人、挟箱持、薬箱持、長柄持、草履取、そして、思いきり贅をつくした駕籠を陸尺が四人、といった供ぞろいであった。
　この行列で、往診すれば、その屋敷では、食事を出さなければならなかった。しかし、典医は、食事を辞退して、その代り、食事代を受けとった。支度料というやつである。べらぼうなぼろ儲けであった。
　さらに、医者駕籠には、特権があった。急患に間に合わねばならぬという名目で、たとえ大名の行列に行き会っても、さっさと、駆けぬけることが許されていた。
　水野十郎左衛門は、かねて、奥医師どもの贅沢きわまるくらしぶりが、癪にさわっていたので、島田卜庵に悲鳴をあげさせてやろう、と思いたった。
　一日、卜庵の行列が、門前をさしかかるや、邸内から、若ざむらいが馳せ出て来て、
「あいや、しばらく。国手に、是非お立寄りたまわりたく、主人よりのおねがいでござる」
　と、駕籠の前をふさいだ。
　卜庵が、首をのぞけて、用向きを問うと、
「主人水野十郎左衛門儀、ただいま、急病に悩んで居り申す。もし手おくれと相成らば、旗本八万騎の錚錚を喪うことゆえ、公儀としては一大損失でござる。家中一同狼狽の折柄、さいわいに、当代の国手がお通り合せになったことは天佑と存じ、ご迷惑乍ら、ご診察の程、お願い申し上げる次第でござる」
　若ざむらいは、そうたのみつつも、もしことわられたならば、斬ってすてるぞ、という身構えをと

ってみせた。
卜庵は、やむなく、承諾した。
座敷へ案内されてみると、急患で苦しんでいる筈の十郎左衛門が、釣瓶縄で鉢巻をし、広袖の寝衣の前を臍まではだけて、木綿の大夜着に、悠々と凭りかかって、大胡座をかいていた。
のみならず、形相凄じく、焼きつくしそうな眼光で、卜庵を睨み据えたのである。
卜庵は、ふるえあがった。
「どこが、おわるいのでござるかな？」
おそるおそるたずねたが、十郎左衛門は、無言で、ただ、ぬっと、片腕を突き出した。
卜庵は、膝行して、型ばかりに、脈をとった。勿論、仮病であるから、異常はなかった。
卜庵が、その旨を告げて、立ち上ろうとすると、
「待たれい！」
十郎左衛門は、家鳴りのするような大声で、呼びとめた。
「上様御匙に、脈をとって頂いたからには、御礼をいたさねばならぬ。しかし、ごらんの通りの貧乏旗本、薬礼にこと欠くため、せめて、昼餐をさし上げて、御礼にかえたく存ずる」
卜庵が辞退するいとまもなく、侍女数人が、膳部をはこんで来た。
膳は、塗りが剝げ、猫脚ががたがたになった粗末なしろものであり、巨きな木椀には、まっ黒な玄米の麦飯が、富士山のようにてんこ盛りにされていた。そして、惣菜としては、三匹の蛇が、丸ごと焼かれて、とぐろ巻きに、大皿にのせてあった。
卜庵は、蛇が大きらいであった。一瞥しただけで、気が遠くなりそうであった。

卜庵は、膳部から視線をそ向けて、いまは腹が空いていないことを告げて、中腰になった。
「では、この水野成之の饗応を受けられぬ、と申されるのか、せっかくの御礼を、拒否されては、旗本直参の一分が成り立ち申さぬ」
十郎左衛門は、居丈高になった。
卜庵は、仕方なく、目蓋を閉じて、一椀を平げた。
すると、十郎左衛門は、
「一膳飯は不吉でござる」
と云って、女中に、さらにてんこ盛りにさせた。
卜庵は、二椀目に、ほんのすこし箸をつけただけで、ひらあやまりにあやまった。
「さらば、この惣菜は、家の若ざむらいどもが、わざわざ秩父山中へ出向き申して、捕えて来た珍味でござれば、奥方への土産にされい」
十郎左衛門は、三匹の蛇をのせた大皿を、卜庵の前に据えた。
卜庵は、意識が遠くなった。
家中の者たちが、ぐったりとなった卜庵を玄関までかかえ出して、駕籠にのせたが、そのあいだに、いつの間にか、その懐中から、財布を抜きとっていた。
しかも、後刻、十郎左衛門は、島田邸へ、落しものされた、といって、空財布をとどけさせた。

十一

三日にあげず遊里に出入し、邸内には年中十人あまりの食客をごろごろさせている水野十郎左衛門が、不如意の勝手元を、やりくりするのに苦心したのは、当然である。

十郎左衛門は、渠らしいやりかたで、金繰り算段をした。

用人から、いよいよ首がまわらなくなった旨を告げられ、遊蕩をつつしんでいただきたいと諫められると、十郎左衛門は、

「いくらあれば、この急場がしのげるのだ？」

と、訊ねた。

「十五両もありますれば――」

「よし。明日といわず、今日のうちに、つくってつかわす」

そう云って、紺の木綿の布子を用意せい、と命じた。

用人が、それをとりそろえると、十郎左衛門は、その場で、着かえて、

「どうだ、似合うであろう。ははは、待って居れ」

と、云いのこして、屋敷を出て行った。

十郎左衛門が、訪ねたのは、霞ヶ関の黒田家であった。

手廻り部屋から入って、組頭に面会をもとめ、

「槍持奴にお召抱えのほどを、ねがいあげます」

と、たのんだ。

黒田家の槍といえば、途方もなく重いので、評判であった。尋常の中間では、とうてい、かつげなかった。まして、参勤交替の道中、その槍を扱う槍持奴など見当らず、やむなく、近時は、江戸にのこしておいたのである。

組頭は、志願者が、六尺ゆたかの、骨組逞しい巨漢なので、試してみることにした。

十郎左衛門は、元服前から、槍術の修練にはげんで居り、評判の大槍を、麻幹のごとく、かるがると振りまわしてみせることなど、なんの造作もなかった。

組頭は、即座に、惚れ込んで、側用人に、このことを告げて、十五両五人扶持で召抱えることにきめた。

すると、十郎左衛門は、

「まことに申し上げかねますが、さしあたって入用の金子が、取替え七両、山越し八両、都合十五両ほどを、いますぐお貸し越し下さいますよう、願い上げまする」

と、懇願した。

組頭は、請状もすまない者に前金を渡してやる前例はない、とかぶりを振り、明日、しかるべき請人をつれて参ったならば、渡してつかわそう、と云った。

十郎左衛門は、

「金子の入用は今宵のうちにさし迫って居りますので、ただいまお渡し下さらねば、御当家とはご縁がないものと、あきらめ、どこか、別のお屋敷に奉公口を求めることにいたします」

と、云った。

組頭は、あわてた。
黒田家を象徴する大槍を、行列の先頭で、派手にうち振ってみせる中間として、これほどぴったりの男はいなかった。面貌は秀れ、身丈骨格も抜群、しかも、どこで習ったか槍の扱いかたは水際立っている。
組頭は、やむなく、十郎左衛門に、十五両を手渡した。
十郎左衛門は、出鱈目の住所と名前を記して、これが請人である、と告げておいて、立去った。
それきり、黒田邸へ、請人はおろか、当人が姿をあらわす筈もなかった。
組頭が、三日後に、人を遣して、請人を尋ねさせたところ、そんな口入稼業の割元は存在しなかった。
——どこかの浪人者に金をかたり取られたのだ。
激怒してみたが、もはや手おくれであった。
それから一月ばかり過ぎて、黒田家の中間の一人が、昨日登城の途次、あの男に酷似した旗本を見かけた、と組頭に報せた。
黒田家の家中は、曲者をとりおさえる手筈をととのえて、大名旗本総登城の三月朔日に、四方の門に、待ち伏せた。
大手門におもむいていた藩士が、屋敷へ馳せ戻って来て、
「件の曲者が、馬上にて、通り過ぎましたので、その名を尋ねましたところ、水野十郎左衛門成之と名のりました」
と、報告した。

これをきいた重臣たちは、対手がわるい、と詮議不問をきめた。
大名と旗本の確執は、寛永以来、根深いものがあり、幕府の方針として、大名の方になるべく事を荒立てぬよう、遠慮して欲しいと、要望があったのである。
黒田家は、水野家に対して、咎めの使者を送ることもしなかった。

十二

浅草組頭領幡随院長兵衛にとって、水野十郎左衛門が、口入の顧客の一人であることは、すでに述べたが、これは、甚だ仕末におえぬ顧客であった。
十郎左衛門は、十年間、ただの一度も、人足代を支払わなかったのである。
長兵衛の方はまた、我慢づよく、一度も、催促をしなかった。
それぱかりか、時折は、十郎左衛門を、吉原などへ、招待した。
十郎左衛門は、そういう席でも、借金している遠慮や気づかいなどは、一切しなかった。
しかし、十郎左衛門は、一度も催促しないばかりか、遊興の招待までしてくれる長兵衛に、なんとなく威圧感をおぼえるようになった。
人情というものである。
対手の器量の大きさ深さを知れば知れるだけ、負け犬になるまいとして、内心、気負い立つのは、階級区分の厳然とした封建の時世にあっては、なおさらのことであった。
この点で、十郎左衛門は、あきらかに、長兵衛より、人間が劣っていた。

十郎左衛門は、そうなると、意地でも、長兵衛とのつきあいを頻繁なものにした。
長兵衛が、吉原に招けば、必ず数日内には、十郎左衛門は、裏三番町の自邸へ長兵衛を呼んだ。
自邸へ呼んだある時のことであった。
十郎左衛門は、酔ったとみせかけて、いきなり、脇差をひき抜いて、大鯛のあたまを、胴から切りはなした。
そして、そのあたまを、切先で突きさすと、
「長兵衛――。お前には、借金がつもった。せめてもの詫びのしるしに、肴をくれよう」
と、云って、それを、さし出した。
鯛の目が、黄金色に光っていた。
十郎左衛門は、母親の里方である蜂須賀家から、百両借金して、それをその大鯛のあたまへ、埋め込んだのである。
ちゃんと、その金子を、長兵衛に返すのは、癪なので、こういう便法をえらんだのである。
長兵衛は、おちついて、懐紙をとり出すと、
「有難く頂戴いたします」
と、受けようとした。
すると、十郎左衛門は、
「遠慮無用にいたせ」
と、云った。
「では――」

長兵衛は、するすると進んで、白刃に突き刺されている大鯛のあたまを、大口ひらいて、くわえた。
百両は相当の重さである。
しかし、長兵衛は、くわえてはなさずに、あとへさがると、懐紙に取って、
「忝く、頂戴つかまつりました」
と、平伏した。
誰の目にも、この振舞いは、長兵衛の勝であった。
十郎左衛門は、肚の奥からの憎悪を、長兵衛に対して、おぼえた。
「長兵衛、お前が町奴であることが、惜しゅうてならぬぞ」
十郎左衛門が、憎悪を押し伏せて、云うと、長兵衛は微笑して、
「駕籠に乗る人、乗せる人、そのまた草鞋をつくる人、と申します。人それぞれ、おのが座がきまって居ります」
と、こたえた。
――下郎め！
十郎左衛門は、全身がわななくほどの殺意をおぼえた。

十三

水野十郎左衛門と幡随院長兵衛との間の目に見えぬ確執が、やがて、血を見る争闘になるであろうことは、双方をよく識る者たちのひそかに、危惧するところであった。

これは絶対に避けられぬことに思われた。
ただ、双方が、あまりに大物すぎて、おのれが、起てば、忽ち、旗本奴と町奴の間が火を噴くことが瞭然としていたので、容易に動けなかったのである。
いわば、その険悪関係は、現在のアメリカとソ連のミニチュアみたいなものであった。
ただ、きっかけがあればよかった。
そのきっかけは、やがておとずれた。
舞台は、葺屋町の土佐少掾橘正勝の芝居小屋であった。
旗本奴の首将・水野十郎左衛門と町奴の頭領・幡随院長兵衛との争闘が、火を噴いた舞台が、芝居小屋であったのは、まさにおあつらえ向きであった。
当時、江戸庶民の最大の愉しみは、芝居見物であった。庶民の生活は、今日では想像できないほど、地味でつつましやかなものであった。木綿の粗服に、一汁一菜の、判で捺したような単調な日常であった。その現実を忘れさせてくれるのが、芝居小屋であった。成年の男たちには、女郎買い、という愉しみがあったが、女たちは、一年一度の芝居見物を愉しみにして、生きていた、といっても誇張ではなかった。
上は武家の奥方から、下は商家の下婢にいたるまで、その日のために、身を飾るものをととのえ、一月前から、出しものの狂言に胸をおどらせ、当日は、夜明け前から——寅刻（午前四時）頃から起きて、弁当をつくり、髪を結って仕度をし、朝陽がさしそめた頃には、家を出る、というあんばいであった。
芝居小屋でも、この期待に応えて、二番目狂言には、この年世間をさわがせた巷間の事件を巧みに

脚色して、評判をとり、人気を集めた。
恰度その年の二番目狂言は、未曾有といっていいくらいの噂を呼んでいた。
それというのも、旗本奴の一人をモデルにしていたからである。
モデルにされたのは、直参の御書院番大久保彦六という人物であった。
牛込御門大御番所の向う角に、屋敷を構えた二千石取りで、大小神祇組に属していた。
三河譜代で、小田原城主大久保長安の一族であった。加賀爪甲斐守（一万石）、阪部三十郎（五千石）、山中源左衛門、大鳥居逸兵衛、我孫子新太郎らとともに、旗本奴を代表し、異形の扮装を誇り、公方の尻押しと称えて市中を横行し、青楼、芝居小屋などでは、その顔を見知らぬ者はいなかった。
彦六は、水野十郎左衛門とは、特に懇意であり、十郎左衛門が、吉原の廓の三浦屋から、抱え遊女小力太を拉致した時は、これに手だすけして、小石川白山の別邸へ、かくまってやったりしている。
大久保彦六が、吉原の青楼に上った時の扮装が、記録にのこっている。
髪は結ばずに、手一束に切りはなっていた。これは、喧嘩の時に、たぶさを摑まれぬためであった。髑髏の口から、白百合が一輪咲き出ている図柄を背中に浮かせた羽二重の綿入れを着、白縮緬の帯を三重にまわし、その袖口を高くくくりあげていた。丈は、もちろん短く、三里の灸あとの見えるほど短く仕立て、裾には、鉛三匁をくけ込んで、褄のはねかえるようにしていた、という。
この大久保彦六邸に、一人の美しい下婢がいた。
小田原大久保家からゆずり受けた相州藤沢生れの、ふじという十八歳の娘であった。
賤しい漁師の家に生れ乍ら、ふじは、江戸にも稀なほどの美しい顔だちと肌を持っていた。
十三歳で、小田原城に奉公にあがり、十五六歳ですでに、その美貌は評判になっていた。大久保彦

六は、たまたま、箱根へ、神祇組一同と遊山に出かけて、小田原城へ挨拶に立ち寄った際、ふじの評判をきき、会ってみて、一瞥で惚れ、むりやりに城代に乞うて、江戸屋敷へ、ともなったのであった。
彦六は、勿論、ただの下婢として使うつもりはなく、手活けの花にするつもりであったが、ふじには、故郷の藤沢に、夫婦約束をした辰三郎という庄屋の伜がいた。
ふじは、彦六から手ごめにされようとすると、舌を嚙んで抵抗した。
彦六は、死なせては何もならぬので、辛抱づよく、なびくのを待つことにした。
衣裳、櫛、簪、などを、惜しみなく与えて、ふじの気持がほぐれて、自分の方に傾いて来るのを期待した。しかし、ふじは、一向に、傾いて来る気色がなかった。

十四

ついに——。
業をにやした彦六は、一策を案じて、ふじをいじめぬき、ふじがそのつらさに堪えられなくなって、身を投げ出して来るのを計ることにした。
大久保家に秘蔵されている南京焼きの皿十枚のうちの一枚を、ひそかにかくして、それをふじの落度にした。
その詮議を名目として、彦六は、ふじを、居室に据えて、一歩も出さないようにした。おのれは、独酌し乍ら、
「その皿を、かぞえろ」

と、命じた。
ふじは、九枚の皿を、声をあげて、
「一枚、二枚、三枚……」
と、幾百遍となく、かぞえさせられた。
早朝から夜まで、その拷問をかけられたふじは、いかに詫びても、許されなかった。
六日目の夜半、ふじは、彦六が酔って睡ったすきをうかがって、庭へ遁れ出た。
しかし、その時は、心気朦朧となり、なかば狂っていたとみえて、庭をふらふら歩き乍ら、
「いちまい……、にまい……、さんまい……」
と、口走っていた。
そして、庭の南隅にある古井戸のそばに寄ると、その中に、のこり一枚が落ちていないか、と覗いた。
ふじの死体が、井戸底からひきあげられたのは、それから三日後であった。死体は、請人の牛込白銀町の弥兵衛という小間物屋へ、引渡された。
大久保彦六邸に、美しい下婢の幽霊が出る、という噂が、近辺にひろまったのは、その年が暮れた頃からであった。
彦六自身が、夜半に——恰度、ふじが古井戸に身を投じた時刻に——悪夢にうなされて、はね起きるや、
「おのれっ、ふじめ！」
喚きつつ、白刃をふりまわすようになったからである。

古井戸は、間もなく、埋めたてられたが、そのあたりの暗い木立の中から、「ひとおつ……ふたあつ……」と皿をかぞえる、哀しげな、かぼそい声が、きこえて来るようになった。
屋敷内の長屋に住む家臣をはじめ、使傭人一同は、気味わるさに、無断で逃げ去る者が続出した。
年が明けて、春を迎えた頃には、広い屋敷内には、老いぼれの用人一人だけになった。
親族もまた交際を断って、絶えて訪れる人もなくなった。流石の乱暴者の旗本奴も、毎夜悪夢にうなされているうちに、神経がしだいに狂って来た。
この噂をきいた水野十郎左衛門が、その身を案じて、自分の屋敷へ来るようにすすめた。
しかし、彦六は、幽鬼のごとく痩せおとろえ、蒼ざめ乍らも、
「男伊達が、下婢の怨霊をおそれて、屋敷をすてたとあっては、名がすたり申す」
と云って、容易に承諾しなかった。
しかし、なにさま、衣食のことまで、おのれの手でやらねばならぬ不自由さに、ついに、彦六は、老いぼれの用人までが逃げ出すと、やむなく、水野邸をたよった。
しかし、その時はすでに、彦六は、心身ともに、病んで、歩行もおぼつかぬ状態になっていた。
水野十郎左衛門は、屋敷にひきとってみて、彦六が噂にたがわず、子刻前後になると、狂声をあげて、白刃を振りまわすのを、目撃した。
——このままには、しておけぬ。気の毒だが、大小神祇組の副首将らしい最期を遂げさせねばならぬ。
十郎左衛門は、某夜、彦六があばれ出した時、背後からとびかかって、その白刃に手を持ち添えて、渠の腹へ刺した。

大久保彦六は割腹して相果てた、と発表された。
しかし、世間では、この悲惨な因果応報話に、さらに尾鰭をつけて、流布させた。
芝居小屋で、この好奇心をそそる事件を見のがす筈がなかった。
冷酷非情な主人にいじめぬかれて、あらぬ濡れ衣をきせられ乍ら、九枚の皿をかぞえるあわれな女中の物語——と来れば、それこそ、舞台で演ずるには、うってつけの材料であった。
大久保家は、断絶したし、彦六に家族はなかったので、遠慮する必要はなかった。
葺屋町土佐少掾正勝の小屋が、これを脚色し、上演するや、はたして、異常な人気を呼んだ。

十五

水野十郎左衛門は、亡友の末路を脚色した狂言が演じられているときくと、
「これを中止させねばならぬ」
と、ほぞをかためた。
旗本奴の首将の芝居見物ともなると、大層派手なものであった。
桟敷八間のあいだに、水野家定紋の水沢瀉を白く染め抜いた緋縮緬の幕を張りめぐらし、十郎左衛門以下、その与党全員が、おそろいの金襴できりかえした紙衣の上に、縞天鵞絨の袖なし羽織をまとった。十郎左衛門自身は、花かつらぎの長剣に、金の角鍔を光らせた。そして、左右には、娘もはじらうほどの美しい、薄化粧の小姓が七八人も、居流れた。
二番目狂言のクライマックスである、ふじの皿数えの場面になった時であった。

一人の半畳売りが、故意に、町奴の一人を激怒させる振舞いを示した。
半畳売りというのは、現代で云えば、蔵前国技館の案内係のようなものであった。半畳の莚をかかえていて、客を、適当な場所へ案内して、それを敷いて、座料を取ったのである。
慶安承応年間までは、芝居という名称通りに、左右の桟敷のほか、今日の劇場の中央の椅子席にあたるところは、芝生に腰を下して見物した遺風をそのまま継いで、土間になって居り、それぞれ、半畳莚を敷いたのである。
もとより、満員の土間である。半畳を敷く余地などなかった。
にも拘らず、半畳売りは、無理矢理に、割り込んで、一人の町奴に、
「ちょいと、膝をあげておくんなさい」
とことわって、莚を敷こうとした。
その町奴は、雷なにがしという、無類の短気者であったので、たちまち、かっとなり、
「なにをほざきやがる。ここにどうして、半畳が取れるんだ。埒もねえことをしやがるな」
と、呶鳴りつけた。
半畳売りは、水野十郎左衛門から金をもらって、騒動を起す下心があるから、
「ここをどこだと思っていなさる。小屋の中では、町奴だからといって、大きな口をきかせねえ。こみ合っている時は、お互いにゆずり合わなけりゃならねえ。割り込みを拒みなさるなら、出てもらうことになるんだ」
と、せせら嗤い乍ら、きめつけた。
「なんだと！　てめえの目玉は、ふし穴か。浅草組の小頭を、こけにしやがると、ただじゃおかねえ

ぞ！」
雷某は、半畳売りの胸ぐらをつかむや、ふたつ三つ、頬桁へ、拳を見舞った。
忽ち、場内は、騒然となった。
半畳売りを擲りつける雷某に向って、旗本奴の桑原八十郎という男が、見物人の肩やら膝を踏みつけて、襲いかかった。これも、水野十郎左衛門の仕組んだ筋書きであった。
芝居は中断されてしまった。
雷某は、膂力が秀れていたので、逆に、桑原八十郎を組み敷いてしまった。
桟敷の水野十郎左衛門は、かたわらの四天王の一人金時金左衛門に、目くばせした。
金左衛門は、いきなり、白刃をひき抜いて、
「下郎っ！　その素っ首をもらった！」
と、喚きたてて、土間へ跳び降りた。
見物人は、わあっと、悲鳴をあげると、雪崩れをうって、遁れようとした。
収拾つかぬ混乱状態に陥った。
その時、鼠木戸から、急ぎ足に入って来た、左巻きの三尺手拭いで頬かむりをした六尺ゆたかの巨漢があった。
遁れようとする見物人を押しわけて、中央に進むと、白刃をふりかざした金時金左衛門に立ち向い、苦もなく、その小手を摶って、白刃を奪い、蹴倒しざま、その上に、どっかと、腰を下した。
後世、幡随院長兵衛を主人公にした芝居では、この場面が、見せどころとなった。
陰の三つ引の大紋を染めた長羽織を、ぱっとめくり、関の孫六鍛えの無反の長剣を、ぐいと脇に引

いて、金時金左衛門の背中に大胡座をかき、
「上は梵天帝釈、地は金輪奈落まで、ご存じ幡随院長兵衛とは、おれがこと。喧嘩の仲買い、神祇組であろうとも白柄組であろうとも、半畳に敷き申すでござんしょう」
と大見栄きると、見物人は、わあっと、大喝采した。
もとより実際には、金時金左衛門の白刃をたたき落すだけで、背中にふんまたがりなどはしなかったであろうが、ともあれ、その振舞いが、旗本奴の威信をくじいた。
水野十郎左衛門としては、幡随院長兵衛を、男の意地の上からも、生かしておくわけにはいかなくなった。

十六

一説によれば――。
幡随院長兵衛は、江戸随一の町奴になると、手のつけられぬほど増上慢になり、旗本奴など眼中になくなって、某日、水野十郎左衛門邸へ押しかけて行き、かねて十郎左衛門が、吉原の香具売りの美少年を、邸内へ連れ込んでいたのを、
「自分に頂戴してえ」
と、談判した。
人足代がたまって居り、その借金のかたに、美童を所望したのである。
十郎左衛門が、拒絶すると、長兵衛は、玄関の式台に大胡座をかいて、さんざ毒吐いた。

十郎左衛門は、腹に据えかねて、大身の槍をふるって、突き殺した。
この説に依れば、旗本奴と町奴との対立はなかったことになる。
しかし、物語としては、長兵衛が善玉になっている方が、筋の通りがよさそうである。
某日、水野の用人保昌庄左衛門が、幡随院宅をおとずれて、過日土佐少掾の芝居小屋で起った騒擾のため、旗本一統と町奴連との間柄が険しいものになったのは、いかにも遺憾であるゆえ、和睦の意味で、明日水野邸へ来てもらい、一献を汲みかわして、こだわりを水に流したい、と申し入れた。
はたして、真意が奈辺にあるか、疑わしく、乾分たちは、行くことを反対したが、長兵衛は、
「招かれて、これをことわるのは、町奴の体面上できぬことだ」
と、決意した。
唐犬権兵衛が、このことをききつけて、駆けつけて来ると、
「薪を背負って、火の中へとび込むようなまねは、しなさるな」
と、諫止したが、長兵衛は、肯かなかった。
長兵衛は、ただ一人で、水野邸へおもむいた。
そして、矢つぎ早やな献酬で、酔ったところを斬り殺され、死体を江戸川へ棄てられた。行年三十六歳。
殺したのは、十郎左衛門ではなかった、という説もある。
芝居では、湯殿に入ったところを、長兵衛は、十郎左衛門に、長槍で突かれているが、十郎左衛門の実弟である又八郎成丘の子孫水野鍏十郎という人の家に伝えられている実説らしいのでは、次のようになっている。

ある夏の一日――。
長兵衛は、水野邸へ、泥酔して押しかけ、酒肴を所望したあげく、勝手に、湯殿に入った。
湯殿は、六畳ばかりの板敷で、まわりは、杉の四分板であった。
浴槽の前には、酒菰が敷きつめてあった。
長兵衛は、衣類を脱いで、褌ひとつになったが、その差料は、そっと酒菰の下にかくした。
これを、水野家の若党二人――軍平、権平が、ぬすみ視た。
「湯殿の中まで、差料をかくすとは、長兵衛の心底疑うべきだ。こん後、こやつを生かしておいては、水野家の禍になる」
目くばせした両名は、長兵衛が、浴槽に沈んで、首だけ出したところを見はからって、とび込み、権平が、酒菰の下の差料を奪い、軍平が長兵衛を、滅茶滅茶に斬った。
十郎左衛門は、この時、座敷で、客と座談していたが、湯殿の方からただならぬ叫びがあがったので、いそいで、台所口から、中を覗いてみた。
長兵衛が、血まみれになり乍らも、なお屈せず、軍平から、白刃を奪いとっていた。
十郎左衛門は、風のごとく奔って、座敷のなげしから、世に蜈蚣鎗といわれる関の大兼光をつかみとるや、庭へ跳んだ。
板がこい越しに、浴槽もろとも長兵衛の背中を貫いた。
次いで、十郎左衛門は、軍平・権平の両名を、庭へ呼び出して、無用の忠義立てを、激しく叱責した。
両名は、部屋へ下って、切腹して果てた。

十郎左衛門は、家臣に命じ、長兵衛の死体を、酒菰に包ませて、とりすてさせた。爾来、水野家では、酒菰を一切門内に入れぬならわしになった。
十郎左衛門は、幡随院長兵衛を無礼の振舞いがあった故斬殺した旨を、奉行所に届け出た。しかし、奉行所では、かねて長兵衛は町人のぶんざいで増上慢になり、お上をないがしろにする行状多い男であったゆえ、そのままにすておいてよろしい、と裁決を下し、十郎左衛門に、お咎めはなかった。

十七

長兵衛の三十五日の逮夜に、幡随院の乾分たちが、吉原遊廓の大菱屋に登楼した水野十郎左衛門と白柄組一統九人を、狙って、その帰途を襲った、という事実は、のこっている。
しかし、仕止めたのは金時金左衛門ほか二名だけで、十郎左衛門は、馬上にいたので、一鞭あてて、遁れ去った。
この事件があって、奉行所は、高札をかかげ、私闘を厳禁した。もし、私闘に及べば、町奴全員を捕えて死罪にする、と明示したので、長兵衛の乾分たちは、無念の泪をのまざるを得なかった。
片目片耳の吉田次郎太が、飄然として、江戸へ現われたのは、幡随院長兵衛が、水野十郎左衛門に殺されてから、恰度二年目であった。
次郎太が、木挽町守田座の前で、旗本大身たちから奪った差料を大安売りしてから、二十日ばかり過ぎたある日――。
水野十郎左衛門は、松平紋三郎、高木九郎八ら白柄組四天王をともなって、新築成った新吉原へお

もむいた。
先年の、いわゆる本郷丸山火事で、吉原遊廓は烏有に帰したのを機会に、幕府の命令で、三谷村へ地を移して、新吉原と称したのである。
吉原土手八丁を進むと、彼方に、廓の大門が見え、これまでの吉原とは構えを一変して、いかにも、治外法権の新世界が、見はるかす田園の中に、浮きあがっていた。
水野十郎左衛門は、例によって金襴できりかえした紙衣の上に、縞天鵞絨の袖なし羽織をまとい、花かつらぎの長剣に、金の角鍔を光らせ、注連を頸にかけた白馬にうちまたがっていた。
大門に近づくと、そこに人が蝟集していたが、さわぎたて乍ら、左右に散った。
十郎左衛門は、大門前の路上に、のうのうと寝そべっている浪人者を、みとめた。
用人の保昌庄左衛門が、近づき、
「直参水野十郎左衛門殿が、通られる。退けい」
と、叱咤した。
すると、浪人者は、ごろりと、こちらへ、寝がえった。
保昌庄左衛門は、愕っとなった。
その片目は閉じられ、片耳が殺げ落ちていたからである。
――こやつだ！
旗本血気の面々が、血眼でさがしもとめていた男であった。
保昌は、十郎左衛門のところへ馳せ戻ると、
「あの浪人者が、福田様はじめご直参衆の差料を奪って、大道売りいたした曲者にございまする」

と、報せた。
十郎左衛門は、
「身共が参るのを知って、寝そべって居るものとみえる」
と、云って、馬を進めた。
「浪人！　存念は何だ？　きこう」
問われて、吉田次郎太は、地べたから、隻眼を、十郎左衛門に仰がせた。
「存念は、べつに、なにもござらぬ」
「存念なくして、何故に、大門をふさいで居る？」
「貴殿が、冬と夏を逆にして、我慢会とやらを催されるに、なにか、意味がござろうか？」
「ふむ。されば、馬蹄にかけて、通っても、文句はない、と申すのだな」
「一向に――」
「よし！　通るぞ」
「但し――。こちらも、武辺でござる故、いささかの趣向を以って、貴殿のご通過に、報い申すが、それでも、よろしゅうござるか？」
「かまわぬぞ」
十郎左衛門は、みとめた。
松平紋三郎ら四天王が、自分たちが片づける、と云いたてたが、十郎左衛門は、許さなかった。
十郎左衛門は、ぐっと、背中を立てると、たづなを引いた。
蝟集の衆は、固唾をのんだ。

次郎太は、手枕をし、左手で、刀を抱いて、のうのうと寝そべったなり、微動もせぬ。
「通るぞ！」
十郎左衛門は、昂然と予告した。
「ご随意に――」
次郎太は、応えた。
十郎左衛門は、ぱっと馬腹を蹴った。
白馬は、奔った。
次郎太の地上の寝姿が、馬の下に入った――と見えた刹那。
見物人は、四本の棒状のものが、宙にはね飛ぶのを、目撃した。
次の一瞬――。
ある者は、十郎左衛門が、空中に躍りあがって、地上へ跳び降りるのを見たし、またある者は、白馬が、巨岩のように凄じい地ひびきたてて、ころがるのを、みとめた。
まばたくほどの短いその瞬間が過ぎた時、人々は、どっと、どよめいた。白馬は、四本の脚をことごとく両断されて、斃れていたのである。
のみならず――。
うっそりと、寝そべっていたその場所に佇立した次郎太は、すでに、白刃を鞘に納めていたのである。
十郎左衛門は、大門の柱ぎわに、降り立っていたが、流石に、顔面から血の気を引いていた。
次郎太は、隻眼の冷たい光を、十郎左衛門に当てると、

「趣向、いかがなるものでござったか？」
と、訊ねた。
十郎左衛門は、ひとつ大きく肩で呼吸して、
「見事！」
と、ほめた。
「では、これで、ごめん――」
次郎太は、踵をまわした。
こちら側に立って、茫然自失していた四天王らが、はっとわれにかえり、
「やらぬぞ！」
と、呶号して、一斉に、抜刀した。
「たわけ！」
十郎左衛門の叱咤が、飛んだ。
「お主らの敵う対手か！」

十八

それから、七年の歳月が流れた。
寛文四年三月二十六日、無頼段々増長の廉を以て、母方の姻戚たる蜂須賀阿波守光隆へ、身柄お預けとなっていた水野十郎左衛門は、評定所へ召出された。

すでに死を覚悟していた十郎左衛門は、異形のていで出頭した。
頭髪も髭もぼうぼうとのびるかままにし、膝までしかない真紅の小袖をまとい、拳大の家紋を、肩に二つ浮かせていた。
狂人としか受けとれぬ風体であった。
評定所の役人は、十郎左衛門を、改心の余地なしとみとめた。
十郎左衛門が無作法の由は、将軍家の耳に達して、蜂須賀邸へお預けになったのであるが、その後の謹慎の態度如何によっては、半地減封ぐらいで宥される筈であった。
ところが、あまりにも公儀をあなどる異形のていで出頭して来たので、評定所では、不敬の罪に問うて、老中土屋但馬守数直の名を以て、切腹を仰せつけた。
十郎左衛門は、平然として、これを受けると、蜂須賀邸へ、戻って来た。
切腹は、翌朝であった。
公儀からは、検使として、滝川長門守利貞と兼松下総守正直が、やって来た。
十郎左衛門は、兼松正直から、切腹用として、貞宗の小脇差を与えられると、
「忝う存ずる」
と、礼をのべて、それを三宝から把りあげて、白刃に巻いた白紙を、ほどきはじめた。
兼松正直が、
「そのままでされた方がよろしくはなかろうか」
と云うと、十郎左衛門は、笑って、
「貞宗とあれば、とくと焼刃を拝見つかまつる」

と、白紙をほどきすて、凝っと見入ってから、
「なるほど、立派なきたえ！」
と、云いざま、柄を逆手に摑んで、おのが太腿へ、ぐさと、突き刺し、ひと引きに、三寸ばかり引き斬ってみて、
「刃の味も格別――」
と、にやりとしてみせた。
その時、介錯人が、しずかに、歩み寄って来た。
十郎左衛門は、貞宗に再び白紙を巻き、胸を押しひろげて、左手を左脇腹に当て、
「介錯ご苦労に存ずる」
と、云い乍ら、ふりかえった。
とたん――。
「ほう……お主が、身共の介錯人か」
十郎左衛門は、おどろきの声をあげた。
介錯人は、片目片耳だったのである。
吉田次郎太は、微笑しつつ、云った。
「心おきなく、逝かれい」
「お主、ただ者ではないと思っていたが、公儀隠密であったか」
十郎左衛門は、苦笑した。
次郎太のかざした太刀が一閃するや、十郎左衛門の首は、のど皮一枚のこして、抱き首に、その膝

へ落ちた。

水野十郎左衛門が切腹したのをきっかけにして、旗本奴のこらず仕置を受けた。

加賀爪甲斐守が八丈島へ遠島（おんとう）を仰せつけられたのをはじめ、白柄組、大小神祇組の男伊達（だて）は、すべて三宅島などの遠い島へ送られてしまった。

この処断のために、吉田次郎太が、中山勘解由の依頼によって、渠（かれ）らの不行跡調査に当った隠密であったか、どうか——記録には、のこっていない。

吉田次郎太自身のその後の消息も絶えた。

柳生五郎右衛門

一

少年は、庭はしで、蟻の行列を、あかずに眺めていた。

蟻の行列の端には、黒砂糖がひとつ、置かれてあった。少年が、置いたのである。

少年は、あたたかな春の陽ざしの落ちた庭のあちらこちらを、せっせと動きまわる蟻を見て、ふと思いついて、餌を与えてみたのである。

蟻の行列は、あっという間に、つくられた。

——声も出せないものが、どうしてこんなに多勢を呼び集められるのであろう？

少年には、ふしぎでたまらなかった。

少年は、人の気配に、顔を擡げてみた。

日向の縁側に、少年の父が現われた。その左の拳には、一羽の隼鷹が、のせられていた。

少年の父は、庭さきへ降り立つと、隼鷹の背の美しい斑文を撫でながら、なにか、云いかけている。

日頃かたわらからはなさぬこの愛鳥に向って、話しかけるくせが、少年の父には、あった。

少年は、それで、父に、声をかけるのを遠慮した。物云わぬ蟻がどうして、黒砂糖が置かれると、すぐさま、群集りて、行列をつくるのか、父に訊ねれば、こたえがある、と思ったのであるが、少年には、父の孤独をみださぬ思慮があった。

ここは、摂津の有馬温泉の湯宿であった。

少年の父は、大名で、この湯宿は、渠の専用であった。他の客は泊めなかった。

そこは離れの中の庭で、母屋は、長い渡殿でつながれ、家臣たちは、母屋の方にいた。

離れには、少年と父と隼鷹だけが、逗留していた。

少年は、父の晩年の子で、父はすでに還暦を数年過ぎた老齢に達していた。四男である少年は、父から最も愛されていた。

父は、年に二度、この有馬へ来るが、少年はもう三年つづけて、ともなわれていた。

少年は、ふと、父の背後の縁側の下に、一箇の黒い影を、みとめて、はっとなった。

その離れの床は、四ン匐いにならずとも、子供なら、ちょっと、首をひっこめる程度で歩けるぐらい、高かった。

縁の下の黒い影は、中腰になって、じっと動かぬ。

少年は、刺客だと直感した。十二歳の少年は、父が刺客に狙われることがあるのを知っていたし、また、父が日本一の兵法者であることも、知っていた。

少年は、父に危険を報せるかわりに、父がどのようにして、この刺客の襲撃を躱すであろうか、という興味を、とっさにわかせた。ただの少年ではなかった。物心ついた頃から、木太刀をつかんで、

けんめいに兵法修業をしていたのである。
刺客は、縁側の下から、気配をひそめて、鋭く目を光らせている。
少年の父は、敵が背後にひそむことを、全く気づいていないように、愛鳥を撫でさすりながら、話しかけている。
刺客が、すこしずつ、動きはじめた。
少年は、固唾をのんだ。全身が石のようにかたくなっていた。
刺客が、陽ざしの落ちた地点まで、忍び出て来た時、少年は、思わず、声を立てようとした。
その瞬間——。
白刃を閃かしざま、刺客は、少年の父めがけて、躍りかかった。
凄じい横なぐりの車斬りであった。
同時に——。
少年の父は、腰の小刀を、抜く手も見せず刺客へ投げつけていた。
のけぞる刺客の胸に、小刀がふかぶかと、突き刺さっているのを、少年は、みとめた。
少年には、刺客の車斬りを、父がどうして躱したか、わからなかった。父は、ほとんど動かなかったからである。
少年は、立ち上って、茫然となった。
おどろくべきことは、まだ、あった。
父の左の拳の上にいる隼鷹が、もとのまま、頭を立てて、鋭い目を空に送って、動かずにいることであった。

鷹は、殺気をあびせられるや、当然、羽音高く、空へ飛び逃げるところであった。それが、動かずにいる、というのは、どうしたことであったろう。
主人を絶対に信頼しているにもせよ、鷹はやはり鳥でしかないのだ。おどろけば、飛び立つのが、あたりまえではないか。
主人が、小刀を抜きつけに投げ、刺客が血汐を宙に撒いて、仆れたのを、鷹は、全くそ知らぬふりなのであった。

二

少年の父は、柳生石舟斎宗厳であり、少年はその四男五郎右衛門であった。
石舟斎は、刺客が地面に俯伏して動かなくなるのを見とどけておいて、はじめて、隼鷹を、拳から放った。
隼鷹は、ようやく自由を得た悦びを、羽音にこめて、空高く翔けのぼって行った。
少年は、同じ場所に立ちつくして、ただ大きく目を瞠って、父を見まもっていた。
その時、なにかの用事で、離れへ来た家来が、庭さきに事切れている刺客の姿を発見して、
「これは！」
と、愕然となった。
「殿、こやつ、殿を襲うて参りましたので——？」
「うむ、多分、松永家の旧臣であろう。ていねいに、葬ってつかわせ」

「まだ、ほかにも、ひそんで居るやも知れませぬ。すぐに、探索つかまつります」
「いや、この男一人だけであろう。昨夜から、床の下にひそんでいたのを、わしは気がついて居った」
「はっ!?」
「いつ襲うて参るか、と待って居ったが……、ひどう間抜けた攻撃をして参ったものだ」
「と仰せられますと?」
「五郎が、あそこで遊んで居って、わしに、教えてくれた」
すなわち、石舟斎は、わが子の様子から、背後の敵の動きをはかっていたのである。
ともあれ、柳生五郎右衛門が、わずか十二歳で、父石舟斎の神技を見せられたことは、重大な意味を持った。

柳生家は、ただの兵法者の家ではなかった。
その先祖は、神代までさかのぼる。
神代の時、天香久山の岩戸が、双つに割れ、そのひとつは虚空に飛び去ったが、もうひとつは、大和国にとどまった。それを、神戸岩と称した。神戸岩のほとりに四庄があった。
大柳生の庄、坂原の庄、邑馳の庄、小柳生の庄の四庄である。
神代このかたの霊地として、住民らは、誇りを持っていた。
藤原家がこれを領し、頼通の時、四庄は、奈良の春日神社に寄進された。
やがて、春日神職領がさだめられ、四庄には、それぞれ領家ができた。

小柳生庄を領したのは、大膳永家であった。すなわち、柳生家の先祖である。
後醍醐帝の時世に、柳生家は、その土地を失った。
柳生家の庶子の一人が、笠置寺に入って、僧となり、中坊と称した。
元弘元年、後醍醐帝が、笠置寺に潜幸した際、このあたりに、自分を援けてくれる者がいないかと下問された時、勅答したのが、その中坊であった。
「河内の国、金剛山の麓に、楠多門兵衛正成と申す者が居ります。勇気と智略を兼備して居る豪族でありますれば、必ず帝のお役に立つことと存じまする」
この勅答が、建武の維新に際して、小柳生庄の旧領を、復せしめた。
中坊は、おのが兄永珍を迎えて、領主とした。
以来、柳生家は、連綿として、小柳生庄の豪族として、家門の誇りを継いで来た。
下剋上の戦国時代を迎えるや、小柳生庄も、権勢争奪の嵐からまぬかれることはできなかった。
足利将軍の権勢は、管領細川に奪われ、細川の権勢はやがて、その被官の三好長慶に取られた。
三好長慶とその家臣松永久秀は、急速に、その実力をのばした。
永禄初年には、三好の勢圏は、山城、摂津、河内、大和、和泉、淡路、阿波に及んだ。
永禄七年夏、三好長慶が逝くや、その権力は、松永久秀の手に移った。
小柳生庄の領主柳生家厳は、当然、三好、松永の命令下に置かれた。

三

足利将軍義輝は、三好、松永らに追われて、三度も近江へ遁れる運命を負うて居り、そのために、身を守るために剣を学び、一流の使い手であった。はじめ塚原卜伝に学び、のち、上泉伊勢守の手ほどきを受けている。

義輝は、三好長慶が逝くまで、じっと隠忍自重して、機会の来るのを、待っていた。

長慶が逝ったときいた義輝は、

——秋が来た！

と、決意した。

しかし、義輝が決意した時には、すでに、松永弾正久秀の方が、義輝弑逆のほぞをかためていた。

永禄八年五月十九日、清水詣と披露して、義輝を油断させておいて、松永の手勢は、突如、室町御所を包囲すると乱入した。

宿直の士らは、いずれも、えらばれた使い手ぞろいであったが、一人対二十人以上の闘いでは、抗すべくもなかった。

自室に在った義輝は、もはや遁れられぬ身とさとると、

　五月雨はつゆかなみだか時鳥
　わが名をあげよ雲の上まで

と、辞世をしたため了えて、秘蔵の剣を把って、立った。

その業の冴えは、忽ち、十数人の鎧武者をあの世に送った。

池田丹後守が、物蔭にひそんでいて、義輝の足を薙ぎ、倒れるところを、兵らに障子で押えつけさせておいて、槍で突いた。

義輝は、身に数箇所の深傷を負いつつも屈せず、奥へ遁れて、火を放つや、自らを焔の中へ投じて、相果てた。

三好、松永の権勢の前に、身を屈していた柳生家厳、宗厳父子も、このあまりに残忍卑劣な弑逆ぶりに、憤激した。

そして、ついに、松永に叛いて、織田信長に荷担した。

松永弾正は、天正五年十月十日、信貴の城を攻め落されて、自害したが、その戦いに於て、織田の軍勢を大和へみちびき入れたのが柳生氏である、と噂された。

松永家の旧家臣らは、柳生父子を怨み、復讐を誓って、つぎつぎと刺客となって、家厳、宗厳の生命を尾け狙ったのである。

この復讐の一念は、執拗をきわめ、織田信長の時代が終り、豊臣秀吉の時代に移っても、なお、いささかもうすれることはなかった。

柳生家厳が、八十九歳で逝ったのは、本能寺に於て織田信長が斃れてから二年後の天正十二年であった。

その時すでに、宗厳は、柳生谷の城にとじこもって、いかに秀吉に要請されても、戦場に出ようとしなかった。

もし、宗厳が、信長及び秀吉の麾下に加わって、戦場を馳駆していたならば、おそらく、数十万石の大大名になっていたに相違ない。
宗厳は、巨大な城の主になることよりも、一流の兵法者たる道を、えらんだのであった。
表裏反覆の目まぐるしい政権争奪の戦いに、宗厳は、嫌悪したのである。
宗厳に、名利をすてさせたのは、南伊勢の百六十万石の太守多芸御所・北畠具教であった。
北畠具教は、塚原卜伝から「一ノ太刀」をさずけられた新当流二代目の流祖であった。
具教は、のちに、上泉信綱からも、新陰流の奥旨を伝授されて居り、その業前は、卓絶していた。
中条流を学んだ柳生宗厳は、この多芸御所を、尊敬していた。
具教が、上泉信綱をともなって、柳生谷へやって来たのは、永禄七年春のことであった。
具教は、宗厳を信綱に立合わせて、剣のおそろしさをさとらせる目的であった。
宗厳は、若い頃、塚原卜伝から教えを受け、卜伝が去ったのちも、卜伝の高弟神島新十郎から学び、中条流の剣に於ては、天下一流と自負していたのである。
具教は、その自負をくじくことによって、宗厳に、剣のおそろしさをさとらせたかった。すなわち、剣は、ひとつの極意を会得した、と思っても、必ずしも、それが無敵のものではないことを、具教は知っていたのである。
上泉信綱は、しばらくの座談を交しているうちに、柳生宗厳が、兵法に就いて、いささか、たかをくくっている様子を、看て取った。
宗厳は、信綱が一向に立合おうとする気配をみせないのに、苛立って、催促した。
すると、信綱は、供の一人の疋田文五郎を指名して、

「お前、お対手をいたせ」
と、申しつけた。
宗厳と文五郎は、木太刀を把って対峙した。
その業は、比べもならぬ差があった。
対峙するやいなや、文五郎は、
「その構えは、悪し！」
と、云いざま、宗厳の小手を奪った。
二回目の立合いに於ても、文五郎は、同じ言葉をあびせざま、宗厳の小手を搏った。
三回目も、全く同じであった。
「その構えは、悪し！」
その声とともに、宗厳の手から木太刀を、とり落させてしまった。
宗厳には、どうして、このように小児扱いにされて、あっけなく負けるのか、判らなかった。

四

柳生宗厳は、上泉信綱の前に坐ると、何故自分が斯様にあっけなく敗れるのか、教えを乞うた。
信綱は、微笑して、
「いま一度、太刀を把られい」
と、云い、おのれは、無手で、宗厳の前に立った。

これは、兵法者としては、侮辱であった。宗厳は、憤りをおぼえつつ、青眼の太刀を、じりじりと進めた。
信綱は、両手をダラリと下げたなり、ただの静止の姿勢をとっているばかりであった。
隙があるといえば、信綱の全身は、隙だらけであった。
宗厳は、その切先が、信綱の胸前一尺まで、迫った。
撃てば、撃ったところの骨が砕けそうであった。宗厳は、そのために、一瞬、ためらった。
すると、
「何をされて居る？」
信綱の声が、催促した。
宗厳は、
「ごめん！」
ことわりざま、信綱の脳天めがけて、撃ち込んだ。
次の刹那――。
宗厳は、茫然と自失した。
信綱の五体が動いた――と視た一瞬、すでに、おのが太刀は、信綱の手に移っていたのである。
宗厳は、総身を冷汗が流れるのをおぼえた。
おのが中条流は、正統を継いだものであり、その業に於て、塚原卜伝の高弟神島新十郎から、
「充ちて居られる」
と、みとめられていたのである。

当時――。
剣を学ぶ者は、飯篠山城守長威斎の天真正伝神道流を源流として、尊んでいた。
塚原卜伝も、上泉信綱も、ともに、その出発にあたっては、まず、天真正伝神道流を学んだ。卜伝の方は、松本備前守尚勝に師事し、やがて、「一ノ太刀」を創った。信綱の方は、愛洲移香の剣をわがものにして、これにおのが独自の工夫を加えて、新陰流を編んだ。
しかし、飯篠長威斎が天真正伝神道流を創る前に、すでに、中条流は、あった。
中条流は、鎌倉寿福寺の僧慈音から起った。鎌倉幕府以前である。
慈音は、べつに、おのが剣に、何流などとは、名づけなかった。「流」などというものはなかったからである。
この剣を、鎌倉幕府の評定衆であった中条家が、継いで、代々伝えた。それでも、べつに、中条流とは、いわなかった。
中条兵庫助長秀という俊秀があらわれて、足利三代将軍義満の師範となってから、その流名がひびいた。
この中条流を、小柳生庄の柳生家が学んで、次代へつたえて来たのである。
宗厳に至って、中条流をさらに大成すべく、諸流の奥義を知ろうとしたのである。
中条流使い手として、五畿内随一という称が、宗厳にはあった。
にも拘らず――。
宗厳は、小児のごとく、疋田文五郎から太刀を撃ちおとされ、信綱からは、奪い取られてしまった。
しかし、宗厳は、屈しなかった。

「三日の御猶予をお願いつかまつる」
中条流正統を継ぐ者として、欺様に無慙な敗北を喫して、そのまま、膝を屈するわけにはいかなかった。
新陰流に対する中条流の工夫が、必ずあるべきだ、と宗厳は、考えたのである。
多芸御所・北畠具教と上泉信綱を、客館へ逗留させておいて、宗厳は、三日間、一心不乱に、業を工夫した。
そして、あらためて、無手の信綱の前に、中条流上段の構えを、とった。
結果は、全く同じであった。
宗厳は、絶望した。
その夜、更けて、宗厳は、北畠具教を、その部屋に問うて、
「あまりの未熟に、生きてゆく甲斐もなき次第に相成りました」
と、告げた。
具教は、こともなげに、
「御辺は、ここらあたりで、業をすてる必要があろうか、と存ずる」
と、云った。

五

「業をすてる、とは？」

宗厳は、訊ねた。
「御辺は、これまで、すべての面で、いささか、欲が深すぎたようだ。世俗の名利についても、また剣に於ても——。これが、わざわいして、かえって、太刀筋が狂ったかに思われる。例えて申さば、松永久秀に従って、京へのぼり、大国を領する野望を起すならば、名分なき戦さを為すために、あらゆる権謀術数を用いなければ相成らぬ。兵法者としては、これほど、心をわずらわされる邪道はないであろう。……剣の道は、覇者の道とは、全くちがって居る。いずれを、えらぶかは、御辺の自由だが……」
具教は、そうこたえた。
宗厳は、その言葉に、おのが目をひらかれた。
上泉信綱は、兵法以外に、二心のない人物であった。
功名も富貴も栄達も、心にはなかった。
信綱の居城は、上州の太胡城であったが、嗣子秀胤に与え、後見として弟主水を置き、おのれは、自由気ままに、諸国をわたり歩いていた。
太胡城は、武田信玄の支配圏内に置かれていたが、信綱は、信玄の家臣扱いにされるのを好まず、越後の上杉謙信にも、新陰流の技を示した。国取り城取りの功名心は、皆無であった。
具教は、宗厳に、
「御辺ならば、この柳生谷に、城門をかたくとざせば、兵法ひとすじに、すごすことができよう。……新陰流の剣を、享けて、後世につたえてもらいたいと思うて、伊勢守をともなったのだが、如何であろう、名利をすてる存念にはならぬか？」

と、すすめた。
宗厳は、ふかく頭を下げた。
その日から、宗厳は、大大名の道へ進む野心をすてた。
翌年、松永久秀が、軍を率いて、京へ入り、将軍義輝を弑逆した時も、宗厳は、久秀の命令をかたく拒否して、柳生谷から出なかった。
その日々は、剣をふるうことのみであった。
二年の後、上泉信綱は、再び、柳生谷の館へ現われた。
宗厳の願いによって、立合った信綱は、こんどは、無手ではなかった。
対峙して、ややしばらくすると、信綱は、すらっと青眼の木太刀を引いた。
「御精進のほど、しかと見とどけ申した」
そう云った。
それから、半年の間、信綱は、柳生谷にとどまって、新陰流の奥義を、ことごとく、宗厳にさずけた。
去るにのぞんで、信綱は、
「向後、はばかりなく、この一流兵法を、柳生新陰、と称われるがよろしかろう」
と、云いのこした。
信綱は柳生谷に在る期間、よく、
「それがしには、まだ、無刀にして勝を制する術の工夫が足り申さぬ」
と、宗厳に、云っていた。

2

新陰流の到達するところは、無刀で勝つということである。それが、信綱の念願であった。
爾来、柳生宗厳は、信綱が念願とする剣の真髄に向って、一歩一歩近づいてゆく努力をつみ重ねたのであった。
無刀の術とは、素手で勝つ、ということではなかった。不意の襲撃に対して、こちらが、刀槍を把れぬ場合がある。その時は、手にふれる何でも、これを得物として、闘わねばならぬ。その得物を、ふせぎのためではなく、反撃の武器とする。さらにまた、あたりには、手につかむべき何物もない場合がある。その時は、敵の刀なり槍なりを、奪わねばならぬ。
これは、云うは易く、為すのは至難である。
宗厳は、この境に入るべく、常に、自室の床の間には、信綱が書きのこした三首の歌を、掛けていた。

よしあしと思ふ心を打捨てて
　何事もなき身となりて見よ
おのづから映ればうつる映ると
　月も思はず水も思はず
いづくにも心とまらば住みかへよ
　長らへばまたもとのふるさと

六

宗厳には、四人の男子があった。
嫡男は新二郎厳勝、次男は宗矩（のちの但馬守）、三男は十左衛門、そして四男が五郎右衛門であった。
上の二子と下の二子は、腹ちがいであり、年齢の差があった。
宗厳は、嫡男厳勝が二十歳になると、小柳生庄を、ゆずって、おのれは、隠居のかたちをとった。
しかし、実際には、領主たることに、かわりはなかった。
天正七年、織田信長が、足利義昭を擁して、上洛した際、宗厳は、所領を安堵させるために、厳勝を、信長の許へおもむかせた。
厳勝は、大和勘定の案内者を命じられて、筒井順慶の麾下に加えられた。
その功によって、柳生家には、かなり恩賞があるべきであった。
ところが、結果は逆であった。
柳生家の家臣松田某が、厳勝を激怒させる行状を為して、追放されると、それを逆恨みして、
「柳生には、かくし田があり、上をいつわって居りました」
と密訴したのであった。
このことが、信長の耳に入った。
信長は、事実の有無を調べもせず、

「柳生から、領地を没収せよ」
と、命じた。
宗厳は、やむなく蟄居し、石舟斎と号して、いよいよ、世俗の事から遠ざかった。
嫡男厳勝は、筒井順慶の家臣となり、次男宗矩は、徳川家康に仕えた。
宗厳の許には、少年の十郎左衛門と五郎右衛門が残った。
領地を奪われた、といっても、柳生谷の館にそのまま、宗厳は住み、領民たちは、依然として、柳生家を主人と仰いでいた。いわば、命令権をうしない、あがる米を自由にできなくなったが、実際には、くらしには困らなかったのである。
少年五郎右衛門が、摂津有馬温泉の湯宿で、父の秘技を視たのは、その頃であった。
五郎右衛門が、十四歳になった時であった。
某日、一族の謀叛に遭って滅亡した北畠具教の旧臣の子息の一人が、柳生谷を訪れた。
田毎大三郎と名のった若者は、
「先日、父が亡くなる際、多芸御所を襲って、これを弑逆した不義者どものうち、襲撃隊長小野田左衛門は、まだ生き残って、織田麾下にあって、羽ぶりをきかせているのが、いかにも無念ゆえ、機会あらば、仇討せよ、と遺言つかまつりました。……しかし乍ら、それがしは、いまだ、正しい剣を学んで居りませぬ。この未熟の腕前にて、敵に立ち向えば、必ず、返り討ちに遭うものと存ぜられます。……願わくば、敵を討ちとるための業、一手をお教え下さいますよう、願い上げます」
と、乞うた。

多芸御所・北畠具教は、天正四年に、四十九歳で、滅んでいた。
具教が、北伊勢に侵入した織田信長の強引な婚姻政策に屈して、伊勢・志摩・熊野・南大和百六十万石を、信長の次男信雄と信孝を養子に迎えて、譲り渡し、隠居して、大河内城に移ったのは、四十二歳の時であった。
それから、七年後に、具教は、木造具康（日置城主七万石）田丸中務少輔（田丸城主五万五千石）ら一族の伊勢管領の謀叛に遭うたのであった。
具教は、侍臣の一人に裏切られて、毎日すこしずつ、食膳に毒を盛られて、からだが衰弱させられていた。
その年、冬になって、大河内城を出て、内山里という温暖な地に、避寒に出かけたところを、突如として、謀叛の軍勢に夜撃されて、斬り死して相果てたのであった。
その最期は、壮烈無比であった、という。
足利将軍義輝が、松永久秀勢に襲われて、十数人の鎧武者を斬り伏せたのと、よく似ていた。
ただ、具教は、毒を盛られて、身体が衰弱していたので、その闘いぶりは、義輝よりも、さらに悲惨な光景であった。
具教は、魔神に似た凄じい闘いをくりひろげて、十八人までも斬った。
そして、ついに、襲撃隊長小野田左衛門の槍を、背中に受けて、斃れたのであった。
田毎大三郎という若者は、旧主の無念を、亡父に代って、はらしたい、とほぞをかためているのであった。
宗厳は、しばらく、黙然としていたが、

「よろしい。お許に、一手を教えよう」
と、云った。
手を打って、四男の五郎右衛門を呼ぶと、
「よい機会ゆえ、そなたは、この若者の仇討の助太刀をいたすがよい。ついては、両名に、必ず、敵に勝つ一手を教える。……剣というものは、一朝一夕で学ぶことは叶わぬ。十年、二十年の精進によって、はじめて、不敗の剣を会得できるもの。しかし、仇討が明日に迫っているのであれば、これを遂げるのは、ただ一手しかあるまい。よく、きいておくがよい」
と、云うと、一刀を携えて、庭へ出た。

七

それから、五日後の、肌寒い曇り日の午后――。
十九歳の若者と十四歳の少年は、京都嵯峨のほとりの、小松の疎林の中に立っていた。
疎林のむこうに、辻があった。
帷子の辻、といい、檀林皇后の遺骸を、この嵯峨野に葬った際、帷子が道へ落ちた。それで、この地名が起ったという。
この辻から、上嵯峨、下嵯峨、太秦、常盤、広沢、愛宕へと、道が岐れる。
田毎大三郎と柳生五郎右衛門は、生れてはじめて真剣の勝負をする緊張で、顔を蒼ざめさせていた。
やがて――。

「来た！　あいつだ！」
田毎大三郎が、小さく叫んで、大きく胸を喘がせた。
多芸御所・北畠具教を討ちとった小野田左衛門は、異常なまでに大兵の武士であった。
連銭葦毛の駿馬に、うち跨って、悠然と胸を張り乍ら、近づいていた。
前後に小者が二人ずつ、そして、ややおくれて、これも大兵の八字髯のさむらいが、従って来た。
小野田左衛門が、この日この時刻、帷子の辻を通ることは、予め田毎大三郎のつきとめていたところである。
小野田左衛門が、槍の達人であることはきこえていたが、左衛門が外出すると、影の形に添うごとく、必ず、従っているその八字髯もまた、南都宝蔵院の僧あがりで、町久保胤馬という兵法者であることは、あまり知られていなかった。
町久保胤馬は、地下の娘を犯した咎で、宝蔵院を破門され、槍を把ることも禁じられていたが、その槍術を、剣の突きに応用して、凄じい迅業を放つことを、田毎大三郎と柳生五郎右衛門は、柳生谷を出る際、石舟斎の高弟の一人から、きかされていた。
石舟斎は、宝蔵院胤栄と交遊があり、したがって、柳生の高弟たちも、宝蔵院の僧たちと親しかった。
宝蔵院から破門されて、町久保胤馬と名のる男が、小野田左衛門の家来になっていることは、風の便りにきこえていたのである。
胤馬の剣の凄じい突きを、宝蔵院の僧で、見た者があった。
胤馬が、片足をふみ出した時、すでに、敵の胸から背まで、突き通していた、という。

田毎大三郎は、小野田左衛門にあたり、柳生五郎右衛門は、町久保胤馬にあたる手筈であった。
父石舟斎に命じられて、助太刀に出で立とうとした時、高弟の一人が、顔色を変えて、石舟斎に、
「若お一人にては、とうてい、町久保胤馬を討つことは、叶いませぬ。それがしに、お供を――」
と、願い出た。
しかし、石舟斎は、かぶりを振って、
「わしの秘伝を、五郎にさずけてある。相討ちになるかも知れぬが、敗れることはない」
と、しりぞけたことであった。
宗厳は、大三郎と五郎右衛門を、庭にともない、次の秘伝をさずけたのである。
「わしは、剣を学んだことのない者でも、必死になれば、必ず勝つ一手を編んで居る。いまだ、誰にも教えたことはない。いま、そちたちに教える。かりに名づけて、刀盤の法、と申しておこう。よいか、刀鋒を以て人を斬る者は敗れ、刀盤を以て人を斬る者は勝つ――このことじゃ」
そう教えておいて、宗厳は、つかつかと、石塔に近づいた。
「よいか。いま撃つのは、刀鋒だぞ」
云いざま、気合もろとも、振り下した。
塔の笠はしに、火花が散ったばかりであった。
「こんどは、刀盤を以って、斬る」
宗厳は、一歩深く踏み込みざま、白刃を撃ち下した。
塔の笠は、見事真二つになって、地面へ落ちた。
「わかったであろう。切先で人を斬ろうとすれば、刀は敵にとどかず、かえってわが身が斬られる。

鍔を以って、敵を突き倒すなり、敵の剣を打ち砕くなり、敵の軀へおのが鍔をたたきつける心得で、斬り込めば、見事に勝ちを得る。このことを忘れず、敵に向うがよい」

大三郎と五郎右衛門は、宗厳の教えを胸に容れて、柳生谷を出て、京都へ向って来たのであった。

八

大三郎は、松の木立をくぐり抜けて、帷子の辻へ、奔り出ると、

「小野田左衛門殿とお見受けいたす。それがしは、北畠具教が旧臣田毎大三郎と申す。主君の無念を、いま、はらしたく存ずる」

と、叫び、次の瞬間、先頭の小者へ向って、躍りかかるや、持っていた長槍の柄を、両断した。

五郎右衛門の方は、町久保胤馬の背後へとび出して、

「柳生五郎右衛門、義によって、助太刀！」

と、叫んだ。

大三郎の方は、槍を使えなくすれば、小野田左衛門と互角の勝負ができる自信があった。

五郎右衛門の方は、町久保胤馬の飛電の突きに対して、刀盤の法で、文字通り必死の闘いを挑むことになる。

町久保胤馬は、ゆっくりと踵をまわし、自分に向って来たのが、むしろ華奢なからだつきの少年であるのをみとめて、眉宇をひそめた。

「柳生、と名のるところをみると、柳生谷の倅か？」

「柳生石舟斎が四男にござる」

「ふむ。柳生の倅ならば、対手にとって不足はない、と申したいところだが、まだ乳くさいわっぱでは話にならん」

吐きすてたものの、胤馬は、五郎右衛門の青眼の構えを視て、

——これは！

と、内心思った。

構えそのものは、手練者も未熟者も、そう差があるものではない。

一瞥して、これは強い、と判るのは、その刀身と姿勢に充ちている心気を、こちらが、感ずるからである。

人間と人間の闘いである。心気が充ちているか否か——これは、おのずと、おのが鍛練次第で、こちらに判って来る。

こちらが、未熟者ならば、未熟だけの判りかたしかしないであろうが、熟達していればいるほど、対手の強弱の程度が、つたわって来る心気から、はかることができる。

胤馬は、五郎右衛門の青眼の構えが充たしている心気が、とうてい十四五歳の少年のものとは思われず——いや、一流兵法者のものであることを、知った。

そうと知れば、対手が少年であることは、手加減の理由にはならぬ。

「よし！」

胤馬は、すらりと、刀を鞘走らせた。

槍術使いだけあって、その差料は、三尺を越えていた。

胤馬は、その長剣を、手もとへ引きつけるように、独特の突きの構えをとった。
胤馬の構えは、あきらかに、突きの一手しかないものであった。
と――。
五郎右衛門は、その青眼の白刃を、ゆっくりと、下げはじめた。
地摺りに下げた時、いつの間にか、刃を上に、峰をかえしていた。
これは、父石舟斎宗厳から教えられた業ではなかった。
柳生谷から京都へ出て来るあいだに、おのが脳裡で、工夫した業であった。
町久保胤馬の凄じい突きの迅業に、互角の勝負を挑むには、最も効果ある刀盤の法を放たねばならぬ。
刀盤を対手の軀へたたきつけよ、と父は教えてくれたのである。
そうするためには、猛然と躍り込まねばならぬ。しかし、胤馬の迅業は、突きの一手である。
ただ、遮二無二躍り込むことは、飛んで火に入る夏の虫の惨めさをさらす結果を招くに相違ない。
胤馬の突きを排除して、刀盤の法を放つには、
――よし、地摺りの逆斬りだ！
五郎右衛門は、そう思いさだめたのである。
「ふむ！」
胤馬は、五郎右衛門の地摺り峰がえしの構えを見て、にやりとすると、
「小ざかしゅう工夫したのう。……それで、勝てるか」
と、あざけった。

五郎右衛門は、口を真一文字にひきむすび、頬に朱を滲ませて、無言であった。
馬をへだてて、田毎大三郎と小野田左衛門、胤馬と五郎右衛門が、対峙して、そのまま、しばらく、四人は、固着状態にあった。
つと――。
五郎右衛門が、一歩踏み出した。
六歩以上あった距離を、五郎右衛門の方から、縮め出したのである。

九

胤馬は、えじきがむこうから寄って来るのを待つ毒蛇のように、まばたきをせぬ冷たく鋭い眼光を、放射して、微動もせぬ。
五郎右衛門は、じりじりと迫って行く。
急に、松の枝に、ぱらぱらと雨の落ちかかる音がした。
雨の音は、それだけでおわった。
次の瞬間――。
五郎右衛門が、雄叫びのような気合を噴かせて、胤馬めがけて、身を躍らせた。
はがねの鳴る音とともに、胤馬の長剣が、なかばから折れて、宙へはねとび、松の梢へ消えた。
五郎右衛門と胤馬は、吸いつくように体を合せて、動かなかった。
胤馬の背中から、三尺ちかくも、白刃が突き出ていた。文字通り、五郎右衛門は、刀盤もとまで、

対手の胸を刺し貫いたのであった。
五郎右衛門が、身を躍らせた刹那、胤馬は、飛電の突きを放って来た。逆斬りの五郎右衛門の剣は、その突きの長剣をはじきざまに、胤馬の胸を貫いたのであった。
長剣は、はじかれるや、真二つに折れて、飛んだのである。
まことに、胤馬の最期は、凄じかった。
五郎右衛門と咫尺の間に顔を合せ乍ら、くわっと双眼をひき剝き、事切れた。事切れ乍ら、口から、だらだらと、血汐を流した。
五郎右衛門は、その凄愴きわまる形相に、思わず、目蓋を閉じて、白刃を、胸からひき抜こうとした。
しかし、容易に抜けなかった。
やむなく、からだをからだにぶちつけて、胤馬をうしろへ倒れかからせておいて、さっと引き抜いたが、勢いあまって、おのれも、しりもちをついた。
はっと、われにかえって、はね起きてみると――。
田毎大三郎は、辻わきの石地蔵尊へ、ぴったりとくっつくあんばいに、追いつめられていた。
小野田左衛門は、大刀を右手に、そして、左手には、柄を両断された槍を摑んでいた。小者に渡されたものに相違ない。
大刀をまっすぐに突き出し、槍を頭上高くかざして、左衛門は、大三郎を、じりじりと追いつめていたのである。
五郎右衛門は、近づくと、

「大三郎殿！　刀盤の法じゃ！」
と、叫んだ。
追いつめられた者の、恐怖の表情をうかべていた大三郎は、その助勢の声に、にわかに、生気をとりもどした。
左衛門の方は、少年が胤馬を討ちとったことを知って、愕然となり、その少年にそばへ迫られて、神経を二つに分けなければならなかった。
一瞬――。
左衛門は、先手を打って、ふりかざした槍を、大三郎めがけて、投げつけた。
穂先は、大三郎の耳朶を掠めて、石地蔵尊を襲った。
地蔵尊の首が、ころがり落ちた。
「とおっ！」
大三郎の口から、満身の鋭気をこめた叫びがほとばしった。
結果は、胤馬に対する五郎右衛門の成功と、同じであった。
大三郎の剣は、左衛門の胸をふかぶかと貫き、背から三尺も、切先を突き出した。
柳生五郎右衛門は、そのまま、柳生谷には還らず、諸国放浪の旅をかさねた。
五郎右衛門は、兄弟の中では、最も凡庸な生れつきのように、周囲から眺められていた。
気象に激しさがなく、寡黙で、行動が目立たなかった。宴席などで、他の兄弟は、それぞれ個性の強さで、存在をあきらかにしていたが、五郎右衛門だけは、そこにいるのかいないのか、人々の目か

らはずれてしまっていた。
道場に於ても、その稽古ぶりは、あまりに尋常すぎて、門弟たちの激しい稽古の蔭に消えてしまっているようであった。
したがって、石舟斎宗厳以外は、五郎右衛門に、はたして、天稟があるのかどうか、判りかねた。
「一人ぐらいは、凡庸なのも生れる」
そうかげ口をたたく者もあった。
十四歳のその日まで、五郎右衛門の天才を示すような逸話は、ひとつもなかったのである。
しかし――。
宗厳だけは、五郎右衛門こそ、四人の息子の中で、最も秀れた兵法者になるのではあるまいか、と看てとっていたようである。
だからこそ、敢えて、その仇討に助太刀させたのである。そして、諸国を経巡るように、命じたのであった。

十

柳生五郎右衛門が、放浪の旅のあいだに、どのような逸話をのこしたか、殆ど記録にはない。
しかし、次兄但馬守宗矩や、三兄の十左衛門宗章と、あやまって、伝えられた逸話がある。
関ヶ原役後のことであった。
五郎右衛門は、江戸へ出て、徳川家の兵法師範役となった次兄但馬守宗矩の道場へ、立寄った。

宗矩が、登城して留守の午さがり、一人の托鉢僧が、道場の前へ来て、武者窓から覗き込み、
「これが、将軍家師範道場の稽古ぶりかのう。ふくろ竹刀で、ばちゃばちゃ叩き合うて、兵法修業とは、さても、子供だましじゃ」
と、大声で云った。
門番が出て来て、「乞食坊主め、雑言許せぬぞ。早々に失せろ！」と、呶鳴りつけた。
しかし、托鉢僧は、一向に、立ち去る気色もなかった。
五郎右衛門が、江戸の市中見物から帰って来て、この光景を眺め、
「貴僧、道場へお通りめされ」
と、いざなった。
座敷へ招じた五郎右衛門は、托鉢僧に、
「出家の姿をして居られるが、貴僧は、おそらく、兵法の業を心得て居られると、存ずる。何流をお使いであろうか？」
と、訊ねた。
僧は、笑って、かぶりを振った。
「愚禿は、剣などふりまわしたことはないの。どだい、剣に、流儀をたてるのが、おかしなものと存ずる。剣などというものは、道場で、木太刀やふくろ竹刀をふりまわしただけで、上達いたすものではないと思うが、どうであろうかな」
「貴僧は、そのような稽古をせずとも、托鉢をして、経文を誦しているだけで、極意を会得できる、と申されたいようだが――」

「そうさの。天才をむこうにまわすのなら、いざ知らず、道場で、叩き合うている手輩が対手なら、造作もない」
「では、それがしと、立合って頂けるか？」
「やってみしょうかの」
五郎右衛門は、托鉢僧を、道場に案内すると、
「木太刀でも、槍でも、薙刀でも、ご自由に――」
と、すすめた。
「出家は、得物など持たぬよ」
僧は、かぶりを振った。
「それでは、立合いに相成らぬ」
「いや、それが、立合いになるのじゃな。……ま、向うて来てみなされ。もし、愚禿が、脳天を割られても、御辺に責任はない。わしは、あんばいよろしく、極楽へ参るゆえ――」
僧は、笑った。
やむなく、五郎右衛門は、無手の僧に対して、木太刀を青眼に構えた。
僧は、うっそりと佇立して、動かぬ。
五郎右衛門は、ものの半刻も、青眼固着の構えを保っていたが、やがて、撃ち込もうともせず、しずかに、一歩退って、木太刀を下げた。
「どうされたな？」
僧が、訊ねた。

「撃ち込むは易しと思えるものの、ついに、撃ち込むことが叶い申さぬ」
五郎右衛門は、こたえた。
僧は、ただ、きわめて自然に佇立していたばかりであった。べつに、鋭気も発しなければ、五郎右衛門がこころみに放った殺気をはじきかえそうともしなかった。
いわば、案山子同様であった。
案山子を撃つことは、造作もないことであった。しかし、案山子を撃ったところで、何になろう。
五郎右衛門は、そうとさとって、立合いを止めたのである。
僧は、再び、座敷で、対座すると、
「如何かな。無手の者を撃つことは、叶いますまい」
「まさしく――」
「これが、剣の極意と申すものでは、ござるまいかな」
「……」
「無手の者は、撃てぬ――これだけのことじゃな、ははは」
托鉢僧は、沢庵であった。

十一

同じ年のことであった。
五郎右衛門は、松平出羽守直政邸に、招かれていた。

恰度、そこへ、高名な一刀流の兵法者が、来合せていた。
偶然ではなく、出羽守が、柳生新陰流の真髄を観ようとして、その兵法者を呼んだのである。
五郎右衛門は、固辞した。
一刀流の兵法者は、
「お手前は、将軍家師範の但馬守殿ではござらぬ。武者修業の一兵法者ではござらぬか。立合うて、なんの不都合がござろうか。……もし、お手前が、忌避されるに於ては、一刀流をおそれたことに相成り申すぞ」
と、迫った。
兵法者としては、この機会をはずして、柳生家の者との立合いは、のぞまれぬと思って、その挑戦は、執拗であった。
五郎右衛門は、しかし、なお、黙念として、動かなかった。
「柳生五郎右衛門、これまでに所望されて、立たぬことやある」
出羽守直政は、そう云って、木太刀を二振り、両者の前に置いた。
一刀流の兵法者の方は、さっと、木太刀を把って、立ち上った。
その時、五郎右衛門が、
「お主――」
と、呼んだ。
対手は、振りかえった。
刹那――。

五郎右衛門は、片膝を立てざま、抜きつけの一閃を、対手に送った。
一刀流の兵法者は、顔面から肋骨まで、まっ二つに両断され、血飛沫の下で、崩れ落ちた。
出羽守直政は、仰天して、息をのんだ。
五郎右衛門は、白刃を鞘に納めると、やおら、出羽守直政に、向きなおり、
「卑劣の振舞いとお受けとりでありましょうが、対手が木太刀を把った瞬間から、試合は開始されたものと心得えて、それがし、斬りすてたのでござる。それがしは、もとより、若年にして未熟者でござるが、兄但馬守は、将軍家師範役でござる。それがしが、もし、この処にて、おくれを取るようなことがあれば、柳生の流儀に、疵がつき申すのみならず、柳生流は一刀流に劣ると、風聞が立ち、一刀流より劣る流儀を以って、将軍家にお教え申し上げるのか、とあざけられるおそれもござる。それゆえ、この御仁には、申しわけなきこと乍ら、やむを得ず、先手を取って討ちすて申した。……爾今、兵法者同士を、立合せようなどと、かるがるしくお考えなきよう――」
そう云いすてておいて、しずかに立つと、松平邸を去った。
この心得を以て、諸国を経巡ったのであるから、五郎右衛門が、剣道史にのるような華々しい試合を一度も、行わなかったのは、べつにふしぎではない。
しかし、五郎右衛門の最期は、壮烈無比であった。
五郎右衛門は、諸国を経巡っているうちに、伯耆国飯山城の客となった。
飯山城のあるじは、横田内膳村詮といい、中村伯耆守忠一の重臣であった。
当時、中村忠一は、まだ十七歳であった。
父の中村式部少輔一氏は、豊臣秀吉の三中老の一人として、重んじられていたが、関ヶ原役の直後、

病没していた。
　忠一は、わずか十一歳で、伯耆米子十八万七千石をうけ継いだのであった。忠一は、きわめて早熟であったが、それは、いい意味ではなかった。文武の道の忍耐と努力には、堪えられぬかわりに、酒色に耽ることは、十四歳からおぼえた。
　恰度、五郎右衛門が、飯山城の客となった頃であった。
　忠一は、城内に、花見の宴をひらき、家臣の家族を招いた。
　家臣の娘や妻たちを、物色した忠一は、三人の女性を、城内にのこした。そのうちの、一人は、人妻であった。そして、その一人は、婚礼をすませたばかりの新妻であった。
　新妻は、忠一に犯された翌日、城内の井戸へ身を投げて、果てた。
　これをきいた横田内膳が、急遽飯山城から馬を馳せて来て、厳しい態度で、忠一を諫めた。
　忠一には、多摩九郎左衛門という佞臣がいた。
　忠一が、内膳に諫められて、不快な面持でそっぽを向いている時、多摩九郎左衛門が、手槍を摑んで、背後から、忍び寄り、内膳の背中を、貫いた。
　忠一とすれば、内膳を殺すほどの度胸はなかった。
　多摩九郎左衛門が、断りもなく、内膳を殺したことは、忠一を愕然とさせた。しかし、もはや、手おくれであった。
「横田内膳殿は、急病にて、相果てられました」
　冷然としてそう云う多摩九郎左衛門に、忠一は、おののきつつ、うなずいた。

十二

　いかにかくそうとしても、内膳暗殺の報は、やがて、飯山城に、もたらされた。
「主、主たらざれば、臣、臣たらず！」
　内膳の嫡男主馬助は、激怒して、兵を集めるや、飯山城にたてこもって、主家に叛旗をひるがえした。
　柳生五郎右衛門は、当然、城から去るべきであり、主馬助も、それをすすめたが、
「義をみてせざれば、勇なきなり、という言葉がござる」
と、微笑して、かぶりを振った。
「しかし、この城にたてこもったわれら一同、一人も生き残ることは叶い申さぬ。ただ客である御辺を、まきぞえにすることは、出来申さぬ」
　主馬助は、心から、そう云ったが、五郎右衛門は、肯かなかった。
「それがしは、柳生但馬守宗矩の弟でござる。されば、これまで、他流との試合を避けて来申した。ただの一度として、名ある試合をいたして居り申さぬ。……いまこそ、それがしの剣が、どれだけの働きをいたすか、それをためすのに、絶好の機会と存ずる。……合戦ならば、たとえ、流れ弾丸に当って、斃れようとも、柳生流の恥とはなり申さぬ」
　五郎右衛門の言葉に、主馬助は、ふかく頭を下げて、
「ご助勢、忝く存じまする」

と、礼を述べた。
やがて——。
飯山城は、中村忠一の軍勢にかこまれた。
松江の城主堀尾帯刀吉晴が、この攻囲軍を援助した。堀尾吉晴は、出雲・隠岐二国二十三万石の領主であった。
飯山城が、この大軍の攻撃を受けて、とうてい十日と保ちきれるものではなかった。
落城の日が来た。
五郎右衛門は、背中に一振、腰の左右に一振りずつ、そして、右手と左手にそれぞれ太刀を掴んで、城門から、疾風のごとく、奔り出るや、ひしめく敵陣に、斬り込んだ。
一太刀ずつで敵兵を斬り仆すその迅業は、異様なものであった。
五郎右衛門は、左右の白刃を峰をかえして、掴んでいた。
三人まで斬ると、その白刃をすてて、腰の剣を抜いた。
そして、はねあげざまに、敵の顔面をまっ二つにした。
魔神にも似たその凄じい働きぶりに、敵の陣形は、崩れた。
そこへ、主馬助を先頭に、百名が、斬り込んだ。
修羅場が、城門外の広場から、松林の中に移った時、主馬助以下、大半の飯山勢は、討ちとられていた。
五郎右衛門だけが、なお、全身蘇芳染めになり乍ら、生き残っていた。受けているのは、浅傷だけであった。

その手には、ついに、背負っていた剣だけになっていた。しかし、それは、父石舟斎から与えられた貞宗の名剣であった。
五郎右衛門は「逆風の太刀」と名づける新陰流の古勢をもって、すでに、十八人を斬っていた。
敵勢は、その凄じい迅業におそれをなして、遠巻きにして、五郎右衛門が、身を移すにつれて、包囲陣を移動させていた。
松林の中であり、修羅場としては、五郎右衛門にとって、有利であった。
そこへ、馬を駆って来た堀尾家の侍大将藤井助兵衛が、
「柳生五郎右衛門、働きのほど、見とどけ申した。剣をすてられよ。捕虜とはせぬ。立去ってよい」
と、叫んだ。
五郎右衛門は、冷たい眼眸をかえし、
「それがしは、兵法者。剣をすてて、降服したならば、末代までの名折れになり申す」
と、こたえた。
「降服したことには、決していたさぬ。客分としての働きを示して、立去るのを、見とどけ申すまでだ」
「ご厚志は忝いが、こうして、剣を持って闘っている上からは、兵法者らしく、限りある身の力を、ためしたく存ずる」
藤井は、五郎右衛門の決意が動かぬとみてとって、
「やむを得ぬ」
と、鉄砲隊に、下知した。

十挺の鉄砲の狙い撃ちを受けて、五郎右衛門は、よろめき、松の幹へ倚りかかった。
そして、枝のあわいから、空を仰いだ。
その眸子には、おそらく、柳生谷のたたずまいが、うかんでいたものであろう。
慶長九年十一月十五日のことであった。
柳生流古勢「逆風の太刀」は、五郎右衛門をもって、絶えた。

木乃伊館

昭和四十六年四月二十五日 第一刷
定価 五八〇円

著者 柴田錬三郎（しばたれんざぶろう）
発行者 樫原雅春
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一
郵便番号一〇二
印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Renzaburo Shibata Printed in Japan

0093-301950-7384